

浦和レッズ第三者委員会

報告書

2024年3月

はじめに

2023年8月2日(水)に、名古屋市で当該事案が生じたことから、浦和レッズ内に、再発防止策の一環として、第三者委員会が設置され、私たち8名が任命されました。11月14日(火)の第1回委員会から計5回の会議が開催され、皆で集い議論し、その間に精力的に調査分析の作業を行いました。また、その中間点の2024年2月16日(金)には、公開シンポジウムを開催し、185名の参加者を得て、それまでの委員会の活動報告を行うとともに、田口 誠代表に「提言の骨子」を手渡しました。本報告書は、その骨子に基づいた具体的な内容と委員会での主要な論点などを整理して構成しています。

下記に、委員会の経過を述べます。

1. 委員会は、委員会規程第2条に記載されている通り、「当該事案および事案以前のクラブサポーターの違反行為に対するこれまでのクラブの対応を分析し、再発防止策とクラブおよびファン・サポーター等の教育啓発策を検討・実施し、サッカーおよびスポーツ全体の普及振興に寄与することを目的として設置」されました。
2. 委員会の構成メンバー8名は、大学の教育・研究者、ジャーナリスト、弁護士、医師と多様な立場の専門家です。いずれも、長くスポーツに関わる活動に従事してきた者ばかりであり、日本のスポーツ界がよりよく発展することを願って、この委員としての活動を行ってきました。
3. 私たちは、警察官でもなく検察官でもなく、誰かを追及したり処罰することを目標としてはいません。ただ、日本サッカー協会規律委員会が、「過去に類を見ない極めて危険かつ醜悪なもの」と断ぜざるを得なかった事態が、なぜ起きたのかを客観的に分析し、その背景と発生要因を検討し、今後行うべき具体的な対応を示す提言を行うことを目指して活動してきました。

公開シンポジウムの開催は、第1回の委員会の場で、全員の合意によって決定され、スポーツ・コンプライアンスの基本である、活動の「公正・公平・迅速・透明」を保ち、「遅れず、隠さず、ごまかさず」に事後対応を図ることを重視して実施したものです。

4. 委員会発足当初、委員長に武藤、副委員長に結城委員を決め、委員会に与えられた使命を果たすべく、6名で3つのチームを形成し、下記のそれぞれの作業を分担しました。

Aチーム：松瀬委員・高橋委員、「不適切行為の原因分析」

Bチーム：山本委員・ゼッターランド委員、「これまでクラブが講じてきた対策についての評価と洗い出し」

Cチーム：望月委員・竹村委員、「今後の必要な対策の提言検討」

各チームが、それぞれ独自に活動しつつ、その結果を、委員会で報告し合い、情報共有して検討を重ねて、次の作業に進めるという方式でした。

古くより、「禍福は糾える縄の如し」と言われます。良くないことと良いことは、縄をより合わせたように入れ替わり変転するものだとされています。昨夏の当該事案は、浦和レッズにとっては、まさしく禍(わざわい)であり、間違いなく良くないことでしたが、それを契機に皆で協力して、福に切り替え、良いことが生まれるように努めることが重要と考えています。

サッカーが大好きなこの地域の子どもたちにとって、浦和レッズの活躍は、誇りであり、希望であり、目標でもあります。勝つときもあれば、負ける時もあります。成功もあれば失敗もあり、栄光もあれば挫折もあります。だからこそ、スポーツは「人生の縮図」と言われて、地域文化の一つとして市民から支えられ、大切にされてきたのです。

これからも、浦和レッズのファン・サポーターの皆さんが、燃え上がる炎のような鮮やかな赤色(レッド)に象徴される熱情と仲間意識と凛々しさを有した振る舞いを実践する存在であってほしいと強く希望しています。

本報告書が、その大きな変化に向けての道標となることを切に願っています。

最後に、本委員会の活動に当たって、種々ご支援・ご協力いただいた数多くの皆様に、厚く御礼を申し上げます。

2024年3月

浦和レッズ第三者委員会委員長 武藤 芳照

目 次

報告書の要旨	1
認定された事実と処分内容	5
第三者委員会委員プロフィール	11
各チームからの報告	
Aチーム	13
Bチーム	19
Cチーム	27
公開シンポジウムの概要	
第三者委員会設置趣旨	35
プログラム	35
主催者代表挨拶	37
当該事案経緯説明および事後対応等についての説明	37
委員会提言手交後の挨拶／阿部勇樹氏の指定発言	39
座長メッセージ	43
メディア参加者概要	43
提言の内容	44
巻末資料	
委員会規程	49
委員会開催記録	51
調査資料(Aチーム)	
関係者へのヒアリング結果、主なAI質的分析データ一覧	56
報道実績一覧	64
あとがき	66

浦和レッズ第三者委員会

報告書

報告書の要旨

2023年8月に起きた一部サポーターの違反行為。その要因を客観的に探り、今後に向けた提言を行うことが、第三者委員会に課せられた責務だった。多くの方のヒアリングを行い、識者の知見に照らして資料を分析する中で、浮かび上がって来たことがある。それは、今回の違反行為が、特定の条件が重なったことによる単なる偶発的なものではなく、その底流には、分析をした過去13回の事案にも通じる「要因」が見え隠れしていることだった。

その要因をどこまで特定できるのか。浦和レッズの熱い文化を形作ってきた側面もある、その特性のどこにリスクを見るのか。未来に向けて、実効性のある意識や行動変容を創り出すにはどうしたらいいのか。これが、委員会の持ち続けた問題意識である。

この報告書は、委員会の調査・提言活動の流れを詳しくまとめたものだ。その概要と、本文中の掲載ページを以下に示したい。

Aチーム報告

テーマ「関係者のヒアリングと過去事案の資料検証による原因分析」

Aチームは、計15人、延べ18時間のヒアリングを行い、特に浦和レッズのサポーター7人から、応援文化の特性や、違反行為におよぶ際の心理を聞き取っている(13ページ)。なぜ、相手サポーターからの挑発発言に過剰なまでの反応を示したのか。証言からは、熱狂的な応援を旗印とする「**レッズサポーター気質**」の裏返しとして、違反行為を誘発し拡大させる集団心理が働いたことが浮かび上がる。また、現役選手のヒアリングでは、サポーターの違反行為の責任をクラブがかぶる「**親子のような**」**関係への違和感**が指摘されている。さらにサッカーを志す中学生のファンからは、レッズやサポーターの応援への憧れとともに、「選手に迷惑をかける」あり方への疑問も聞かれ、**将来世代に与える影響の大きさ**を示唆している。

他方Aチームは、過去13件に上る事案の分析を行い、興味深い傾向も見出している(16ページ)。事案が発生する際の対戦相手には偏りがあること。近年件数が増える傾向が見られること。そして大きな社会的事案が起きた後は抑止効果が働くものの、一定期間をおくと、事案を経験していない新しいサポーター層によって再び問題が発生する傾向があることなどだ。ここから推論できるのは、**不適切事案を引き起こす土壌**が根底にあり、そこに目を向けたより深い変革が必要だ、という重要なポイントだろう。

Bチーム報告

テーマ「クラブが取った対策についての評価と問題点の洗い出し」

Bチームは、クラブ内外の計8人の関係者に、あらかじめ設定した質問項目を問う形でインタビューを実施。2023年8月の事案について、事前のリスク把握や当日の試合前から試合後の動きまで、時間経過とともに対応を分析し、評価する手法を採った。これにより、いくつかの「落とし穴」があったことがあぶり出されている(19ページ)。

事前のリスク把握については、「トラブルの可能性は低い」「運営目線では間違いなくハイリスク」と、クラブ内における危機感に温度差があったこと。当日の対応については、鳴り物を持ち込めないという規制があったため、持ち物の検査に注意が集中し、「ピッチは神聖で降りるはずはない」という思い込みが枷^{かせ}となったこと。サポーターの要求に従い行われたクラブの強化部担当者との対話が、事態を沈静化させるだろうとの過信と、所轄の警察官の撤収が重なったことなどだ(特性要因図①「危険認識と対策」)。

Bチームはさらに、関係者から得た「過去からその火はくすぶっていた」というコメントに注目。評価に当たって、当日までのハード面を軸とした対策のみならず、ソフト面特にクラブとサポーターの長年におよぶ関係性に要因を見る必要性を指摘している(23ページ)。

象徴的なのは、一部サポーターが怒声に近い命令口調で強化関係者を呼びつけている事実だ。関係者からも、「サポーターの方がクラブよりもパワーが大きくなってきていると感じる時がある」などと、パワーバランスへの違和感が聞かれた。サポーター側の、クラブを支えて来たという自負や熱意は理解できるが、越権行為に近い度を越した要求をクラブ側が受け止め続けることは、こうしたクラブとサポーターの関係性を助長することにもなる、と警鐘を鳴らしている(特性要因図②「クラブとサポーターの関係」)。

Cチーム報告

テーマ「クラブへの提言」

Cチームは、A・Bチームの分析と評価を受けて、クラブに対する提言を整理する役割を担った。問題行動を発生させる動機、それを許す機会(環境)に分類し、それぞれを解消・低減するために、クラブには何ができるかという視点で考察した(27ページ)。

問題行動を発生させる動機とは、①暴力的言動を肯定してしまう意識や認識面の歪み②強固な独自のアイデンティティが形成されることで、対外的には排他性や攻撃性が生じやすくなる集団心理、などが当てはまる。Cチームは動機の解消や抑止に向けた長期的アプローチとして、教育・啓発活動の重要性を挙げ、さまざまな層に向けて取り組みを継続することに加え、違法行為や規程違反、観戦マナー向上に向けた周知徹底の工夫を提言している。

加えてCチームは、A、Bチームの分析にもあったようなクラブとサポーターの関係性の歪みに言及。独自の強烈なアイデンティティは価値をも生むが、問題行動の基盤となり得る場合もあるとして、サポーターとクラブ、選手等がともに追求できる上位概念(理念など)に基づいた、行動規範の浸透と健

全な関係性構築を提言している。クラブには、ビジネス倫理の視点からも、社会の規範意識を踏まえた「安全・安心なスタジアム空間」をつくり守る責務があると指摘する。

問題行動を許す機会(環境)を解消・低減する対策としては、スタジアムの環境や構造、運営面、規程や法的整備など、ハード面にかかわるものを挙げている。従来の対策のあり方に評価を与えつつ、特にアウェー(ビジターゲーム)での対策の見直しと、サポーターの問題行動により制裁を科された場合に、それがクラブのイメージや経済的損失、選手強化、未来世代等にどのような影響を及ぼすのかという、「制裁を科された場合の影響の可視化」による抑止を提言。また、違反行為への制裁内容をより明確にすることが、理解促進と抑止につながるとして、さらなる規程整備を求めている。

Cチームはさらに、改革の第一歩は、従来のサポーターに対する対応や処罰のあり方を含めて、クラブ側のガバナンスに対する意識や対応が不十分であった点を認識することだとし、独立性の高いコンプライアンス部署の設置を呼びかけている。

公開シンポジウム開催と 阿部勇樹氏の登壇

第三者委員会は、2024年2月16日、「浦和レッズ第三者委員会公開シンポジウム」を開催した。社会的な透明性を担保するとともに、浦和レッズの今後に資するような、意識や行動の変化に少しでもつなげてもらえれば、と意図しての試みだった。

サポーターやファンの人々の心に届く言葉を持つのは、おそらく選手だろう。委員会は総意で、一人の指定発言者の登壇を依頼することに決めた。主将としてもチームを率い、代表経験を持ち、現在はユースで指導に当たる阿部勇樹氏だ。「試合に臨むより、緊張するんです」としながらも、阿部氏は登壇を快諾し、自分の言葉で語りかけてくれた。

現役選手、そしてそんな選手たちの試合を見ることで成長する若い世代にとって、天皇杯への出場権剥奪という制裁はどんな意味を持つのか。

指導するユースの選手たちには、ジュニアユースの選手たちの憧れの存在として、誰に見られてもおかしくない行動をしようと語っていること。翻^{ひるがえ}って、サポーターの人々は、熱い応援に憧れる子どもたちの手本となる行動ができているのかどうか。多くの方がそうでも、一つのできごとで、皆が積み上げてきた大切なものが簡単に壊れてしまうこと。

こうしたことがあった後が大事で、浦和レッズが本当に一つになれた時に発揮できる力を信じていること。それを未来につないでいくことが、今の自分たちの責任であること。

「みなさんの浦和レッズへの気持ちは十分理解しています。一つの方向に向かってやっていくことは難しいですね。だって多くの人がいるんだもん。だけど良くなるっていう目標は絶対忘れないでほしい。みなさんが目指すもの、浦和レッズの姿というものは、同じだと思っている。仲間が失敗したら、二度とそのミスが起きないようにサポートしてあげる。これがチームプレーだと思います」

彼の真摯な呼びかけに、会場からは大きな拍手が湧いた。

この報告書にも、シンポジウム概要と阿部氏の発言を再録する(40ページ)。

提言の骨子

シンポジウムの最後には、第三者委員会の武藤芳照委員長より、浦和レッズの田口 誠代表に、第三者委員会の提言骨子が手交された。報告書の終盤にはこの骨子を、第三者委員会が得た知見や考えの筋道を付記する形で再掲している(44ページ)。

1. 当該事案ならびに過去10数件におよぶ違反行為の三大発生要因すなわち動機、機会、正当化、特性要因を確認、点検し、それらを提言して同様の事態が生じないように、具体的な再発防止策および未然防止策を速やかに構築すること。
2. マナー違反、ルール違反、法律違反とその防止に関する教育、啓発、周知広報活動の拡充とともに、それぞれの処分規定と制裁制度の整備およびルールの明確化と運用の統一を図ること。
3. 安全・安心なスタジアム空間をつくり、守ることがクラブとしての社会的責務であることへの意識変革を図り、具体的な改善策を実施するとともに、選手、スタッフ等へのコンプライアンス教育啓発事業を継続すること。
4. 健全な応援文化の醸成を図り、勝利への追求や浦和を支える熱意、サポーターのアイデンティティが両立するように、ソフト面、ハード面への改善に努める。
5. 独立性の高いコンプライアンス部署を設置し、課題の整理、具体的に違反行為の防止策の立案と処分制裁のあり方を評価するとともに、クラブ内およびサポーター、ファン、地域の市民、とりわけ子どもたちへのスポーツの価値に関わる教育、啓発活動を展開すること。
6. 浦和のサッカー文化の伝統と熱情を継承しつつも、必要な意識の変革を図り、スタジアムが多様な人々の絆と誇りと力と笑顔の場所となり、それを未来へとつなげられるように尽力すること。

認定された事実と処分内容

公益財団法人日本サッカー協会
【規律委員会】2023年9月19日付 公表

1. 対象者

浦和レッドダイヤモンズ

2. 懲罰

- (1) 2024年度天皇杯(天皇杯 JFA 第104回全日本サッカー選手権大会)の参加資格の剥奪
- (2) 譴責(始末書の提出)

3. 根拠条項

懲罰規程 第4条第2項(2)および(15)、第27条、〔別紙1〕3-7
天皇杯試合運営要項 第30条

4. 理由等

(1) 嫌疑

マッチコミッショナーおよび本大会実施委員会からの報告およびその後の映像分析等に基づく対象者の嫌疑の概要は以下のとおりである。

(嫌疑の概要)

対象者は、自チームのサポーターに対して試合後においても秩序ある適切な態度を保持するよう努める義務を怠り、2023年8月2日(水)にCSアセット港サッカー場にて行われた本大会4回戦対名古屋グランパス戦の試合(以下、「本試合」という。)において、試合終了から約20分後より、多数(合計70名以上)の対象者のサポーター(以下、「本件サポーターら」という。)が暴徒化して以下に掲げる当協会試合運営管理規定に違反する行為(以下「本件管理規定違反行為」という。)に及んだことを防止できなかったほか、本件サポーターらを即刻退去させるなど、観客や選手その他の試合に関わる人の安全を確保するために適切な措置を講じなかった。

<本件サポーターらによる本件管理規定違反行為>

1. フィールドへの飛び降り
2. 相手チームのサポーターおよび警備運営スタッフに対する暴力
3. 相手チームのサポーターに対する威嚇
4. 相手チームのサポーターエリアへの集団での押し寄せ
5. 相手チームのサポーターの横断幕やスタジアム内の設置物の損壊
6. 立ち入り禁止区域(券種外の入場可能エリア、関係者エリア、相手チームのサポーターエリア等)への不正侵入

7. スタジアム内を走り回る行為
8. 掲出不可エリアへの横断幕の設置

なお、当協会執行部は本大会の主催者として、本件サポーターらのうち特定することができた18人(現時点)に対し、各々の各本件管理規定違反行為を個別に認定した上で、当協会試合運営管理規定に基づき、処分を行っている。

(2) 当委員会の判断

当委員会は、上記の嫌疑の内容を精査し、対象者に弁明の機会を付与した上で、慎重に検討し審議を重ねた結果、以下のとおり判断する。

ア 管轄権

対象者は当協会の加盟チームであることから、懲罰規程第2条に基づき当委員会は対象者に懲罰を科す権限を有する。また、本大会は当協会が主催する公式競技会であることに加え、本大会の開催規程第4条に「本大会における懲罰問題に関して、本協会規律委員会が直接管轄する」と規定されていることから、懲罰規程第16条第2号に基づき、当委員会は、本大会における対象者の行為について調査・審議する権限を有する。

イ 事実関係

本件サポーターらによる本件管理規定違反行為については、マッチコミッショナーおよび本大会実施委員会の報告並びに映像等の客観的証拠から明らかであり、対象者もこの点について争っておらず、事実であると認定できる。

ウ 対象者の有責性

天皇杯試合運営要項第30条第1項に、「参加チームは、自チームのサポーターに対して、試合の前後および試合中において秩序ある適切な態度を保持するよう努める義務を負う。」と規定されていることから、対象者を含む本大会の参加チームは、自チームのサポーターの行為についての管理監督責任、さらには、自チームのサポーターに対して、観客や選手その他の試合に関わる人の安全を確保するために、適切な観戦マナーを守らせ、施設の適切な使用等を周知し、遵守させる責任(サポーターへの指導責任)を負う。

また、同条第2項には、「参加チームは、前項の義務の遂行を妨げる観客等に対して、主管協会と協議の上、その入場を制限し、または即刻退去させる等、適切な措置を講じなければならない。」と規定されていることから、自チームのサポーターによる危険な行為等が生じた場合には、参加チームは、速やかに、当該行為をやめさせるとともに、被害の発生および拡大を防ぎ、観客や選手その他の試合に関わる人の安全を確保するために、即刻退去させる等の適切な措置を講じなければならない。

本件サポーターらは、試合終了後ではあるものの、まだ多くの観客や関係者がスタジアムに残っていた状況において、集団で暴徒化し、スタジアムの各所において同時多発的に前記<本件サポーターらによる本件管理規定違反行為>1.から7.までの危険かつ乱暴な行為を行った。すなわち、本件サポーターらは、集団でフィールドへ飛び降りて、相手チームのサポーターエリアに押し寄せ、相手チームのサポーターや関係者に対し大声を出すなどして威嚇し、相手チームのサポーターや警備運営関係者に対して暴行を加えるなどし、さらには、相手チームのサポーターのウェアおよび横断幕やスタジアムの備品を損壊している。本件サポーターらによるこのような暴動により、スタジアム内は騒然とし、一時的に警備運営関係者においても制御することができない無秩序な状態となり、相手チームのサポーターを含む観客、選手等の関係者および警備運営関係者が身の危険を感じざるを得ない状況を招いている。このような状態は、警察が出動して収束するまで、約1時間あまり続いた。

本件サポーターらによる本件管理規定違反行為は、対象者がサポーターとクラブとの間のコミュニケーションを通じて適切な管理監督と指導を行っていたら、防止することができたものであるといわざるを得なかったものであり、対象者には、自チームのサポーターに適切な観戦マナーを守らせ、施設の適切な使用等を周知し、遵守させる義務があったとした天皇杯試合運営要項第30条第1項に定める指導責任(サポーターの行為についての管理監督責任およびサポーターへの指導責任)^{けたい}の懈怠があったものと認められる。

さらに、本件サポーターらによる本件管理規定違反行為の発生後も、対象者は暴徒化した本件サポーターらを即刻退去させるなどして本件管理規定違反行為を止めることができず、結果的に1時間あまりの間、スタジアムを警備運営関係者においても制御することができない無秩序な状態に陥らせた。したがって、対象者は、被害の発生および拡大を防ぎ、観客や選手その他の試合に関わる人の安全を確保するために適切な措置を講ずるべきであるとする同条第2項にも違反すると認められる。

エ 情状

対象者は、その弁明において、クラブとして実施していた対策の内容と、それにもかかわらず本件サポーターらによる本件管理規定違反行為が生じたことの原因等について以下のとおり述べている。

(ア) 本試合に向けた対策等について

本試合に向け、以下のような対策を実施したが、従前の経過に照らして、本件サポーターらによる本件管理規定違反行為の発生の蓋然性が高いとは想定しておらず、それに対する具体的な打ち合わせはできていなかった。

- ・本試合については、直前まで試合会場の変更等の可能性があったこと、また、本試合会場では「鳴り物」の使用が禁止されているという背景から、通常より問題行動が起こるリスクが高いと考え、関係者(愛知県協会、当協会運営担当者、相手クラブ)と綿密

に打ち合わせを行い、また、試合会場の視察を行うなどの対策を採った。

- ・「鳴り物禁止ルール」違反への対応として、入場門にスタッフを重点的に配置するなどし、さらに、本試合後は、試合の結果および内容に照らして、サポーターからの何かしらのアクション(対話やチームバスの囲み等)があると予想し、それに対応すべく、競技運営スタッフをゴール裏スタンドフィールド内に2名、スタンド内に4名の合計6名を配置するなどの対策を講じていた。

(イ) 相手チームのサポーターからの挑発について

相手チームのサポーター2名から発せられた何らかの言葉(「早く帰れ、こっちに来い」といった内容であったとの話もあるが特定はできていない。)に対し、本件サポーターらの一部が憤慨し、バックスタンド側に移動を開始し、その後、その他のサポーターもこれに続き、本件管理規定違反行為に至った。

(ウ) 今後の対応策について

今後の対応策として、以下のような対応を予定している。

- ・過去に自チームのサポーターによる違反事案が生じた際にも、その都度、再発防止に向けた措置を講じてきたものの、本件を防ぐことができなかったことを受け、違反行為をしたサポーターに対する対象者による独自の処分について厳罰化と処分基準の見直しを行う。
- ・新たな取組みとして、専門家に本件の原因分析等を依頼して、その結果を踏まえて再発防止策を策定し、さらには、第三者委員会を設置して対策を講じることを検討する。

(エ) 反省の弁

「今回、不適切行為を生じたことは、これまで先人が紡いできた日本サッカーの歴史に泥を塗る愚行であり、これまで多くのサッカー関係者やファン・サポーターのみなさまの努力によって形成されてきた、スタジアム観戦への好意的なイメージを傷つけてしまったことはサッカー界、スポーツ界に身を置く者として痛恨の極みでございます」。

以上の対象者の弁明に対し、当委員会は以下のとおり判断する。

上記(ア)(本試合に向けた対策等について)について、「今回生じた当該サポーターらの行為については、従前の経過に照らして発生の蓋然性が高いとは想定しておらず、それに対する具体的な打ち合わせはできていなかった。」との弁明は、上述のとおり、参加チームは、自チームのサポーターに対して、適切な施設の利用を含む観戦マナーを守らせる義務を負うものであり、また、本件は、対象者によるサポーターへの事前の適切な指導、周知が徹底されていれば、このような危険な行為を防止することも十分に期待することができたといわざるを得ず、対象者の義務違反の度合いを軽減する事情とはなり得ない。

また、上記(イ)(相手チームのサポーターからの挑発)については、確かに、本件の直接のきつ

かけは、相手方チームのサポーターの言動にあった可能性も否定はできないものの、そうであったとしても、本件サポーターらの行動は、その反応として著しく過剰かつ執拗なものであり、情状として汲むべき事情には当たらないと考えられる。

最後に、上記(ウ)(今後の対応策)および(エ)(反省の弁)については、当委員会としては、対象者の再発防止に向けた今後の対応に期待し、これを注視するものの、本件においては考慮事由とはならないと判断した。

オ 懲罰

本件は、現時点で判明しているだけでも70名以上にもおよぶ多数のサポーターがスタジアム内で集団として暴徒化し、相手チームのサポーターを威嚇し、相手チームのサポーターや警備運営関係者に対して暴行を加えるという、日本サッカー史上、過去に類を見ない極めて危険かつ醜悪なものであり、その場に居合わせた子供を含む多くの観客、チーム関係者、スタジアムや運営に携わる関係者等を危険にさらし、恐怖に陥れるものであった。また、その様子はテレビやインターネットを通して、広く伝えられ、サッカー関係者以外の多くの人々にも強い衝撃を与えた。

当協会は、JFA2005年宣言において、「サッカーの普及に努め、スポーツをより身近にすることで、人々が幸せになれる環境を作り上げる。」というビジョンを掲げている。また、Jリーグも、「豊かなスポーツ文化の振興および国民の心身の健全な発達への寄与」を掲げ、その活動方針の一つとして、「自治体・ファン・サポーターの理解・協力を仰ぎながら、世界に誇れる、安全で快適なスタジアム環境を確立すること」を宣言している。

このように、当協会およびJリーグは、サッカーは子供達を始めとする多くの人々に夢を与え、感動させる存在でなければならないと考えている。人々がスタジアムにおいて安全、安心に観戦することができなくなれば、人々の足をスタジアムから遠のかせることになり、ひいてはサッカー競技自体への興味を失わせることにもなりかねない。本件の対象者のサポーターによる暴挙は、このような当協会やJリーグの理念に真っ向から反するものであり、断じて許されない。

これまでも、対象者のサポーターが引き起こした問題行動による懲罰事案は、Jリーグおよび天皇杯を含めて2000年以降だけでも11件にも上る。サポーターの問題行動が起こるたびに、対象者が、再発防止に向け、さまざまな取組みを行ってきたことは一定程度評価するものの、残念ながら、そのような取組みにもかかわらず、対象者のサポーターによる問題行動は繰り返され、それらの問題行動は改善を見せるどころか、本件のような集団的に暴徒化するという許されざる暴挙にまで至っている。このような実態を直視すると、対象者による取組みは十分ではなかったといわざるを得ず、対象者にさらなる猛省と実効性のある再発防止策の策定および実施を促すには、これまでと同様に罰金の処分を重ねたとしても、十分な効果は得られないと考えられる。

さらに、対象者のサポーターによる問題行動に係るJリーグによる直近の懲罰事案(2022年7月)においては、対象者は、罰金2000万円の懲罰を科されるとともに、「対象者が再びサポーターの行為に起因する懲罰事案を発生させた場合、無観客試合の開催又は勝点減といった懲罰を諮問

する可能性がある」と強い警告を受けていた。本件はこの警告にもかかわらず発生したものである。

以上を踏まえ、本件がトーナメント制を採用する天皇杯において行われたことおよび対象者が既に本年度の天皇杯を敗退していることを考慮し、当委員会は、対象者に対して、^{けんせき}譴責(始末書の提出)に加えて、「2024年度天皇杯(天皇杯 JFA 第104回全日本サッカー選手権大会)の参加資格の剥奪」というこれまでに対象者に科した懲罰よりも重い懲罰を科すことが相当であると判断した。

5. 付言(サポーターに対する付言)

以上の懲罰は、対象者(クラブ)に対するものであるが、本件管理規定違反行為の実行者である本件サポーターらには、自らの行為がクラブに招いた結果の重大性をしっかりと受け止めてほしい。サポーターはクラブとその選手たちを心から応援し、愛する存在であるはずである。観戦ルールに違反する行為は、結果的に、自分が愛するクラブ、ひいては、そのクラブを愛する多くの仲間たちを傷つけることになってしまう。そのことを自覚し、ルールを守って観戦していただくことを当委員会としても切に願うものである。

https://www.jfa.jp/about_jfa/sanction/news/00032849/

※本文中の下線は第三者委員会による

第三者委員会委員プロフィール(敬称略・順不同)



〔委員長〕 武藤 芳照

一般社団法人東京健康リハビリテーション総合研究所
所長
東京大学名誉教授

スポーツ医学。身体教育学専門。3度の五輪水泳チームドクター。医学博士(一社)スポーツ・コンプライアンス教育振興機構の初代代表理事。日本学生野球協会理事、少林寺拳法連盟顧問。編著書は100冊を超える。



〔副委員長〕 結城 和香子

読売新聞東京本社
編集委員

五輪15大会、パラリンピック10大会取材するなど、スポーツと社会との関わりについて知見を有し、スポーツ庁スポーツ審議会委員も務める。日本オリンピックアカデミー副会長。



松瀬 学

日本体育大学 スポーツマネジメント学部
教授

共同通信社で記者として活動後、フリーランスのスポーツ・ジャーナリストとして多種多様なスポーツ、競技会取材。ラグビーW杯2019組織委員会広報戦略長も務めた。早稲田大学ラグビー部OB、現在は日体大ラグビー部部長。



高橋 義雄

筑波大学大学院 人間総合科学学術院
准教授

研究分野はスポーツ政策学、スポーツ社会学。日本卓球協会評議員、日本女子ソフトボールリーグ機構監事。博士(スポーツウエルネス学)。



山本 浩

法政大学 スポーツ健康学部
教授

元NHKアナウンサー。JSPO国民スポーツ大会委員長、日本陸上競技連盟指導者養成委員長など要職を歴任。大相撲、JOCなどで調査委員会へも参画。



ヨーコ ゼッターランド

日本女子体育大学 体育学部
准教授

元女子バレーボールアメリカ代表。バルセロナ(銅)、アトランタ(7位)五輪2大会出場。元JSPO指導者育成委員会委員長、処分審査会座長。なでしこリーグ理事、日本アメリカンフットボール協会理事等を務める。



望月 浩一郎

パークス法律事務所
弁護士

(一社)日本スポーツ法支援・研究センター副会長、日本スポーツ協会処分審査会委員、日本学生野球協会審査室委員などを務める。



竹村 瑞穂

東洋大学 健康スポーツ科学部
准教授

スポーツ倫理・哲学、生命倫理学が主な研究分野。国立スポーツ科学センター倫理審査委員会委員、日本アンチ・ドーピング機構評議員・学術委員会委員、日本車いすバスケットボールコンプライアンス委員会委員、日本パラ水連理事。博士(体育科学)。

各チームからの報告

Aチーム／Bチーム／Cチーム

公開シンポジウムの概要

第三者委員会設置趣旨／プログラム／主催者代表挨拶／
当該事案経緯説明および事後対応等についての説明／
委員会提言手交後の挨拶／阿部勇樹氏の指定発言／
座長メッセージ／メディア参加者概要

提言の内容

関係者へのヒアリングと過去の不適切行為の事案を整理し、 本件の原因を分析する

Aチーム 松瀬 学
高橋 義雄

ヒアリングによる原因分析

1. 方法

不適切行為を起こしたサポーター、違反行為を止めにいったサポーター、その他のサポーターの計7名、サッカー少年(中学生)、試合会場の運営担当者(愛知県サッカー協会)、警備担当者、日本サッカー協会担当者2名、Jリーグ関係者2名、レッズ選手ら15人、トータル約18時間のヒアリングを実施した。ヒアリングの文字起こしデータに対し、AIを使った質的データ分析を行なった。

2. 結果と考察

AIを使った質的データ分析により、983個のセグメント(意味単位)を抽出し、12のコード(キーワード)に分類した。(表1)(表2)

表1：ヒアリング実施者別セグメント数

【ヒアリング実施者】	セグメント数
① 不適切行為を起こしたレッズサポーター	132
② レッズサポーター	192
③ レッズサポーター(古い時代を知る2人)	111
④ レッズサポーター・善良なボランティア	102
⑤ レッズファン・中学生	40
⑥ 会場警備担当者(レッズ担当)	57
⑦ 開催地運営担当者(愛知県サッカー協会)	71
⑧ Jリーグ幹部(レッズサポーター生みの親)	25
⑨ Jリーグ幹部(フットボール担当)	79
⑩ JFAフットボール部担当者(2人)	70
⑪ レッズ選手	33
⑫ 一般のレッズサポーター(2人)	71
合計	983

表2：コード一覧

コード	983
1なぜ<動機>	34
2なぜ<機会>	145
3なぜ<正当化>	90
41再発防止	165
5レッズサポーター	162
6クラブマネジメント	77
7処分印象	85
81トラブル印象	52
82悪いのは誰	26
42回避	35
91選手対応	21
92個人情報	91

抽出したコードは、不祥事のトライアングルといわれる『動機』『機会』『正当化』に分類できた。動機は不正行為を実行することを欲する主観的事情、機会が不正行為の実行を可能あるいは容易にする客観的環境、正当化は不正行為の実行をやむを得ないとする主観的事情を意味する。(図1)

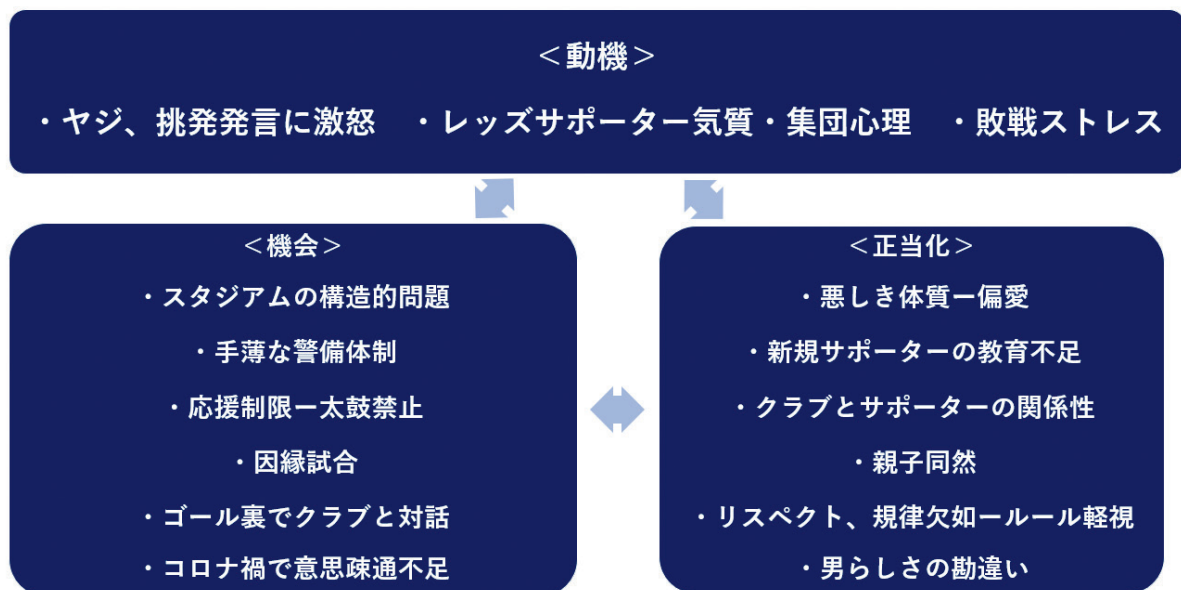


図1：ヒアリング・コーディング分析マップ～不祥事のトライアングル

2.1. 動機

『動機』に頻出したセグメントは、名古屋のサポーターの野次、挑発発言に激怒したというコメントであった。例えば、名古屋のサポーターの野次には、「早く帰れ」あるいは「こっちにかかってこいよ」「弱いな」などで、レッズサポーターがその言葉にカッとして、名古屋のサポーターの方に押しかけていったというコメントがあった。

また、熱狂的な応援で知られているレッズサポーターの気質は、過剰な応援を良しとする、相手に舐められたらそれでは終わらない、売られた喧嘩は買う、そういったコメントがみられた。その体質

がトラブルを誘発した一因であると考えられた。

そして集団心理が働いていた。1人のレッズサポーターが名古屋のサポーターに向かって行ったので、他のレッズサポーターもついていった。中には止めに行ったサポーターもいたが、結果的には名古屋のサポーターの方向にレッズサポーターが大挙して押しかける状況になったと推察された。レッズが0-3で負けた敗戦のストレスも不正行為と無関係ではないというコメントがあった。

2.2. 機会

『機会』では、スタジアムの構造的な問題に関するセグメントが頻出した。本件の試合会場となったアセットCS港サッカー場は、Jリーグの試合ではあまり使用されない最大観客収容人数約2万人の名古屋市所有の小規模スタジアムであり、このスタジアムがJ1のチーム同士の試合としてはスペックが劣っていたというコメントがあった。具体的には、フェンスが低い、1メートル程度で簡単に乗り越えてピッチに行ける、緩衝エリアが小さい、横断幕が接近している、監視カメラが少ない、などの環境が不正行為を誘発したとの指摘も多かった。

また、警備が手薄だったとのコメントが多く見られた。当日の警備員は100名程度であり、警戒にあたった警察官がすべて退去した後に不適切行為が発生している。

さらに、普段認められている太鼓による応援が禁止されるという応援の制限のために、レッズサポーターのストレス、不満、イライラが募ったのではないかという指摘もみられた。加えて、両クラブ間のサポーター絡みのトラブルが過去にあったことから、危険な空気が試合前から漂っていたことがヒアリングから分かった。

そのほか、試合終了後10分程過ぎからゴール裏でクラブの強化責任者とレッズサポーター80~90名が対話を始めたことも機会となったと推測される。名古屋のサポーターからの挑発的な発言が届きやすかった小規模スタジアムで対話を行ったことも一因になっていると考えられた。

本件の試合は、8月2日平日の水曜日の夜間であり、リーダー的な立場のサポーターの多くは会場に行けなかったために、サポーター内の規律のコントロールがしづらかったこともあった。またコロナ禍による接触制限で応援のルール、規律といったものがサポーターの内部で伝達、および共有しづらい環境があったというコメントもみられた。

2.3. 正当化

熱狂的な応援で知られるレッズのサポーターは、レッズを愛しているのだから、少々荒っぽい振る舞い、規則を破った過剰な応援もありではないかという空気があるというコメントがあった。さらに、新規のレッズサポーターに対しての行動規範、教育、啓発、マナーの遵守が徹底されていなかったという発言もあった。また、ルール・規則を軽視する、相手チームのサポーターに対するリスペクトや規律も欠如しているという指摘も数多くみられた。

最後に、クラブとサポーターの関係性について、少しくラブがサポーターに甘いのではないか、ななあ関係ではないかというコメントがあった。ヒアリングした主力選手は、「クラブ、サポーター、そして選手は共に闘う同志である。互いにリスペクトし合い、切磋琢磨して、高みを目指している同志だ」と述べた後で、「ただ、クラブとサポーターの関係は親子みたいに見える」と続けたことは印象

的であった。これは、サポーターが規律違反を犯す、いろんなルールを破ることがあった場合に、クラブが親のように問題を起こしたサポーターを守っているように見えるという認識を示したものである。たとえサポーターが規律に違反しても、結果的にはクラブに制裁金あるいは天皇杯出場資格剥奪が科され、選手やクラブに迷惑かかるといった形を捉えて、その選手は子の違反の責任を親がかぶるといった「親子みたい」な関係であることを指摘したものである。

3. 結語

ヒアリングした主力選手が、天皇杯出場資格剥奪に触れて、『自分の仕事を取られた。奪われた』と口にした言葉は印象的である。また、中学1年生のサッカー少年は、今回のトラブルにより浦和レッズの天皇杯出場資格剥奪という処分を聞いた時、「レッズサポーターは何をやっているんだ。選手に迷惑を掛けないでほしい」と思ったという。この主力選手、サッカー少年の率直な言葉を、今回の不適切行為を起こしたレッズサポーターは忘れてはなるまい。

過去の不適切事案の文書・資料整理による原因分析

1. 方法

浦和レッズが保有している試合管理違反に関するクラブ文書、Jリーグがインターネット等で発表している公式発表、さらにその他のニュース等のネット情報を用いて不適切事案の傾向分析を行った。

分析は、事案が発生した日時・会場、対戦相手、事案の内容、その事案に至った原因、経過、対応、JリーグやJFAによる処分、浦和レッズの対応に分類し、それらの傾向をみることで原因を探った。また、浦和レッズの対応について、これまでなされたクラブの方策を行政学で紹介されるフレームを用いて原因の分析とその解決策について考察した。このフレームは、『法力』と言われるルールの徹底や厳格化といった法によるコントロール、続いて『実力』と言われる警備を強化するような力によるコントロール、三つ目が『財力』と言われる経済的な誘導を行うことによるコントロール、最後は『知力』と言われる圧倒的な情報量を持つクラブ側が情報を伝えるコミュニケーションによる統治、これらの4つの『力』に分類した。

2. 結果と考察

2.1. 抽出された事案

1995年4月26日、大宮(公園)サッカー場、清水エスパルス戦にて起きた事案から、続いて2000年の4月から7月の間のアウェーゲームのさまざまな不適切事案に対する嚴重注意、処分が科されるようになった2008年5月17日のガンバ大阪戦での事案以降、最終的には8月2日の前の2022年7月2日のパナソニックスタジアム吹田におけるガンバ大阪戦の計13件が抽出された。

2.2. 事案の傾向からみた原因分析

分析した13事案は、ホームで発生した事案とアウェーで発生した事案がほぼ均衡していた。発生事案の対戦相手は、ガンバ大阪が3件、清水エスパルス、ベガルタ仙台が2件であったことから事案の発生する対戦相手にはかなり偏りがあることが推察された。

事案の発生時期は、1995年に1件、2000年の4月から7月に数回起きて嚴重注意、2008年から2014年の間に5件、2018年から2022年に6件であったことから、近年になって件数が増えている傾向が明らかになった。事案発生の間隔をみると、事案が発生すると一定期間事案発生がなくなる時期がみられた。一方で、事案が発生すると次々と事案が発生する傾向がみられた。例えば、2014年の事案は非常に大きなインパクトを与えたと考えられ、その後の2018年までの4年間にサポーターの自制、さらにはクラブのサポーター対応が変化した結果、こうした事案発生が抑えられてきたと考えられる。このように定期的に事案が発生していてそれに対応しているのではなく、地震活動に似て、ある一定の期間を得てストレスが蓄積された瞬間に発生するものの、その後はサポーター同士の自制や抑える機能が働くことによって、いったん収束すると分析できた。このことから発生原因となる内的・外的要因を特定し、それらの改善策が必要であると考えられる。

事案がなくなる時期と事案が増加する時期についてヒアリング結果を踏まえると、コロナ禍の影響が仮説的には考えられた。つまりコロナ禍の感染予防策であった声出し応援禁止に対するストレス反応としての事案発生があることや、さらにコロナ禍においてサポーター同士のコミュニケーション不足等により、応援スタイルの伝統の伝承ができていなかったのではないかと推察できた。これまで、クラブは各事案が発生すると同時に何もしなかったというわけではなく、クラブの風土、組織改正、スタッフの意識改革等のためのさまざまな取り組みを行っていることは確認できた。それからサポーターとコミュニケーションを取ることによって、サポーターのあり方についての再構築を適宜図っていたこともインタビューや資料からも読み取ることができた。

2.3. クラブのこれまでの対応について

『法力』では、具体的な対策としてルールの厳格化、つまり飛び降り禁止に始まり、蓋を外しなさいというような細かいペットボトルの対応などクラブが規制を設けてきたことが確認できた。入場禁止の措置、応援アイテムの登録制、サポーターグループの登録制度等々、こちらはルールによって事案発生を抑止する対策であったと考えられた。

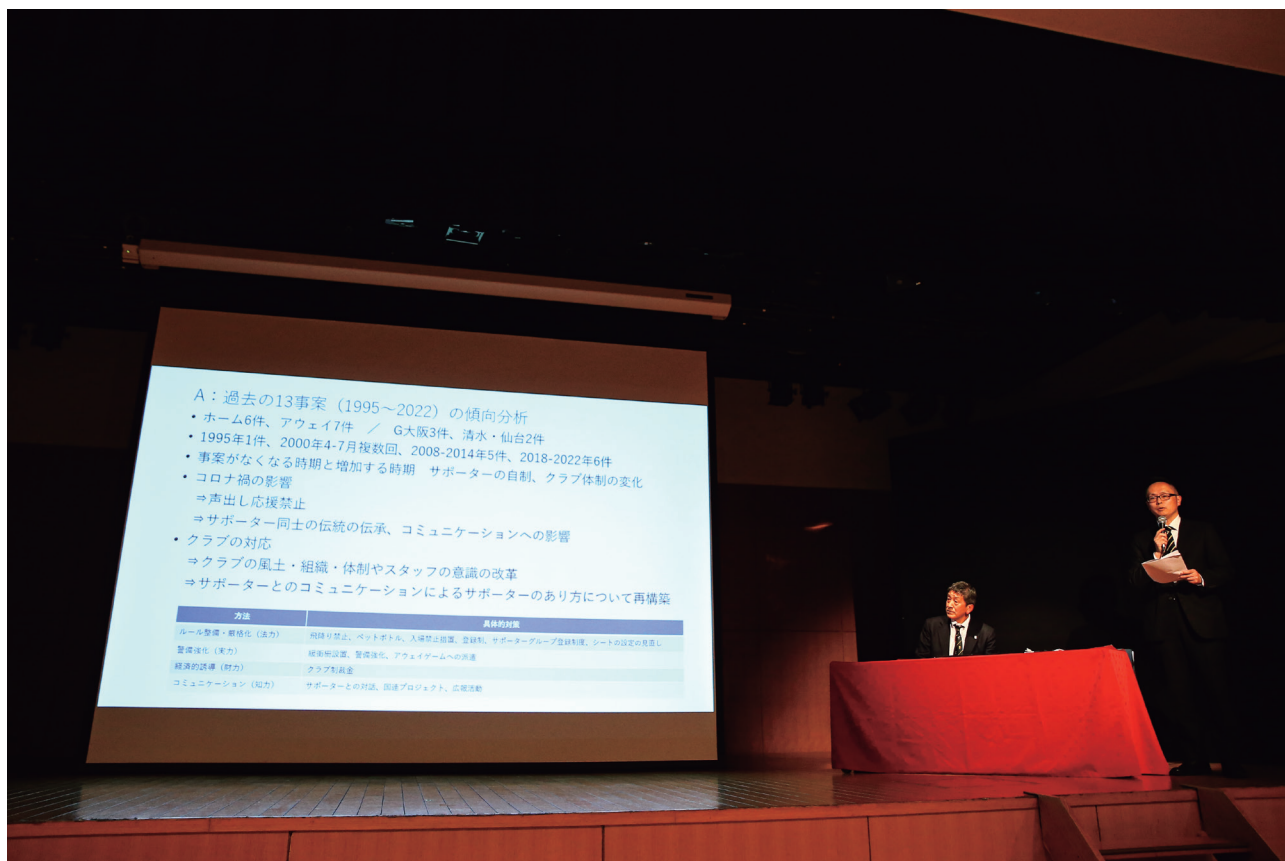
『実力』では、サポーターとサポーターの間に設置される緩衝帯の設置や、警備の強化がなされてきたことが確認できた。ただし、警備員の適正人数は今後とも検討が必要である。アウェーゲームでの事案発生を抑止するためには、現在でもクラブスタッフを派遣しているが、より実効的な『実力』の見せ方は検討の余地がある。

『財力』では、クラブがサポーターに対して制裁として財政的な負担を掛けるなどが考えられる。この方策は現在とられていないものの検討の余地がある。また、海外のサッカークラブやプロスポーツにあるように、チケット価格を上げることで入場者の選別を行い、経済的に事案発生を抑止を狙う方法が海外ではみられる。一方でこうした所得階層による実質的な入場制限が決して良いわけではなく、多くの券種を用意することで弊害を取り除く方策も同時に必要になる抑止策として考えられる。

最後に『知力』では、クラブスタッフとサポーターが対話し、コミュニケーションをとることで抑止に努めていることは確認できた。一方で、今回の小規模スタジアムでの敗戦後のスタッフとサポーターによるスタジアム内でのコミュニケーションについてはヒアリングでも事案発生要因としての可能性が指摘されたように、コミュニケーションの取り方についての方法が検討されるべきである。さらに、国連プロジェクトを導入するような形で、知的にお互いがリスペクトし合うような形でのコントロールを考えた活動は今後とも必要であると考えられた。

3. 結語

これまで、クラブは不適切事案の発生に対して対応しているものの、事案の抑止は一時的にとどまり、マグマの高まりのように一定期間をおいて事案が発生している。事案に関わり処分された人物は再度事案を起こすことはないとのことから言えるのは、全く新しい人物が不適切事案を起こすように仕向けられる土壌があるということである。この土壌は、応援スタイルやサポーターのあり方の伝承のなかに課題があると考えられ、より深い根本的な意識の変化につながるクラブとサポーター、サポーター同士、クラブスタッフ同士、そしてピッチ上の選手のメッセージなど、より信頼と安心のコミュニケーションが必要になると考えられた。



クラブの「対策についての評価」と「問題点の洗い出し」

Bチーム 山本 浩

ヨーコ ゼッターランド

1. はじめに

Bチームのテーマは「クラブが取っていた対策についての評価と問題点の洗い出し」であった。「対策の評価」には、これまでの文書やそれに対する対応策を^{こくめい}克明にあたり、現場で起こりうるさまざまなアクシデントや問題にあらかじめ、あるいはその場でどう対処していたかを検証することが、評価の対象になるという視点に立ち、そこを中心に調査・分析を行った。

2. 調査方法

期 間：2023年12月～2024年2月

対象者：クラブ内 6人 クラブ外 2人

方 法：2委員での対面2回計3人、2委員でのオンライン2回計4人

1委員でのオンライン1回計1人、1人あたり30～60分

あらかじめ設定した質問項目による「半構造化インタビュー」を実施

3. 評価の手法・分析

評価の手法は、聞き取りの中から文言を取り出し、それが①どのような問題とどう関わっていたのか、②あらかじめ策を講じていた人、時間の経過とともに新たな対応をした人の視野や対応策はどうだったのか、③連携、指示、情報の行き来などを枝とし、④それが事案発生の幹とどうつながっていたのか等、個別の整理から総合的な構図までを思い描きながら、対策の評価としてまとめていった。

4. 結果(フレーズの抽出)と評価

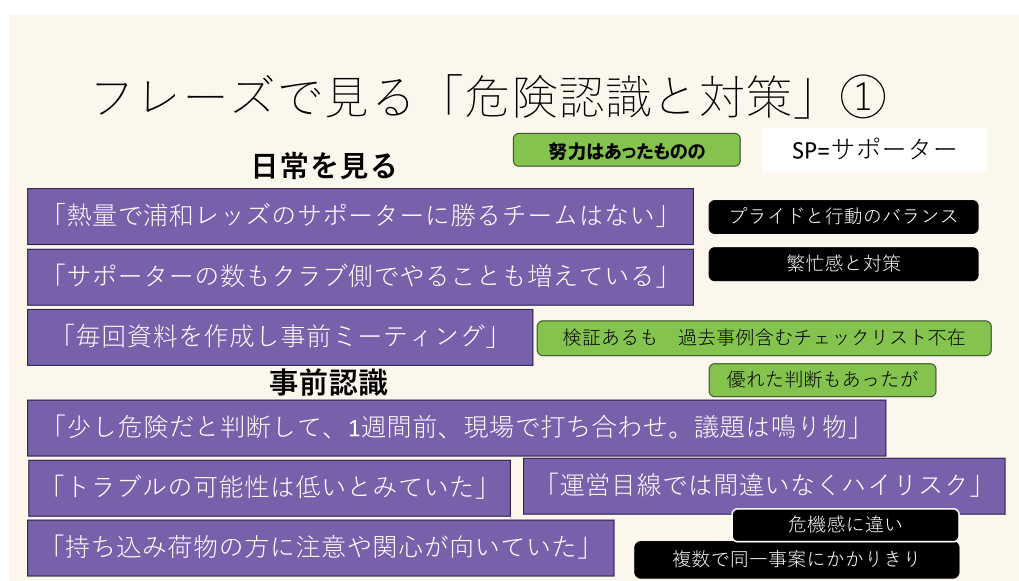


図1 フレーズで見る「危険認識と対策」①-「日常と事前認識」-

【「日常」に見る認識と対応】(図1)

①『熱量で浦和レッズのサポーターに勝るチームはない』

熱量は、クラブにとって大切なものであるが、それが大量に、一度に、方向を誤って放出されたときに、思わぬ結果をもたらすことがあったのは、過去の経験で知っているはずである。熱量を大切にしながら、どこにどのような形で膨らんでいるのか、誰もが意識しておく必要がある。

②『サポーターの数もクラブ側で行うことも増えている』

この数年間のうちに、新型コロナウイルスの影響もあり、それまでと違ったさまざまな問題が目の前に広がっていた。繁忙感の膨張と、良き伝統の継承が困難になった中で、対策をこまめにとれていたのかという意味では、クラブ内には見えない問題が山積していたと言える。

③『毎回資料を作成し、事前ミーティングを行っている』

過去の不祥事に対する対応策が具体化して、そのような行動ができていたと理解できる。評価されるべき行動である。検証があってしっかりそれが生かされている一方で、過去事例を含むチェックリストがあったのかどうか。過去の重大事案を一覧にして、それを元に徹底的な検証、対応策が講じられていれば、違った結果になった可能性がある。

【事前の対策から見える「危険認識】(図1)

①『少し危険だと判断して1週間前に現場で打ち合わせ、議題は鳴り物を持ち込ませないようにするためにはどうするか』

非常に優れた判断に基づく行動であった。ある種の危機感があって1週間前に既に現地で確認作業を行ったが、当日は「鳴り物」と「横断幕」に集中してしまったことが惜まれる。

②『トラブルの可能性は低いと見ていた』『運営目線では間違いなくハイリスクである』

異なるフレーズが、それぞれ別の人間から聞かれた。クラブ内の事前の危機感に違いがあり、その結果、持ち込み荷物に注意や関心が集中し、複数で同一事案にかかりきりになった。直近の過去の経験が、そのまま担当者の胸に、印象深く残っていたことを示しているように見えた。

③『持ち込み荷物の方に注意や関心が向いていた』

複数の回答者が、「コロナ禍以外ではなかった」という、太鼓やトラメガの持ち込みを認めない、音に厳しい条件の競技場。鳴り物を持ち込ませないように、神経を使ったのは理解できるが、逆にその一点に複数の人間が集中してしまったが故に、他からほころびが生まれる結果を招いてしまったとも言える。

フレーズで見る「危険認識と対策」②

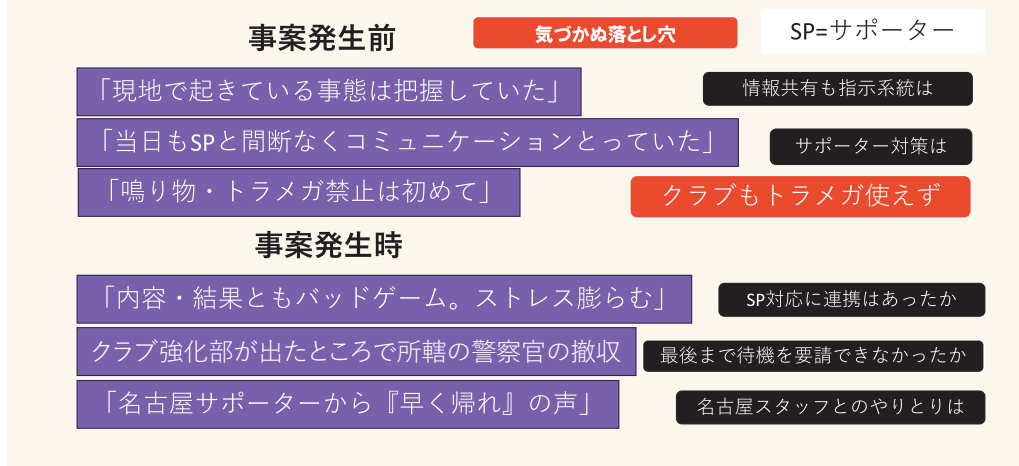


図2 フレーズで見る「危険認識と対策」②
-「事前発生前と事案発生時」-

【当日-「事前発生前」】(図2)

①『現場で起きている事態は把握していた』

普段から、サポーターとの間でSNSを使って情報のやりとりをしていたのは、熱量がいたずらに上がらないようにコントロールするためであっただろう。事案の発生直前、埼玉の地元にいるクラブスタッフも、現地で起きていることはSNSを通じて把握し、情報共有はできていたとされる。しかし、状況把握にはどうしても時差が伴う。変化に対して新しい指示が出たのかといえば、そういったところまでは届いていない。あくまで、離れたところでも状況を知っていたという事実だけが残った。

②『当日もサポーターと中断なくコミュニケーションを取っていた』

コミュニケーションを取りながら、試合展開に対してのサポーターの反応に懸念を抱いていた。サポーターのリーダーたちに、抑制をかけながらも突発的な変化に対して対応ができる状況だったのかどうか疑問が残った。

③『鳴り物、トラメガ禁止は初めて』

スタジアムが市営住宅街近くであったことから、「音」に対する非常に厳しい規制があった。サポーターの応援に不可欠な「鳴り物」の持ち込み禁止について、試合の関係者の誰もが、そこに神経質になっていたのは事実である。一方で、クラブもトラメガを使うことができない前提だったはずである。何か不穏な動きを感じ取った際に、試合運営にかかわる人間もトラメガを使ってメッセージを伝えられない条件にあったことを認識していたかどうか。

【当日-「事案発生時」】(図2)

①『内容、結果ともバッドゲーム。ストレスが膨らむ』

複数のクラブスタッフに、同様の感覚はあったようだが、コミュニケーション面での対応を別として、それを元にサポーター対応に次々に策が打たれたような様子ではなかった。

②『クラブ強化部が出たところで所轄の警察官の撤収』

「クラブの強化部が出れば、サポーターの興奮も一段落する」という、経験による期待があったのではない。「険悪なムードではなかったので警察官は撤収した」との回答もあったが、呼びつけるような命令口調で、上から目線で言う一部サポーターの、怒声にも近いやり取りがあった中で、警察官に対して待機の延長を要請する必要があったのではないか。

③『名古屋サポーターから「早く帰れ」の声があった』

名古屋スタッフとの間のやり取りについて明快なものが残っていない。浦和レッズの一方向的な責任感の中で、単独で完結しようという姿勢が見て取れた。

ここまで、聞き取りのメッセージを取り出して、それぞれに関する評価を示したが、これを今回の事案発生に向かうベクトルを「特性要因図」(参考資料)を使って、それぞれの対応と最終的なサポーターの行動との関連を示そう。

【特性要因図①「危険認識と対策」】

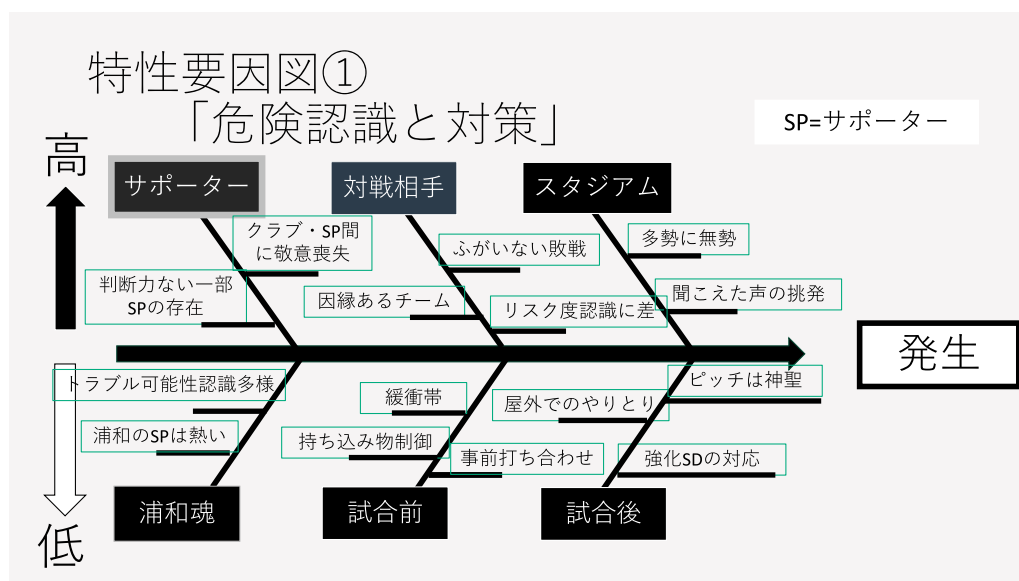


図3 特性要因図①「危険認識と対策」

上半分は、サポーターを問題の行動に駆り立てた因子、下にはサポーターをめぐる関係者の意識と行動を示してある。(図3)

サポーター事案では、クラブとサポーターの間に敬意の喪失があったことがうかがわれる。判断力のない一部サポーターの存在があったのは、複数の回答の中に認めることができる。さらに『浦和魂』と表現されるように、浦和のサポーターの熱量を大切にしながらも、時に「熱さ」がマイナスとなって現れ、緊迫した状態を来すことも想定しておく必要がある。

対戦相手に対しては、「因縁のあるチーム」との認識はあったが、リスクの認定に差があり、そこに「ふがない敗戦」が重なってしまった。

試合前、事前の打ち合わせは十二分だったのか。『飛び降りるということはまったくの想定外であった』とコメントが残されているところからすると、「持ち込み物の制御」に意識が偏っていたのは明らかである。一方で緩衝帯はあるにはあったが、結果的にはそれが、お互いのやりとりができないほど十分ではなかったという結論に達している。

試合後の行動に目を転じてみると、サポーターの求めに応じる結果となったクラブの強化スタッフの対応は、『屋外でのやり取りでなく、屋内の方が良かった』という指摘もあった。

また『ピッチは神聖、降りるはずはない』と、複数の人物から聞かされた。仮に「降りるはずがない」のであれば、埼玉スタジアムをはじめとする各地に整備された競技場の観客席とピッチとの間に、なぜ大きなギャップを作るのか。「降りる人がいるといけないから作っている」のではないか。理想と現実の間に一線を引く対応が求められる。

「聞こえた声の挑発」「多勢に無勢」といったフレーズに、^{とも}点ってしまった導火線の火を消す術を持ち合わせなかった実態が見えてくる。聞き取りの中で、『過去からその火はくすぶっていた』という言葉があった。フェンスが高ければ何も起こらなかったのであろうか。浦和のサポーターは、すべてを静かに受け入れることができたのであろうか。

【フレーズで見る「サポーター対策」】(図4)

『過去からその火はくすぶっていた』というコメントは、今回の事案を考える際に、クラブからサポーターに向けての対策の重さ、ハード面ではなくソフト面に着目をするべきではないかと示唆しているようにも思える。改めてフレーズを取り出しながら、「クラブからサポーターへの対策」に焦点を当ててみる。

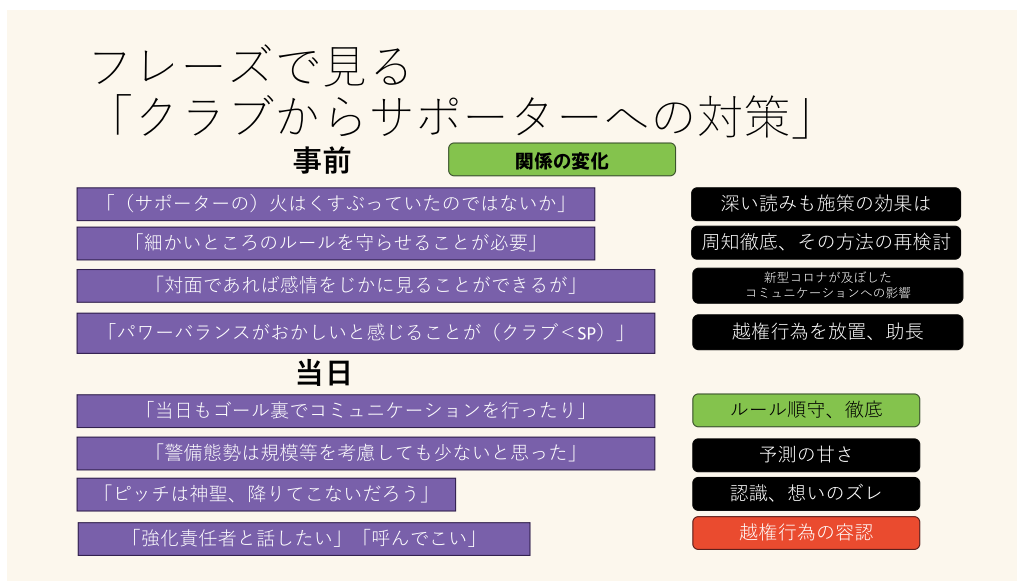


図4 フレーズで見る-「クラブからサポーターへの対策」-

①『サポーターの火はくすぶっていた』

さまざまな要因がある中で、いくつかの案件が続いて積み上がり、結果的にサポーターの気持ち

がくすぶっていたのではないか。それをクラブとしてうすうす読み取り、感じ取っていながら、施策をどれくらい講じていたのか、講じた際の効果はどれくらいあったのか、改めて精査する必要がある。

②『細かいルールを守らせることが必要』

「周知徹底」。決められたルールはしっかり守ってほしい、と告知してきたとあるが、果たして実行できていたか、あるいは告知方法が果たして良かったのか否か、あらゆることを再検討する必要がある。

③『対面であればサポーターの感情を直に見ることができるが』

コロナ禍以前に問題が起こったときには、サポーターと対面で対応し、その際に言葉だけではなく、言葉の裏側にあるものを読み取ることができていたとされる。しかし、「対面困難」はだれもが直面した問題だけに、浦和レッズのために特化して見ることはいかななものか、考える必要がある。

④『パワーバランスがおかしいと感ずることがある』

『サポーターの方がクラブよりもパワーが大きくなってきていると感ずる時がある』といった言葉も聞かれた。サポーターは、クラブの経営や現場の強化に直接携わる権限は持ち合わせていない。長年にわたり、クラブを応援してきたサポーターのクラブに対する熱意や愛情が強く出るとは理解できる。しかし実質的にそういった要望が「度を越した要求」に変わってきたときには、それを越権行為として捉えざるをえなくなる。そうした行動をそのまま受け止めること自体、ある種の放置につながり、より一層その要求を助長させていくことが懸念される。

⑤『ゴール裏でコミュニケーションを行った』

事案発生直前には時間の経過とともに、クラブスタッフたちはサポーターの沈静化に努めていたことが見て取れた。不満の募る試合運びに感情のコントロールが難しくなりがちな「一部のサポーター」に対して、現場で直接コミュニケーションを取ろうという行動に関しては評価できる。

一方、警備態勢は『規模等を考慮しても少ないと思った』という言葉があったが、ずっと『火がくすぶっている』という流れを考えたときに、「何か起こる可能性があるのではないか」とは考えなかったのか。『もしかしたら対策が十分にできていなかったのではないか』と警備に不安を感じたという発言もあった。状況に鑑みれば、予測の甘さがあったのではないか。

⑥『ピッチは神聖。降りてこないだろう』

神聖な場所としての認識やそれに対する思い、そこに対する一部サポーターの発作的な行動との間には、ズレがあったのではないか。

⑦『強化責任者と話したい。呼んでこい』

かなり強い要求の言葉である。ゲームそのものは実際に強化を担当する、あるいは現場で指揮を

執る人たちが中心にやっている。こういった要求に応える行動を取ることは、サポーターの気持ち、要望に応えるということに対応しているのだが、実質的には越権行為を容認するということになってしまっている。

【特性要因図②「クラブとサポーターの関係」】

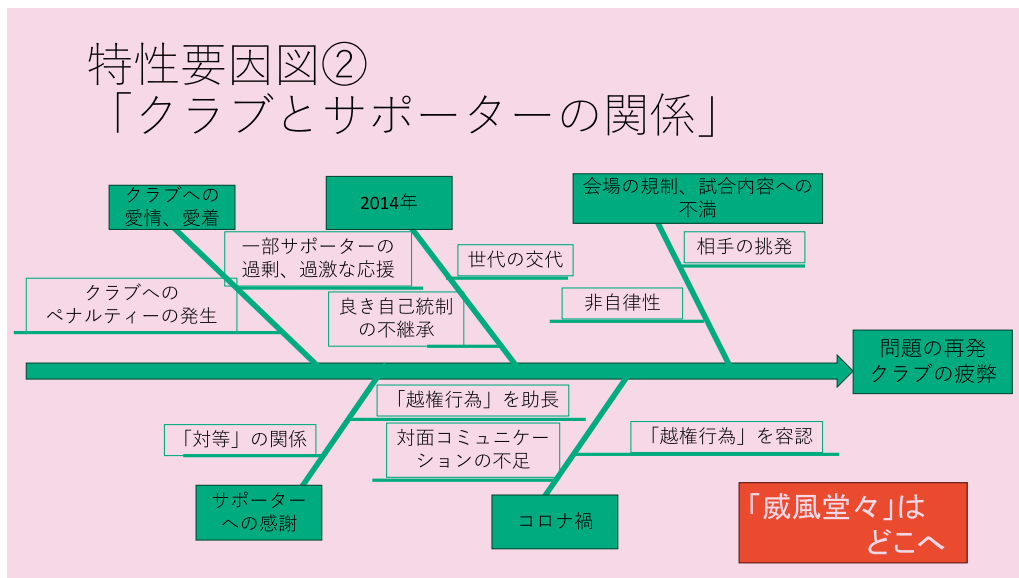


図5 特性要因図②「クラブとサポーターの関係」

クラブとサポーターの関係に焦点を絞り、時系列的に見てみる。(図5)なかなか勝てなかった初期の時代も含めて、サポーターのクラブへの愛情、愛着はかなり強いものが浦和レッズには見られる。それが長い時間をかけて醸成されてきている。ただその思いが強いあまり、一部サポーターの場合、ときに「過剰、過激な行為につながる」という可能性がある。これが原因で、過去には問題を引き起こすたびに、クラブへのペナルティが発生するという悪循環につながってきた。

チームは、シーズンチケットを購入した上、ホームでもアウェイでも応援に駆け付けてくれるサポーターに対して、感謝の気持ちを持ち続けているが、それが対等な関係から逸脱して、ときにサポーター側の越権行為を助長する流れに傾いていたのではないかと考えられる。

浦和にとって忘れることのできない2014年に起きた『JAPANESE ONLY』の横断幕の掲出問題では、これをきっかけに一部のサポーターグループに世代交代が生まれ、それに伴って、それまでサポーターの中であったとされる「良き自己統制」が、継承されないままに今に至ってしまった。コロナ禍の影響、会場の状況、相手の挑発などが引き金となり、大きな問題を引き起こしてしまった。サポーター対策に危機感を持ちながら、何とかあるべき姿を取り戻そうとしている中で、問題の再発そしてクラブの疲弊を招いたのは明らかである。

クラブ関係者の口から出た言葉に、今の浦和レッズを象徴する一節があったのでここに紹介しておきたい。「浦和レッズのサポーターの大切にしているフレーズに『威風堂々』と言うのがある。それが今の状態は、『威風堂々』からあまりにも遠い」。浦和を応援する人間が、心に留めておきたい一言である。

5. 結語

最後にこれまでの対策とその評価、その問題点を総合的に指摘しておきたい。

長期的な評価には、「サポーターとのコミュニケーション」「クラブ内、クラブ外での考え方のすり合わせ」と言ったコミュニケーション上の不全が存在したこと。

短期的な評価では、「対応策の偏り」「見解の不一致」「最大公約数の警戒体制に不十分なものがあつた」。今後は、こうした問題点への取り組みが強く求められる。

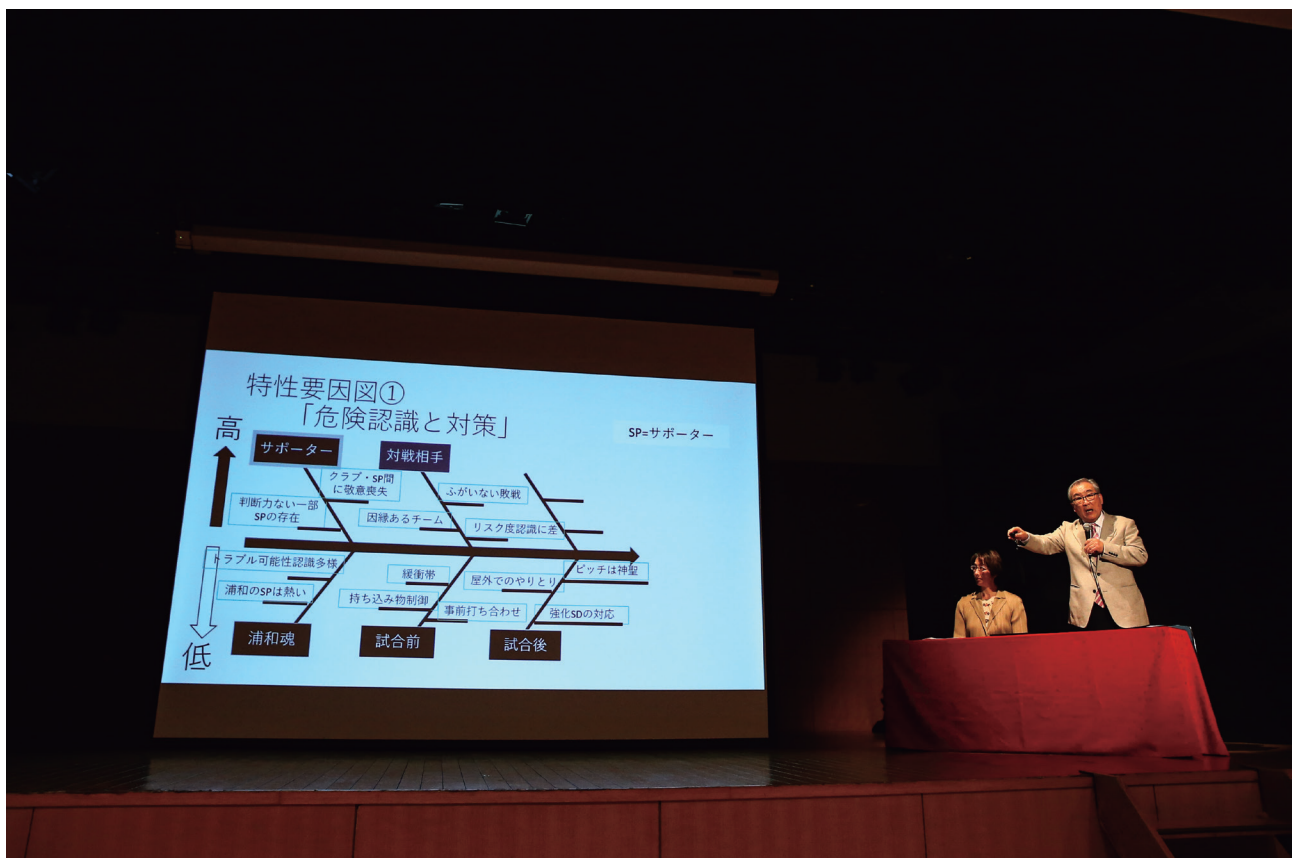
参考文献

西村仁(2022)日経ものづくり、2022年8月、日経BP社、pp.105-107

<https://cir.nii.ac.jp/crid/1520011638682316800> 2024/02/25 16:03

参考資料

「特性要因図」は1956年に東京大学名誉教授の故石川馨博士が発案したチャートで、製造業で起こりうる問題の原因を特定し、「『不良の原因となる可能性のある要因』を洗い出した図」(西村、2022)で、潜在的な問題を見つける手法として使われることがある。



クラブへの提言

Cチーム 望月 浩一郎

竹村 瑞穂

1. はじめに

Cチームは、Aチーム、Bチームの報告を受けて、クラブに対する提言について精査した。問題行動を発生させてしまう動機、またそれを許してしまう機会(環境)が存在し、その上で当該行為を正当化してしまうことでさまざまな事案が発生するわけであるが、まず、第一に、動機を解消するための提言を整理し、第二に機会(環境)を解消するための提言を行った。

動機を解消するための提言は、教育・啓発活動といったソフト面にかかわる部分となり、また、機会(環境)を解消するための提言は、スタジアム環境や構造面、運営面、また規程や法的整備といったハード面にかかわる部分となる。そこで、①動機解消にかかわる提言と、②機会(環境)解消にかかわる提言の二つに分けて報告したい。

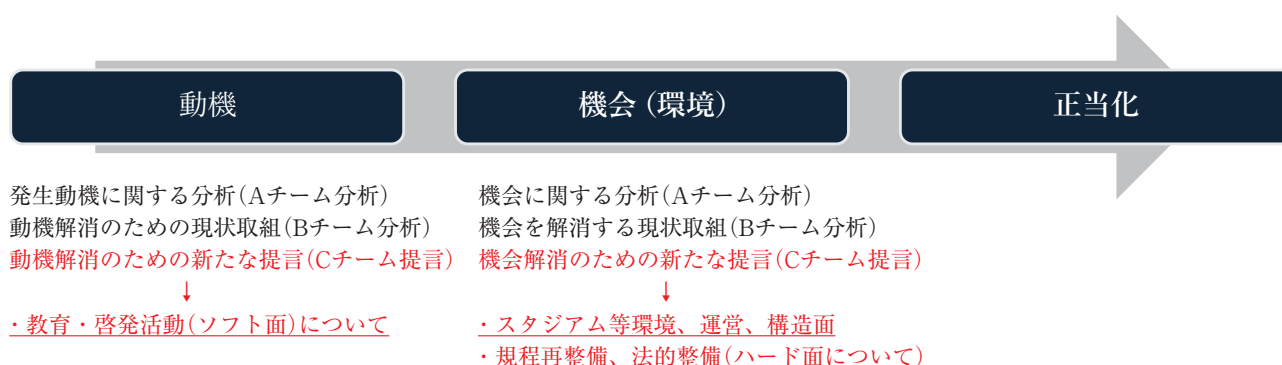


図1. 各チームの業務およびCチームの取り組みについて

2. 教育・啓発活動に関する新たな提言について

2-1. 教育・啓発活動の重要性について

浦和レッズのサポーターには、さまざまな位相^{いそう}が存在し、一般のファンや後援会に属するファン、サポーター活動をしているファンに加え、特定の集団に属するコア・サポーターなど幅広く存在する。クラブが実施すべき教育・啓発活動は、とくにどの層に焦点を当てて実施するというものではなく、ファン全体に向けて取り組みを実施するものである。

その中で、今回の問題発生事案のみならず、過去の事案も含め、倫理的逸脱行為や問題行為を発生させてしまう動機にかかわる要素を解消していくためにも、教育・啓発活動は欠かせないものである。

当然のことながら、教育・啓発活動は、即時的な効果を発揮するようなものではなく、長期的かつ広範囲で実施することにより、①安全・安心なスタジアム空間を創り守ること、またクラブが掲げている理念でもある②次世代に向けて豊かな地域・社会を創っていくこと、等に貢献するのでもあり、クラブとして果たすべき責務を遂行していくためにも必要不可欠かつ重要な取り組みと言い得る。

Aチーム、Bチームの報告にもあったように、問題行動を生じせしめる動機として、①意識・認識

面の歪みといった要素、②心理面の要素と大別することができる。①については、対戦相手のサポーターからの野次であったり、浦和レッズの敗戦など、「きっかけ」さえあれば、暴力的言動を肯定してしまうという認知のゆがみが一つの要素として認められる。②については、集団心理が働き、内側には強固な独自のアイデンティティが形成され、外側には排他性や攻撃性が生じやすくなるといった要素が認められるということである。これらの要素を解消するための長期的視点として、取り組みのためのアプローチの一つとして、教育・啓発活動は重要となる。

2-2. クラブのこれまでの取り組みについて

この教育・啓発活動であるが、じつは、これまでもクラブ主導でさまざまな活動が実施されてきた。たとえば、オフィシャルサイトやオウンドメディア、SNSなどを通して観戦ルールやマナーを呼びかけることや、2014年度より開始したサポーター・ミーティングなどが挙げられる。また、SPORTS FOR PEACE!プロジェクトは、スポーツを通じた幸福の実現、平和の実現に取り組む国連の公式なプログラム(SPORT FOR DEVELOPMENT AND PEACE)の一環として浦和レッズが独自に取り組んでいるプロジェクトである。この活動項目の重要な事項の一つとして、安全・安心なスタジアム空間の構築を掲げている。

2-3. 教育・啓発活動に関する新たな提言

このように、従来より、多岐にわたってさまざまな取り組みを実施してきたこと自体は、十分な対応をしようとする努力がみられるという点で評価し得るものである。一方で、これまでの活動を継続しつつも、プラスアルファの取り組みを加えることで、教育・啓発活動を拡充することが望ましい。下記に、いくつか案を提示する。

- 1) 違法行為、運営管理規程違反、観戦マナー向上に関するわかりやすいガイドブックの作成、配布
- 2) 次世代を担う子どもたち(ユース選手から、ファンやサポーターなど含め)に対する啓発イベントの実施
- 3) 試合中に何か問題が生じた際に気軽に相談、通報できるスタッフや窓口の設置
- 4) 対戦相手チームやサポーターとの相互尊重イベントや交流活動の企画、実施

上記のような取り組みを通じて、サッカーを「する、みる、ささえる」すべてのかかわりといった多角的視点および長期的視点から、浦和レッズの応援文化の構築、醸成を目指していくべきである。

2-4. クラブ-サポーター間の健全な関係性の構築

Aチーム、Bチームの報告にもあったように、クラブ-サポーター間の関係性は、歪な部分があったところは否めない。一般論として、スポーツのコア・サポーターというのは、独自のアイデンティティやイデオロギーが強固に存在する。そのアイデンティティこそが基盤となり問題行動を発生せしめている場合もあるだろう(たとえば、参考文献①)。場合によっては、この批判されている在り方のサポーター活動が自分の人生そのものというケースもあり、その活動の在り方や自己のアイデンティティを

否定されることへの抵抗感は、容易に想像し得るものである。

そのような想像力を働かせる一方で、しかしながら、現代社会における正しい規範意識を持ち、正しい在り方を理解し、また従来の在り方を改善し、そのための措置を実行していく責任がクラブにはあることを強調したい。

双方の関係性を健全な形で構築するために、まず一つとして、クラブ、選手、ファン、サポーターとさまざまな集団が、集団間における目的を超えて、集団間における上位概念としての目的(=共通目的)を共有することが挙げられる。この上位概念の目的というのは、たとえば、クラブの理念である。なお、クラブの理念は以下の通りである。

浦和レッズは、サッカーをはじめとするスポーツの感動や喜びを伝え、スポーツが日常にある文化を育み、次世代に向けて豊かな地域・社会を創っていきます。

周知の通り、スポーツ(サッカー)というのは文化である。文化というのは、人間の生活を豊かにしたり、幸福にするために存在するものである。この根本原則を共有し、この原則から逸脱しない形での応援文化を形作っていく意識を、クラブ、選手、ファン、サポーターがコミュニティの中で共有していく、そのための努力をクラブが率先して実施していくことが重要である。

これまで、教育・啓発活動に関する提言について整理してきた。ファンやサポーターはクラブとの雇用関係はなく、本来、教育指導をする立場にはない。しかしながら、クラブは会社の責務として、安全・安心なスタジアム空間をつくり守る社会的責務があり、その一環として教育・啓発活動が必要不可欠であるならば、それはクラブの責任として実施するべき取り組みの一つとなる。これは、スポーツ倫理の視点のみならず、ビジネス倫理の視点から、健全なガバナンスの実施という意味においても重要かつ必要不可欠なことであることを強調したい。

3. 機会(環境)に関する提言

次に、機会(環境)に関する提言について整理したい。機会(環境)に関する提言というのは、上述したように、ファンやサポーターが問題行動を起こそうとした際に、それを許してしまいかねない機会要因、環境要因を解消するための提言という意味である。この要因としては、スタジアムの環境や構造、運営面、規程や法的整備など、ハード面にかかわる事項となる。

3-1. ホームスタジアムにおける管理運営方法について

ホームスタジアムにおける管理運営方法については、現行の対応で十分工夫された措置が取られている。たとえば、①入場ゲートの分離、②応援バスの駐車場の分離、③観戦スタンドの座席割、④緩衝地帯の設置、⑤緩衝エリアにおけるフェンスやネットの設置、⑥ゲートから席までの動線についての分離措置、⑦レッズファン・サポーターとビジターファン・サポーターの入退場の時間帯の分離、⑧試合終了後のスローテンポな曲の選定、⑨違反行為を把握するための録画装置の設置(監視カメラ225台設置)など、現状、じつに多様な措置をとっており、クラブ側の努力が認められる。

ホームスタジアムの運営管理方法については、以上のように、現行でも十分な対応が取られていると評価するが、一点、検討すべきことは、**入場管理システムの導入**である。現在もアナログな形で十分に対応できており、過去に入場禁止処分となった対象者がスタジアムに入場してしまうというケースは一度も生じていないということであるが、今後、入場管理システムの導入については検討すべき事項である。

3-2. ビジタースタジアムにおける課題について

ビジターゲームについては、検討すべき事項が多々存在する。まず、ビジタースタジアムでは横断幕の掲出場所や方法、時間帯等ルールが異なることがある。また、これらのルールの認識齟齬や、ルール違反をした際の対応の非一貫性がトラブルの要因にもなってきた。その点を踏まえ、以下のようなリスクマネジメントを講じる必要がある。すなわち、①**ビジタースタジアムのルールをレッズサポーターと情報を共有し、遵守を徹底すること**、②**ルール違反の対応を一貫性あるものにするため、クラブ間で認識を共有すること**、③**警備体制側、主催者側との連携や意識改善のためにチェックリストを作成し備えを充実させること**、これらの諸点は改善していく必要があり、またすぐに取り組める部分でもある。

3-3. 制裁制度の見直し

現行の試合運営管理規程は、2023年度10月に改訂されている。この改訂により、試合運営管理規程違反に対しては、制裁制度は強化されている。この事実をまずは周知徹底するために、広報を充実していく必要がある。

また、制裁が科された場合の抑止効果が部分的、限定的にとどまってしまっているという点も指摘できる。そのため、問題が発生した際に、どのような悪影響がどのような方面に出てしまうのか、きちんと可視化して伝えていくことも必要である。クラブ側が負う直接的・間接的悪影響としては、経済的損失に加え、ブランドイメージが損なわれること、天皇杯への出場ができないことによる選手に対する影響、また試合を楽しみにしていたほかのファンたちへの影響、ユース世代の子どもたちが楽しむ、学ぶ機会を奪ってしまうことなど、数値化しにくい質的影響も含め、見える化し、周知することが抑止につながると思われる。

なお、この「制裁を科された場合の影響の可視化」については、(1)ルール違反行為が与える負の影響を、ファン・サポーターと共有化して、問題行動を抑止するという視点と言えるが、この点については、「教育・啓発活動」の一環としても同様に取り組み、周知等していく必要がある。

また、(2)ルール違反をすることに対するハードルが低くなっている状況の解消という視点も重要である。この、ルール違反をすることに対するハードルが低くなっている理由については、次の2点に集約し得る。

ア) ファン・サポーターの中には、「一般社会の中では行わないとしているルール違反行為でも、サッカーの応援の中では許される。」という誤った認識がルール違反行為の要因となっている。

イ) ルール違反をした行為者に対する制裁内容が、「どのような行為をしたら、どのような制裁を受けるのか。」という点が明確になっていない。そのため、制裁制度が、ファン・サポーターに理解されていないことから、十分な抑止効果を上げていない。

上述のア)ならびにイ)の2点について改善するために、現行の試合運営管理規程のさらなる見直しも必要である。というのも、現行の試合運営管理規程は、「(ルール違反者に対して)入場を拒否し、施設からの退場を命じ、および第4条に掲げる物の没収等必要な措置をとることができる。」という規定を、2023年10月、「A：永久入場禁止」、「B：無期限入場禁止」、「C：試合数を限定した入場禁止」、「D：嚴重注意」と細分化する変更を行った。たしかにこの変更は、必要で重要な改善であった。しかしながら、現状なお、**どのような行為を行った場合に、上記のA～Dの制裁を受けるかについては、その関係性が明確になっておらず、この点はさらなる規程整備が必要**と言える。

また、ファン・サポーターの中には、「一般社会の中では行わないルール違反行為であっても、サッカーの応援の中では許される。」という誤った認識があり、これが問題行動の要因の一つとなっている。「**一般社会で許されない行為は、サッカーの応援においても許されない。**」という当然の立場を明確にし、**刑事上・民事上の制裁手続をとることを躊躇せず、毅然とした対応をとる必要がある。**

4. クラブの対応について

クラブは安全・安心なスタジアム空間を創り守る社会的責務がある。それが度々失われてきたという事実¹に照らせば、これまでのサポーターに対する対応や処罰の在り方を含め、クラブ側のガバナンスに対する意識や対応が不十分であった点は否めない。この点をまず認め、認識して受け入れることが改革の第一歩である。

そのために、まずもってクラブ側の意識改革に着手する必要がある。このような問題事案に取り組む場合、また、二度と発生させないようにするためには、スタッフ、選手、全体として同じ方向を向いて取り組む必要がある。ガバナンスや処罰基準等に対して考え方に齟齬がある形ではなく、これまでの不十分だった部分や改革に必要な内容について理解を深め、同じ考え方を共有しながら進めていく必要がある。問題事案に対する基本姿勢を明確にし、共有して改革をすすめること、そのためにはクラブ内においてスタッフ、選手に対する教育・啓発活動も重要と言える。

最後に、ここまで述べてきたさまざまな提言を実行力をもって進めていくために、独立性の高いコンプライアンス部署を設置し、取り組みを強化していく必要があることを強調したい。

5. おわりに ファン・サポーターのみなさんへ

浦和レッズのファン・サポーターは、選手やクラブとともに闘い、勝利を目指している。最後に一つだけ訴えたい。それは、「ルールを守って、チームの勝利を目指す」こと。これを、ファン・サポーターとクラブの文化にすること。これを宣言して実行してまいりたい。一緒に考え、行動していくこと、自らを律して応援文化を作り上げていくこと。レッズサポーターはこれまでの経験として、自ら問題を克服してきた成功体験がある。今回の問題も必ず克服できると信じている。ルールを守って、チームの勝利を目指す。これをファン・サポーターとクラブの共通の文化とし、共にレッズの勝利を目指

していきたい。

1 なお、「CS アセット港サッカー場」で本件試合が開催されることで問題行動が生じる危険性が高いことは、愛知県サッカー協会のみならず浦和レッズも事前に十分認識しており、問題行動が生じにくい試合会場に変更する必要があることは理解されていた。

試合会場変更にはさまざまな困難な要因があったのは事実ではあるが、問題行動が生じにくい試合会場に変更することは不可能であったと認めることはできず、リスクの評価とそのリスクを回避するための手立てが十分でなかったと言わざるを得ない点も付記する。

参考文献一覧

- ① 清水諭(2001)サポーターカルチャーズ研究序説(特集 サッカー社会学の可能性) . スポーツ社会学 研究第9巻. 24-35頁.





URAWA REDS

浦和レッズ 第三者委員会公開シンポジウム

開催日時

2024年2月16日(金)

会場

浦和コミュニティセンター多目的ホール

主催

浦和レッドダイヤモンドズ株式会社

第三者委員会設置趣旨

本第三者委員会は、過去において発生した試合運営管理規程違反事案とそれらに対する弊クラブの対応を分析し、再発防止施策と教育・啓発施策を検討、提言することを目的として設置されました。

一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構の前代表理事をお務めの武藤芳照様を始めとした、社会とスポーツの関わりや、スポーツにおけるコンプライアンス及びガバナンスに広く見識を有する8名のみなさまに委員を委嘱し、これまで20名近くの方々を対象としたヒアリングを実施いただくとともに、国内・海外における類似事案などを研究材料として、

- ①不適切行為の原因分析
- ②クラブが講じてきた対策についての評価と問題点の洗い出し
- ③今後の必要な対策についての提言検討

という3つのテーマに沿った分析、検討を行っていただきました。

これらの分析、検討に基づき、第三者委員会から弊クラブへ、報告、提言を行っていただく「浦和レッズ第三者委員会公開シンポジウム」を以下のとおり実施いたします。



(第三者委員会での様子)

プログラム

第1部	18:50	開会	
		主催者 代表挨拶	浦和レッドダイヤモンドズ株式会社 代表取締役社長 田口 誠
	19:05	当該事案の経緯説明 事後対応について	浦和レッドダイヤモンドズ株式会社 取締役副社長 清水 稔
		委員会報告 委員会活動経過に関する報告 各チーム報告	武藤 芳照 委員長
			〈Aチーム〉 松瀬 学 委員 高橋 義雄 委員
〈Bチーム〉 山本 浩 委員 ヨーコ ゼッターランド 委員			
第2部	20:25	指定発言	指定発言者
		総合質疑	第三者委員会全委員 指定発言者 発言・質問者
	総括・提言	結城 和香子 副委員長	
	委員会提言手交	武藤 芳照 委員長 浦和レッドダイヤモンドズ株式会社 代表取締役社長 田口 誠	
	21:00	閉会	



[主催者代表挨拶]



【田口 誠 代表取締役社長】

「本日はお忙しい中、本シンポジウムにご参加くださいます、誠にありがとうございます。また、あらためまして、昨年の天皇杯において発生いたしました試合運営管理規程違反により、大変多くのおみなさまにご迷惑をお掛けいたしましたことを、クラブを代表しまして心よりお詫び申し上げます。

田口 誠 代表取締役社長 本日のシンポジウムは昨年の天皇杯での事案を含めまして、過去に発生した試合運営管理規程違反事案とそれらに対する私どもの対応について、第三者委員会のおみなさまに分析いただいた結果を踏まえ、再発防止施策と教育啓発施策についてご提言をいただく場となっております。

今回こうした公開シンポジウムという形を取らせていただいた理由については事案発生以降、私ども浦和レッズは『遅れず、隠さず、ごまかさず』という原則を徹底してまいりました。その姿勢を最後まで貫く必要があるという考えに基づき、第三者委員会のおみなさまのご理解のもと、本日の開催に至っております。

ご提言に対してどのようにクラブとして実行に移していくか、今後検討してまいりますが、第三者としての冷静かつ客観的な視点からご提言をいただけることを大変ありがたく思うとともに、謙虚に、誠実に向き合っていきたいと思っております。それでは本日、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。」

[当該事案経緯説明および事後対応等についての説明]



【清水 稔 取締役副社長】

「浦和レッズの清水でございます。コンプライアンス担当役員であります私より、違反事案の発生経緯、およびその後の対応についてご説明をさせていただきます。

それではまず、発生事案についてご説明させていただきます。本事案は2023年8月2日水曜日に、天皇杯 JFA第103回全日本サッカー選手権大会 4回戦 名古屋グランパス戦が行われたCSアセット港サッカー場にて、試合終了から約20分後の21時15分ごろに発生いたしました。

当時、一部の浦和レッズサポーターと、昨シーズンまでスポーツダイレクターを務めておりました土田(尚史)、およびテクニカルダイレクターの西野(努)が浦和側ゴール裏スタンドで話し合いを行っておりました。話し合い自体は冷静に行われていたため、所轄の港署雑踏警備のみなさまはその状況を確認され、この時点でスタジアムから撤収されております。

そうした状況下で、バックスタンドへ横断幕の撤去に来ていた名古屋グランパス様のサポーター2名が浦和ゴール裏に向けて発した言葉を一部の浦和レッズサポーターが挑発と受け取り、20名ほどが憤慨し、バックスタンド側へ移動いたしました。複数名の浦和レッズサポーターが静止を試みましたが止められず、50名ほどの浦和レッズサポーターがピッチに降り、そしてバックスタンド側、名古屋エリアに侵入をいたしました。その後、浦和、名古屋、両クラブのスタッフや警備員が静止を試みましたが叶わず、後に映像で確認できた人数としては、80名の浦和レッズサポーターがバックスタンドコーナー付近まで侵入をいたしました。

そして発生から約5分後に、浦和レッズサポーターの代表者が名古屋グランパスサポーターの代表者と会話をするために名古屋側のゴール裏スタンドへ行き、徐々に落ち着きを取り戻しましたが、コーナー付近では口論が再燃するなどしていたころ、愛知県サッカー協会様から状況を伝えられた所轄の港署雑踏警備が会場へ引き返し、両サポーターの代表者同士の会話を経て収束しました。発生事案の概要は以上となります。

続いて、事後対応についてご説明をさせていただきます。試合当日、騒動の収束後にスタジアム内にて事実確認が二度にわたり行われました。一度目の事実確認は、日本サッカー協会様、Jリーグ様、愛知県サッカー協会様、名古屋グランパス様、浦和レッズ、そして両クラブサポーターの7者間で行われました。そして二度目の事実確認は日本サッカー協会様、Jリーグ様、愛知県サッカー協会様、マッチコミッショナー様、警備会社様、名古屋グランパス様、浦和レッズの7者間で行われました。

両事実確認はその時点で出席者が各々把握している情報を持ち寄り、認識を合わせていく形で行われ、物損事故が生じたことは確認されましたが、暴力行為はなかったという結論になりました。ただし、これを最終結論とはせず、後日被害届が出るなどした場合や、日本サッカー協会様が主体となり行っていく映像確認を通じて新たな事実が把握できた場合については、適正に対応していくという方針をその場で確認して終了しております。

それ以降の対応といたしましては、違反行為者への対応と弊クラブ内の取り組みの2つに注力してまいりました。まず、違反行為者への対応についてご説明いたします。試合当日の事実確認に基づき、事案発生翌日となる8月3日木曜日に入場禁止処分を含む行為者への処分を決定し、通達、発表をいたしました。そして事案発生の2日後となる8月4日金曜日に記者会見の実施を決定し、メディアのみなさまや関係各所にご案内の上、その翌日、事案発生から数えますと3日後の8月5日土曜日に記者会見を実施いたしました。

その後、日本サッカー協会様が行ってこられた映像確認に弊クラブ競技運営担当者が合流する形で、暴力行為を含む違反行為の有無やその行為者の特定等を相互で行いました。その結果確認された違反行為に対し、日本サッカー協会様による処分と合わせ、クラブ独自の処分を科すなどいたしました。具体的な行為者数とその処分といたしましては、無期限入場禁止処分対象者が22名、有期入場禁止処分対象者が31名、嚴重注意処分対象者が11名のほか、違反行為が確認されたものの個人特定に至っていない行為者が16名おり、計80名に上ります。なお、個人特定に至っていない違反行為者につきましては、引き続き日本サッカー協会様と連携し、特定に努めてまいります。

次に、弊クラブ内の取り組みについてご説明いたします。『違反行為に対する新たな処分基準の作成』、『処分および処分解除決定の運用プロセスの見直し』、『第三者委員会の立ち上げ』、『即時退場を含む違反行為者への適時適切かつ毅然とした対応』、『スタジアムでの禁止事項等観戦ルールの周知徹底』、『ファン・サポーターのみなさまとのコミュニケーションの再構築』という6つの施策を中心に再発防止への取り組みを進めております。本日のシンポジウムの開催もその一環ではございますが、永久入場禁止処分や損害賠償請求権の行使等を含む弊クラブ独自の処分基準の策定や、コンプライアンス委員会の新設など、すでに多くの施策が実行フェーズに入っております。引き続きこれらに限らない取り組みも含め、クラブ内外を問わず、この事案を風化させることなく、同様の事案を二度と発生させないよう、強い覚悟で取り組んでまいります。以上でございます。』

[委員会提言手交後の挨拶]

【田口 誠 代表取締役社長】

「本日はありがとうございました。第三者委員会のみなさまから頂戴したご提言はもちろんのこと、本日の参加者のみなさまからいただきました、さまざまなお声に対し、誠実に向き合い、そしてファン・サポーターのみなさまとともに、安全・快適で熱気ある満員のスタジアムの実現に全力で取り組んでまいりたいとあらためて感じた次第です。浦和レッズは社会の一員であるということを強く意識し、これからも誠実にクラブ運営を行ってまいりますので、引き続きのサポートをどうぞよろしくお願い申し上げます。本日はありがとうございました。」

【阿部 勇樹 浦和レッドダイヤモンズユースコーチ】

「指定発言者として参加させていただきます、阿部勇樹です。お願いします。今回の2023年8月2日のことに関して最初に聞いたときに思い出したのは、2014年の3月、横断幕の件で無観客試合となった時のことです。そのとき選手として感じたことは、誰もいないこのスタジアムでJリーグの試合をする。イメージはしていたけど、正直、ピッチに立って、普段やるトレーニングマッチなどで戦っているのかなという印象を持ちました。それと同時に、あらためて、常に多くのサポーターの方が一緒に闘ってくれている大きさを感じた無観客試合でした。

そして今回、天皇杯に出場できないという処分が下されました。この試合に負けてしまったということももちろんあると思います。その年の5月、ACL3度目の優勝を勝ち取りました。その結果もあり、サポーターのみなさんの期待も間違いなく大きかったと思います。その中で、敗戦はなかなか受け入れるのが難しかったんじゃないかなと思っています。

しかし、そういった問題、事案が起きたことによって、いろいろなところに影響、ダメージがあったと思います。チームに対しては経済的なダメージもあったと思います。選手への影響としては、やはり試合数が減るということ。J1リーグがある、それだけ戦えばいい、ではなくて、浦和レッズには本当に多くの選手がいます。試合が数多くあると選手は日程的にきついかもかもしれませんが、若い選手の試合機会を確保するという意味では非常に重要な試合でした。それを考えると非常に選手にとってダメージは大きかったんじゃないかなと思っています。

そしてサポーターのみなさまにもダメージはあったと思います。日頃からこの愛する浦和レッズのチームを応援できない、その試合数が減ってしまうというのは少なからず思っていたんじゃないかなと思っています。

他のチームはどうか分かりません。個人の選手を応援して、その選手を引き続き、ということが多いのかもしれませんが、浦和レッズのサポーターの方は本当に浦和レッズが好きで、浦和レッズのために一緒に闘って応援してくれるという方が非常に多いと思っています。ですので、全体を考えると、みなさんが受けたダメージも本当に大きいと思います。

トップの試合、アカデミーの選手にとっても、子どもたちは見られる機会を失ったとも思っています。アカデミーの選手からしたら、トップの選手は憧れの存在です。その機会が少なくなるのは非常に残念だなと思っています。

そして今、ユースの選手を見ておりますけど、『ジュニアユースの選手、ジュニアの選手にとって、もしかしたら君たちユースの選手は憧れの存在かもしれない。だから振る舞いや、誰に見られてもおかしくない行動をしよう』という話をしています。トップの選手もアカデミーの選手に見られている。街で歩けば、サポーターの方も見ている。他のチームのサポーターの方も見ている。サッカーを離れたところでも、浦和レッズを背負って、エンブレムを背負って闘っているっていうところは自覚しな

ければいけません。

サポーターのみなさまはどうでしょうか。例えば、子どもたちがスタジアムに行って、みなさんの素晴らしい応援、雰囲気は憧れて、『ああ、彼らのようになりたい。浦和レッズを応援したい』。そういった子どもたちは多いと思います。そういった子どもたちに本当に『俺たちのようにやってくれよ』という姿を見せているのでしょうか。もちろん数多くのサポーターは見せてくれています。そういった声も聞きます。だけど、一つのこと、そういったものが失われてしまう。みなさんが一生懸命になって積み上げてきたものがなくなってしまう。壊してしまうのはやはり簡単だと思います。

こういったことがあった後が大事ではないかと思っています。それはもちろん、クラブもそう。浦和レッズ側もこうなる前に、もっとやれたことがあるんじゃないか。今まで曖昧にしていた部分で、はっきりノーと言えなかった。それは、クラブ側の責任でもあるかなと思っています。それは現役時代も感じていました。

クラブの人は選手を守ったり、サポーターの方を守ったり、いろんなところで力を貸してくれました。逆にふがいない試合をすればサポーターの方が選手にぶつける、ため込んだものを発散させる機会がもっと必要だったのかもしれない。ふがいない試合をした後、なかなかバスが出られないというときもありました。多くの方が選手に意見をぶつけたいという思いを持って来てくれたと思います。少し時間が経って、選手が降りて、その意見を聞く。降りても殴られることはないと思っています。サポーターのみなさんが選手たちに伝えたい、それを聞いてほしいという思いがなかなか実現できなかった。時間がかかってしまった。それによってバスの出発も遅れて、次の日に移動があったり、お互いに解決策を見つけられずに過ごしていたと思います。

今までみなさんとこのクラブ全体で作り上げてきた、この浦和レッズが盛り上がらないと、Jリーグが盛り上がらないと思っています。こういった事案で盛り上がる、いろいろな方に知ってもらうのではなくて、元々あるこの素晴らしいクラブ、みなさんの力をもっと違った形でぶつけて進んでいかなければいけないと思っています。それにはやはり全員が、現場もそう、会社の方もそう、もちろんサポーターの方もそう、同じ仲間として自覚していくことです。地域に活力を与える、盛り上げる、浦和を、埼玉、Jリーグを盛り上げて日本を盛り上げる。

それでアジアに行ったんですよね。みんな。そして世界に行った。みんなが一つになったからこそ、そういったことが出せてきたわけです。僕は2021年に引退しました。その後に、浦和レッズが本当に一つになったらどんな力が出せるのかという話をインタビューなどでさせていただきました。ACLを獲ったときなど、一つになったのかなとも思っています。でも本当の意味で、まだまだ一つになりきれていない部分があるのではないかと思います。

サポーターのみなさんと作り上げてきたこの浦和レッズを、さらに未来へつなげていかなければい

けません。次世代へしっかりつないでいくこと、それは僕たちの任務、役割なのではないかと思っています。

もちろんみなさんのパワー、浦和レッズへの気持ちは十分理解しています。それを一つの方向に向かってやっていくことは難しいですよ。だって多くの人がいるんだもん。だけど良くなるっていう目標は絶対忘れないでほしいと思います。もちろん通る道、過程は違うと思います。だけど、みなさんが目指すもの、浦和レッズの姿というものは、みんな同じだと思っているので、これからもサポーターの方とクラブと、駄目なものは駄目、仲間がミスしたら、失敗したら二度とそのミスが起きないようにサポートしてあげる。これがチームプレーだと思います。

浦和に関わる全ての方が一つになって、さらに大きくなる浦和レッズを見られる。今は周りから見えていますし、アカデミーから選手が加わるようにサポートをしていきたいと思っています。今後浦和レッズのサポートをよろしくお願いします。ありがとうございます。」

阿部勇樹プロフィール

【氏名】 阿部 勇樹 (あべ ゆうき) ABE Yuki

【生年月日】 1981年9月6日生まれ(42歳)

【出身地】 千葉県市川市

【ポジション】 MF

【身長/体重】 178cm/77kg

【指導歴】 2022年～浦和レッドダイヤモンズユースコーチ

【選手歴】 富美浜FC→市川FC→ジェフユナイテッド市原ジュニアユース→ジェフユナイテッド市原ユース(1997～1999年トップチーム登録)→ジェフユナイテッド市原・千葉→浦和レッズ→レスターシティFC→浦和レッズ

【Jリーグデビュー】 1998年8月5日 G大阪 3 - 2 市原 ※ユース在籍中

【Jリーグ初ゴール】 1999年4月10日 神戸 4 - 3 市原 ※ユース在籍中

【獲得タイトル】

J1リーグ1stステージ(2015)

J1リーグ2ndステージ(2016)

Jリーグカップ(2005、2006、2016)

天皇杯(2018)

AFCチャンピオンズリーグ(2007、2017)

スルガ銀行チャンピオンシップ(2017)

【個人タイトル】

Jリーグベストイレブン(2005、2006、2007、2016)

Jリーグカップ ニューヒーロー賞(2005)

【代表キャップ】 53試合出場・3ゴール

※2010FIFAワールドカップ 南アフリカ 日本代表メンバー(4試合出場)

※AFCアジアカップ2007 日本代表メンバー(6試合出場)

【世代別代表歴】

アテネオリンピック2004 サッカー 日本代表メンバー(3試合出場)



指定発言・質疑応答のまとめの座長メッセージ

1. あ：愛するサッカーを大切に守り発展させよう
2. べ：別格の強さと凛々しいクラブを目指そう
3. ゆ：夢を叶えるために次の世代を育（はぐく）もう
4. う：嬉しい時も苦しい時も心は一つ
5. き：規則を守り、不正・違反・卑劣な行為をなくそう

メディア参加者概要

No.	職 掌	分 類	会 社	支 社・支 局
1	ペン	通信社	共同通信	運動部
2	ペン	通信社	共同通信	運動部
3	ペン	通信社	時事通信	運動部
4	ペン	一般紙	朝日新聞	東京本社スポーツ部
5	ペン	一般紙	産経新聞	東京本社
6	ペン	一般紙	日本経済新聞	東京本社
7	ペン	一般紙	毎日新聞	東京本社
8	ペン	一般紙	毎日新聞	東京本社
9	ペン	一般紙	読売新聞	東京本社
10	ペン	一般紙	読売新聞	さいたま支局
11	ペン	スポーツ紙	デイリースポーツ	コンテンツ局
12	ペン	スポーツ紙	サンケイスポーツ	東京本社
13	ペン	スポーツ紙	スポーツニッポン	東京本社
14	ペン	スポーツ紙	東京中日スポーツ	東京本社
15	ペン	スポーツ紙	東京スポーツ	運動部
16	ペン	スポーツ紙	日刊スポーツ	東京本社
17	ペン	スポーツ紙	スポーツ報知	東京本社
18	ペン	地方紙	埼玉新聞	
19	ペン	コミュニティラジオ	CityFMさいたま	
20	ペン	サッカー専門誌	スクワッド	
21	ペン	サッカー専門web	Football Zone	
22	ペン	ローカルメディア	浦和フットボール通信社	
23	ペン	ローカルメディア	清風庵	
24	ペン	ローカルメディア	株式会社レディオパワープロジェクト	REDSPRESS
25	ペン		フリーランスA	
26	ペン		フリーランスB	
27	ペン		フリーランスC	
28	ペン		フリーランスD	
29	TV	テレビ局(キー局)	日本テレビ(NNN系列)	
30	TV	テレビ局(キー局)	日本放送協会(NHK)	東京放送センター
31	TV	テレビ局(キー局)	日本放送協会(NHK)	東京放送センター
32	TV	テレビ局(キー局)	日本放送協会(NHK)	東京放送センター
33	TV(応援番組)	テレビ局(独立U局)	テレビ埼玉	

ペン	25社28名
TV	3社5名

提言の内容

第三者委員会は、以下の6つの点において提言をまとめた。

1. 当該事案ならびに過去10数件におよぶ違反行為の三大発生要因すなわち動機、機会、正当化、特性要因を確認、点検し、それらを提言して同様の事態が生じないように、具体的な再発防止策および未然防止策を速やかに構築すること。

第三者委員会の分析から導き出された特性要因として、サポーターのなかに「売られた喧嘩は買う」といった暴力的言動を肯定しかねない意識が存在する。また、意図的な儀礼的暴力を容認する認知の歪みを再生産する応援スタイルが存在する。このことが継続的に意識や認識面における歪みを生じさせる空間をつくっている。さらに仲間が飛び出していけば禁止されているルールでも破ってしまう抑制の効かない集団心理といった心理が醸成される強い集団意識も応援活動から強化されている。そして、クラブやマスコミは、これらを良いときには迫力のあるサポーター応援として、これらの意識や集団心理を肯定的に利用してきた面がある。

違反行為が繰り返される以上は、サポーターは、クラブを「応援するルール」を守って支援・応援する組織であり、フィールドで試合をする選手でも、相手チームのサポーターと喧嘩をする集団ではないことを強く認識させるための長期的な教育・啓発活動を充実させることが必要である。特に、中心的なサポーター自らが主体的に儀礼的暴力を容認する応援スタイルを変えていくなどの工夫に向けた意識改革が必要である。また、こうした活動は、クラブがスタジアムのすべてのサポーター、特に次世代のサポーターの核となる若者に対して行うこと。そして浦和レッズのサポーターの印象を表面的に喧伝するメディアに向けてもクラブとサポーターで創生する真の応援スタイルを発信していくことが未然防止策となる。

2. マナー違反、ルール違反、法律違反とその防止に関する教育、啓発、周知広報活動の拡充とともに、それぞれの処分規定と制裁制度の整備およびルールの明確化と運用の統一を図ること。

「浦和のサポーター全体の質や雰囲気」を変革していくことを目的として、これまでのクラブの取り組みを継続するとともに、1で提言した長期的な教育・啓発活動を充実させる。さらに、新たに教育啓発イベントを拡充・充実されることも検討すべきである。とりわけ次世代を担う子どもたちへの啓発イベントなどにも力を入れていくことが、長期的に見れば間接的にも一部の問題を起こし得るサポーターの意識や行動に影響を与える。一方で、厳罰化によって違反行為がゼロになるわけではないが、限らない改善活動によって違反活動ゼロを目指す姿勢は大事である。そのためにも、違反行為を働いたサポーターに対して、日本サッカー協会やJリーグによる処分だけではなく、永久入場禁止処分や損害賠償請求権の行使等を含むクラブ独自の処分を科すことを明確に宣言し、わかりやすい形で応援するすべての人に伝え続けること、そしていざ違反行為が生じた際には、判断にぶれのない運用を徹底することが重要である。

3. 安全・安心なスタジアム空間をつくり、守ることがクラブとしての社会的責務であることへの意識変革を図り、具体的な改善策を実施するとともに、選手、スタッフ等へのコンプライアンス教育啓発事業を継続すること。

選手やスタッフ等の意識や行動が、サポーターの目の前で繰り広げられる試合にも反映される。それがまたクラブの相手チームへのリスペクトや試合におけるフェアプレー、スポーツマンシップの表現となって現れる。選手やクラブをはじめ、会場の警備スタッフすべての試合に関わる人々のフェアネス、スポーツマンシップ、コンプライアンス意識を高めることがサポーターによる違反行為の抑止につながる。高いコンプライアンス意識を持った試合をつくるすべての人のコミュニケーションが違反行為の芽を摘み取ることになる。

4. 健全な応援文化の醸成を図り、勝利への追求や浦和を支える熱意、サポーターのアイデンティティが両立するように、ソフト面、ハード面への改善に努める。

身体的、精神的暴力を絶対に容認しない応援文化を醸成するためには、スタジアムのソフト面、ハード面への継続的な改善が欠かせない。試合会場では、個々のサポーターにとって充実した時間を過ごすことのできる開門前の準備や撤収などを含めたクラブの試合運営と連携した総合的な入場システムづくりがサポーターのストレスを軽減し、より快適な応援空間が創造される。特に、アウェーゲームの会場は、応援の横断幕や応援旗の持ち込み・設置、太鼓や笛などの制限などが異なるため、相手チームや試合運営管理者との連携を密に行い、スタジアムルールの周知徹底、チェックリストを作成し、警備や主催者側との連携を図れるように努めることが重要である。

これまで実施してきたクラブ幹部とコア・サポーター間における対話はより健全な関係性を構築するための努力が求められる。サポーターから発せられる意見から健全な応援文化を創造するためのアイデアを取り入れ、クラブもそうした互いの工夫が実るためにお互い努力することが期待される。

サポーターとクラブとの対話は継続して実施するものの、公的要素を高める形で実施し、一部のクラブスタッフとサポーターが個人的なつながりを持つ形や、私的関係性が強い形で実施しないよう配慮することも重要である。

5. 独立性の高いコンプライアンス部署を設置し、課題の整理、具体的に違反行為の防止策の立案と処分制裁のあり方を評価するとともに、クラブ内およびサポーター、ファン、地域の市民、とりわけ子どもたちへのスポーツの価値に関わる教育、啓発活動を展開すること。

これまでの一連の不祥事案、問題発生は、まず何よりも、クラブのガバナンスにおける意識や対応が不十分であったことをクラブ側が認識し、受け止めることが第一歩である。その上で、上記提言を実行していくためにも、独立性の高いコンプライアンス部署を設置し、「安全・安心なスタジアム空間を守る責務」を遂行していくことが必要である。

第三者委員会としては、現行の制裁制度は簡略的であると考え、制裁制度の再整備を検討すること

を強く推奨する。今後、生じた違法行為については、警察への通報、刑事告訴、損害賠償請求等の対応を含め、毅然とした措置をとることもクラブの意思として、クラブ関係者全員が共通意識を持つことが肝心である。

6. 浦和のサッカー文化の伝統と熱情を継承しつつも、必要な意識の変革を図り、スタジアムが多様な人々の絆と誇りと力と笑顔の場所となり、それを未来へとつなげられるように尽力すること。

文化とは、人間の生活を豊かにし、幸福にするために存在するものである。浦和のサッカー文化の伝統と熱情を継承し、よりよいものにするための不断の努力を厭わ^{いと}ないことが大事である。クラブ理念を共有、尊重し、クラブの理念である「浦和レッズは、サッカーをはじめとするスポーツの感動や喜びを伝え、スポーツが日常ある文化を育み、次世代に向けて豊かな地域・社会を創っていきます」を広く周知し訴えるとともに、クラブ理念に沿った行動をし続ける強い精神を皆で持つことを忘れてはいけない。スタジアムが多様な人々の絆と誇りと力と笑顔の場所となり、それを未来へとつなげるためにも。

卷 末 資 料

委員会規定／委員会開催記録／
調査資料（Aチーム）／
報道実績一覧

浦和レッドダイヤモンドズ 第三者委員会規程

第1条(趣旨)

本規程は、浦和レッドダイヤモンドズ株式会社(以下、「クラブ」という)が「浦和レッドダイヤモンドズ サッカー試合運営管理規程」に基づく円滑で安全な試合運営を行うべく、第三者委員会(以下、「委員会」という)の設置及びその目的、構成、機能その他必要な事項を定める。

第2条(委員会の設置及び目的)

委員会は、令和5年8月2日開催の天皇杯JFA第103回全日本サッカー選手権大会ラウンド16(4回戦)名古屋グランパス戦において発生した、クラブのサポーターによる違反行為(以下、「事案」という)及び事案以前のクラブサポーターの違反行為に対するこれまでのクラブの対応を分析し、再発防止策とクラブ及びファン・サポーター等への教育啓発策を検討実施し、サッカー及びスポーツ全体の普及振興に寄与することを目的として設置される。

第3条(委員会の構成)

1. 委員会は、第2条に定める目的を達成するため、クラブ外の委員(以下、「委員」という)を選任する。
2. 委員の選任にあたっては、社会からの信頼性を有し、スポーツにおけるコンプライアンス及びガバナンスに広く見識を有し、公正性、中立性を確保できる者の中からクラブが選考し、クラブが委員に委嘱する。

第4条(委員の職務)

委員は、以下の業務を行う。但し、クラブからの要望等、必要に応じて職務が一部変更となることがある。

1. 委員会に関連する会議及びシンポジウム等への出席
2. 事案に関係した者からの事情聴取、情報収集、分析
3. クラブ内外関係者からの意見聴取
4. 再発防止策の提案とクラブ及びファン・サポーターへの助言、教育・啓発

第5条(委員長、副委員長)

1. 委員会に委員長を置き、委員の互選によってこれを定める。
2. 委員長は会務を総括し、委員会を代表する。
3. 委員会に副委員長を置き、委員長の任命によってこれを定める。
4. 副委員長は委員長を補佐し、委員長に万一事故があるときはその職務を代行する。

第6条(任期)

委員の任期は令和6年3月末日までとする。

第7条(事務局)

1. 委員会の事務を処理させるため、委員会の事務局を委員会内に置く。
2. 事務局の構成員は、クラブが任命する。

第8条(委員会の実施要領)

1. 会議は事務局が日程を調整のうえ召集し、委員長が議長を務める。
2. 会議は必要に応じ開催する。また、緊急を要する場合は、適宜開催することができる。
3. 会議は委員の過半数の出席をもって成立する。
4. 会議は出席者の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
5. 会議は基本的に対面式で開催することとするが、やむを得ない事情により出席が困難な場合はオンラインでの出席も可とする。更にやむを得ず出席が困難な場合は、別途委員長により意見聴取を行うなど、柔軟に対応する。
6. クラブ内外関係者への意見聴取等は、委員会からの要望等も考慮し、事務局協力のもとで対応する。
7. クラブ主催の公開シンポジウムを別途開催、会議での議論を踏まえて委員会報告を行うとともに、各委員もシンポジストとして出席、再発防止策の提案とクラブ及びファン・サポーターへの助言、教育・啓発等を適宜行うこととする。

第9条(附則)

本規程は、令和5年10月10日から施行する。

委員会開催記録

【第一回 第三者委員会】

1. 日 時：2023年11月14日(火) 12:00-14:00
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会(五十音順)】

高橋 義雄委員

松瀬 学委員

武藤 芳照委員

望月 浩一郎委員

山本 浩委員

結城 和香子委員

ヨーコ ゼッターランド委員(オンライン参加)

竹村 瑞穂委員は本務のため欠席

【事務局(浦和レッドダイヤモンド株式会社)】

清水 稔

須藤 伸樹

4. 委員会

- (1) 委員会設置経緯説明
- (2) 挨拶・各委員の紹介
- (3) 委員会規程説明
- (4) 委員長(委員互選により選任)・副委員長(委員長の任命)選任
委員長：武藤 芳照委員 副委員長：結城 和香子委員
- (5) 第三者委員会の使命・課題・作業の進め方
- (6) 各チームの構成と作業のポイント・留意点の確認
 - ①不適切行為の原因分析：Aチーム(松瀬 学委員・高橋 義雄委員)
 - ②これまでクラブが講じてきた対策についての評価と問題点の洗い出し
：Bチーム(山本 浩委員・ヨーコ ゼッターランド委員)
 - ③今後の必要な対策についての提言検討
：Cチーム(望月 浩一郎委員・竹村 瑞穂委員)
- (7) 今後のスケジュール案策定

【第二回 第三者委員会】

1. 日 時：2023年12月19日(火) 12:00-14:00
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会】

武藤 芳照委員長

結城 和香子副委員長

高橋 義雄委員

松瀬 学委員

望月 浩一郎委員

山本 浩委員(オンライン参加)

ヨーコ ゼッターランド委員(オンライン参加)

竹村 瑞穂委員は本務のため欠席

【事務局】

清水 稔

4. 委員会

- (1) 第一回第三者委員会議事録の承認
- (2) 各チームの活動状況の報告
 - ① Aチーム(不適切行為の原因分析)
 - ② Bチーム(これまでクラブが講じてきた対策についての評価と問題点の洗い出し)
 - ③ Cチーム(今後の必要な対策についての提言検討)
- (3) 総合討議
- (4) 今後の計画について

【第三回 第三者委員会】

1. 日 時：2024年1月6日(土) 16:00-18:00
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会】

武藤 芳照委員長

結城 和香子副委員長

高橋 義雄委員

松瀬 学委員

望月 浩一郎委員

山本 浩委員

ヨーコ ゼッターランド委員

竹村 瑞穂委員は本務のため欠席

【事務局】

清水 稔

須藤 伸樹

4. 委員会

- (1) 第二回第三者委員会議事録の承認
- (2) 各チームの活動状況の報告
 - ① Aチーム(不適切行為の原因分析)
 - ② Bチーム(これまでクラブが講じてきた対策についての評価と問題点の洗い出し)
 - ③ Cチーム(今後の必要な対策についての提言検討)
- (3) 結城副委員長からの英国サッカー界の情報について
- (4) 公開シンポジウムの進行と内容についての確認

【第四回 第三者委員会】

1. 日 時：2024年2月1日(木) 18:00-20:00
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会】

武藤 芳照委員長

結城 和香子副委員長

高橋 義雄委員

松瀬 学委員

望月 浩一郎委員

山本 浩委員

ヨーコ ゼッターランド委員

竹村 瑞穂委員(オンライン参加)

【事務局】

清水 稔

須藤 伸樹

4. 委員会

- (1) 第三回第三者委員会議事録の承認
- (2) 各チームの活動状況の報告
 - ① Aチーム(不適切行為の原因分析)
 - ② Bチーム(これまでクラブが講じてきた対策についての評価と問題点の洗い出し)
 - ③ Cチーム(今後の必要な対策についての提言検討)
- (3) 総合討議

- (4) 公開シンポジウムについて
- ① 周知方法
 - ② アジェンダ
 - ③ 指定発言者
 - ④ シンポジウム後の報告書作成について

【第五回 第三者委員会】

1. 日 時：2024年2月26日(月) 18:00-20:00
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会】

武藤 芳照委員長

結城 和香子副委員長

高橋 義雄委員

松瀬 学委員

望月 浩一郎委員

山本 浩委員

竹村 瑞穂委員(オンライン参加)

ヨーコ ゼッターランド委員は本務のため欠席

【事務局】

清水 稔

須藤 伸樹

4. 委員会

- (1) 第四回第三者委員会議事録の承認
- (2) 公開シンポジウムについての感想・意見交換
- (3) 報告書作成について(今後の作業の確認)

作業部会からの報告

(作業部会：武藤委員長、結城副委員長、高橋委員、事務局、印刷会社で構成)

※作業部会開催記録は下部に記載

【報告書の構成】

- ・はじめに
- ・目次
- ・報告の概要
- ・委員会名簿
- ・認定された事実と処分内容
- ・各チームからの報告

- ・ 提言の内容
- ・ 卷末資料
- ・ 委員会規程
- ・ 委員会開催記録
- ・ 各チームの調査・ヒアリング・検討作業で作成・確認された詳細な記録・データ・重要な資料
- ・ はしがき
- ・ 奥付

※第五回 第三者委員会開催に伴う報告書作成における作業部会を開催

1. 日 時：2024年2月26日(月) 16:00-17:15
2. 場 所：KKRホテル東京(国家公務員共済組合連合会 東京共済会館) 11階会議室
3. 出席者：

【第三者委員会】

武藤 芳照委員長

結城 和香子副委員長

高橋 義雄委員

【事務局】

清水 稔

須藤 伸樹

松本 至弘(浦和レッドダイヤモンド株式会社)

印刷会社営業担当者

以 上

調査資料 (A チーム)

「関係者へのヒアリング結果、主な AI 質的分析データ一覧」

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのバラブレース
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 名古屋サポーターが残っていたため、 中心的な人物が緩衝エリアに来て、挑発的な言葉をかけた。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 試合後、人が少なくなった中で「 かかってこいよ 」という言葉が聞こえた。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: サッカーの試合中、サポーターに暴力を振るおうとは思わず、謝らせようと思って動いた。面識はないが、格好でサポーターだと分かった。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 0-3で負けたが、ストレスはなく、 なめられたと感じ、謝らせるために行った。男として我慢できない と思った。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 男としてなめられた ことがモック。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 人間の感情は変えられないが、行動は変えられる。カッとなることはあるが、 なめられた時には絶対にカッとする。
①, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 浦和レッズは昔の人たちが築いてきたものを誇りとしており、名古屋のサポーターからかっこよさを認められたが、なめられることには納得できなかった。
②, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 2022年8月、名古屋がゴール裏まで来た。
②, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 幕の貼り方で文句があったが、話し合いで解決済み。逆のことが起きたが、問題なし。
②, 1-94 から	1なぜ<動機>	AI: 集団心理による暴力行為は、 実際には3人や5人程度の少数が行っていることが多い。集団を捉えることは難しいが、暴動は少数の人々によって引き起こされることが多い。
②, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 「 言ったやつを出せ 」と「 謝られれば下げられる 」という主張を繰り返していた。
②, 1 から	1なぜ<動機>	AI: ウルトラスの中での話。こちら側の人間が最終的に出てきて、彼らのチームの人間が言ったことを認めた。
②, 1 から	1なぜ<動機>	AI: トップが優勝目指しギャップあり、方向性不透明。補強に納得感求める。
③, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 新興勢力の若者たちが出禁になっている。やくざな世界ではないが、 チンピラが名を上げたいという欲求がある。
③, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 仲間意識や情熱から負けたくないという気持ちがあるため、止める人も降りたり、処罰の対象になることもある。
③, 1-98 から	1なぜ<動機>	AI: やんちゃな人間が集まり、鬱積を抱える。 向こうから言われたらそれなりのことをする。
③, 1 から	1なぜ<動機>	AI: サポーターを囲んだり、緩衝帯に突っ込んだりしたことがある。社長との話し合いに参加し、 相手がやってきたから行動した。
③, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 怪我させたら傷害になるので、止まらべきたがったが止まらなかったことを反省。 止められた人が行けなかった ことも問題。
③, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 豊田スタジアムで名古屋クラブがアウェイの我々に対して押し付けをしてきた。採めた。
④, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 名古屋のサポーターが暴力を振るったが、負けたからといって腹いせに暴力を振るうことは許されない。芝生やピッチは選手の場所であり、スタンドに留まるべきだというポリシーを持つ。
④, 1-71 から	1なぜ<動機>	AI: 野次が飛んだ ということがある。
④, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 「 弱い 」と言われると腹が立つ。それがなければ、試合に負けたことで終わっていた。
④, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 負けた腹いせに相手に攻撃することはない。負けても相手からの攻撃には応じない。 喧嘩を売られたら行くしかない。
⑤, 1-55 から	1なぜ<動機>	AI: サッカーで負けたと悔しい。応援しているチームが負けたと悔しい。 相手のサポーターから「帰れよ」と言われたらカッとする。 問題を起こすのは駄目。正直に「はい」と言って帰るか、無視する。
⑤, 1 から	1なぜ<動機>	AI: プレーイングはまだいいが、「 死ぬ 」という言葉は許せない。
⑥, 1-94 から	1なぜ<動機>	AI: レッズの強化担当とサポーターが静かに話し合っていた中、 クラブバスが挑発の言葉を叫んだ ことが分かった。挑発行為をした人は悪いと思う。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: リスク高い試合。 挑発に反応し過剰 だった。それが許されると思っているなら間違っている。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 浦和レッズが負けて、 名古屋側のサポーターが発言し、浦和レッズの社長が取り囲まれた。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 豊田スタジアムでのトラブルが遺恨 となり、開門時から挑発的な態度が見られた。 最後に挑発に乗ってしまった。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 浦和レッズサポーターが名古屋側の挑発に反応し、威嚇行為を行ったが、懲罰を科す根拠にはならない。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: JFAは差別行為や誹謗中傷の言葉はなかったと報告。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 浦和レッズのサポーターが名古屋に対して差別的な言葉を言っているため、 処分すべきかもしれない。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 浦和レッズと名古屋サポーターが野次応酬していたが、 試合後名古屋サポーターが罵詈雑言を浴びせ、浦和レッズサポーターがキレて名古屋側に走って行った。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: サポーターの一部が興奮しすぎ ていた。
⑥, 1 から	1なぜ<動機>	AI: 酷いことを言われた ため。
⑥, 1-13 から	2なぜ<機会>	AI: フェンスの下に下りたいと聞かれ、「 ここから下りて 」と答えた。
⑥, 1-15 から	2なぜ<機会>	AI: 人が多く集まり、自分は歩いてきたが、 周りが騒ぎ出し、謝罪を求められた。 動画が残っている可能性がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 警備不十分で、20~30人の警備員がいたが、対応できなかった。 警備員も抑えようとしたが、不十分だった。
⑥, 1-55 から	2なぜ<機会>	AI: 平日の名古屋での試合後、夜遅くに終わった。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアム内でリーダーやJFA、リーグ、愛知県サッカー協会の人と話し合い、 ここでの注目度について話し合った。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 向こうには40~50人のサポーター がいた。
⑥, 1-89 から	2なぜ<機会>	AI: 警備員4人では不足。 レッズスタッフもいたかも。起きない方法は?
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムが違えば起きなかった。 フェンスの高さはこれくらい。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの構造的問題があった かも。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 人間は守られる場所では何かするが、 越えられるものがある と…。
⑥, 1-101 から	2なぜ<機会>	AI: 緩衝エリアに入れず、下に下りる必要がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 高い場所から降りることができた ので、他の場所も簡単に行けるように感じた。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉スタジアムのピッチに下りるのが難しい。 他のスタジアムと違い、柵の高さも異なる。 普段使われていないスタジアム。
⑥, 1-107 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの構造は大きな要因 と思われる。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 集団心理 により、1人では行動できず、リーダーは責任を持つ。多くの人が止める必要がある場合もあり、それでも行動する必要がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの構造 は重要で、例えば豊田スタジアムや埼玉スタジアムでも起きたことはない。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: リーダーの品行方正を求める上司に従う部下が、 未然防止の観点での予見不足により問題が起きた。 上司が行くなど伝えていたら回避できた可能性がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋での試合は ハイリスクマッチ として準備。名古屋でのプレーには温度感が高く、スイッチが入る。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: シーンを置き換えて考えることが分かりやすい。例えば、 埼玉スタジアムでの構造論点 について、スタジアムを変えた場合の仮定を置く。
⑥, 1-67 から	2なぜ<機会>	AI: ピッチに降りれない理由は、 構造上の問題 による。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 柵がある場所で挑発されても、 死に至る環境なら行かない。 だから、 構造が理由 として問われたら、行かないと答える。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 2008年のガンバサポーターの暴動で、 集団心理 により仲間が止めに行くという行動があった。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スポーツダイレクターに「場所を変えますか?」と提案した。 一緒にいた人は40人くらい。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 土田さんは男らしく、隠れることを嫌がり、対策打っていた。 クラブが場所を移動しなかったことについて、見方によってはクラブが悪いとも言える。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: リーダーがいる組織には、役割や権限を持つ人が必要。 だから、リーダーがいる場所に行った。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 警備員に「 俺がリーダーだから止めに行くから 」と伝え、1人で裏から行き、最短で着いた。中央で小競り合いがあった。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 騒動を早く収めることが目的。 物理的に止めるのは不可能。同時多発的に何が起きているか分からないため。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: クラブの問題は土田さんやクラブ自体の責任ではなく、 改善が必要だ ということを促すが僕の仕事。 施策の実行については提案できなかった ので、僕に責任がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 話し合い中、提案した原因は自分自身にあると気づく。提案しなければよかったのではないかと疑問が浮かぶ。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: クラブは事が起きた後、 全員が総動員で止め に来た。 8人では止められない。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの警備員配置や予算について問題がある。 8人がクラブ総動員で対応した。
⑥, 1-204 から	2なぜ<機会>	AI: サポーターの予見は未然防止の幅を広げること。考えられる範囲を広げることが重要。 スタジアムの構造や警備員の数も要因。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 再犯ではなく初犯の人が1人を除いて処分された。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋に行かなかったことが原因の一つ。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: チームは問題を防ぐために教育を重視し、 昔ほど教育が行われていないことに注意している。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 天皇杯でのスタジアム選定に不満。 CS(アセット港サッカー場)は軟弱で太鼓も禁止。全員イライラ。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: ストレスがある。スタイルを変えなければならぬ。 挑発的。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのバリエーション
③, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 豊田スタジアムでの問題について、クラブが挑発的な行動をしても処分されなかったことがあり、今回も柵の中での行動については緩い処分が予想される。
③, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 運営責任と管理責任が問われる可能性がある。何かあった。
③, 1 から	2なぜ<機会>	AI: カメラやSNSがなかった時代から、現代に至るまでの変化を指摘し、現代にはそれらがあることを述べている。
③, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 監視カメラは普及しており、クラブや埼玉スタジアムでも多数設置されている。今回の報道で再確認されたが、何も変わらないと思われる。
④, 1 から	2なぜ<機会>	AI: J1リーグのとき、レッズの席席が上の方に閉じ込められるような状態で、下に移すか移さないかの問題があった。
④, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの作りは昔からで、スタンドからすぐ飛び降りることができる状態やゴール裏とピッチが近い状態がある。
④, 1-81 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの構造が起りやすいかもしれないが、ピッチに降りることは反対。レッズのサポーターは構造をギチギチにする必要はないと思う。
④, 1 から	2なぜ<機会>	AI: クラブとJリーグはアウェイ試合でもサポーターを支援するためスタッフを派遣している。組織としての徹底が必要。
④, 1 から	2なぜ<機会>	AI: レッズサポーターは暴力と結びつくことが怖い。特にゴール裏は危険。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 大事な試合ではスイッチが入る。リーグ戦とは違い、タイトルがかかった決勝戦や大一番では特にそう感じる。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 選手がウォーミングアップで出てくるとき、熱量が変わり、試合開始1時間前に入場する。スイッチが切り替わり、みなさん「行くぞ」という感じになる。
⑥, 1-44 から	2なぜ<機会>	AI: 試合前1時間でボルテージが高まり、試合中も90分間持続する。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの雰囲気は負けが続いていると背立ちがあるが、全てチームに対してではなく、サポーターの中でも自分たちの応援が足りないと感じている。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 勝敗に関わらず、長時間の騒音には疲れる。負けたときの相手チームの応援も違和感を感じる。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉スタジアムでは、対戦相手のサポーターとの接触を避けるため、柵でエリアを分断し、警備員が監視している。
⑥, 1-68 から	2なぜ<機会>	AI: レッズサイドからの警備員の数は?クラブスタッフ4人と警備員3人が連れている。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋のスタジアムの警備員は少ない。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパスのサポーターがいる境界エリアには横断幕があり、そこに行かないように注意する必要がある。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: ピッチに出る前にスタンドで止まっていたら、騒動は沈静化できたかもしれない。
⑥, 1-78 から	2なぜ<機会>	AI: 接触エリアの警備が手薄だった可能性がある。誰が悪いわけではないが、問題点を指摘したい。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 試合後、浦和と名古屋のサポーターが横断幕を剥がしに行く状況で、緩衝エリアの際で接点になる危険性があった。緩衝エリアには柵があったが、ネット越して相手の顔が見え、野次も飛んでくる。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉スタジアムの高い柵は、侵入者を防ぎ、接触を避けるために設置されている。低い柵だとすぐに残り越えられるが、高い柵によって時間を稼ぎ、警備員が対応できる。
⑥, 1-140 から	2なぜ<機会>	AI: 警備強化は分かったが、仕事中に曖昧な点があった。
⑥, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 太鼓は応援の統率に重要。太鼓なしで手拍子のリズム崩れ、応援困難。普段使うもの不可、太鼓必要。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: J1同士が試合をするレベルの会場ではなかったが、トーナメント戦で勝ち上がり、グランパスとレッズが勝ち上がった場合、対戦する想定はあった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 8月2日の試合会場は、愛知県のグランパスのために港サッカー場しかない。J1同士なので勝ち上がるという前提で進められる。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 日本サッカー協会が判断し、会場を手配することになっている。こちらは会場を提供するだけ。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパス対レッズは港サッカー場でできない。施設が拙いため、愛知県では限界。施設を最大限準備しようと思ったが、ふたを開けてみないと分からない。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 愛知県での開催はリスクがあった。権利を手放したかった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 日本サッカー協会と浦和レッズとの打ち合わせを経て、覚悟を持って臨んだが、結果は失敗した。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 豊田スタジアムは芝生の張り替えのため4月、5月は使用不可。Jリーグも国立競技場で試合。対戦相手は浦和レッズでも豊田スタジアムはOKを出す。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 下りることはできるが、下りたらどうなるかは分かる。下りはしないという意見が出た。下りないための手段は塀だが、現実的ではないという意見もあった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: ピッチへの下降を回避できず、柵を付けることは難しいという話題を警備から聞いた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 天皇杯の横断幕は左右対称に分ける。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズのサポーターが貼ってはいけない場所に大型映像装置をつけたことがあったが、事前に貼ってはいけないと告知されていた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパス対J2の試合では緩衝地帯を設けたことはなく、4回戦で浦和レッズと対戦がある可能性があったため、3回戦のペガタ仙台戦で簡易的な緩衝地帯を作製し、4回戦では強度を増した形で設置した。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: サポーターが向こうに行くことは予想外だった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 警備員は200~300人いた。常時いるような形でも40~50人はいた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパスとの接点は天皇杯のみ。4月のトラブルが解決せず、今回の対戦に影響した可能性あり。警備も話し合った。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: レッズとグランパスの4月のトラブルは、試合会場での太鼓の演奏がストレスの一因になった可能性がある。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 現実的でない柵を乗り越える手段はあるが、それはサッカーの試合観戦を妨げるため、最善を尽くしたという認識に留まった。
⑦, 1-37 から	2なぜ<機会>	AI: 会場に監視カメラはないと思われる。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパスが試合会場を撮影しているが、上層部からしか映していない。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: マテウス選手が移籍するため、グランパスからのセレモニーはやめるよう要請された。JFAも同意し、最後にサポーターにあいさつする中で、グランパスのサポーターのところだけ短い時間であいさつすることになった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: レッズとグランパスのサポーターの間でのトラブルは、グランパスのサポーターによる挑発的な発言が原因である可能性がある。レッズの運営とサポーターは話し合いを進めている。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 4月に何かあったかもしれない。グランパスの運営に関連する。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 事象は複数の要因が重なり合い、特定の人物に帰結するのではなく、結果的にこのような状況になったということ。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 警察が帰ったため。トラブルは起きないと判断され、警察は長くいらなかった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズサポーターが幕を貼り、小競り合いが起り、警察も巻き込まれた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズとグランパスサポーターのトラブルで、警察が介入したが、グランパスサポーターの発言で暴動が起きた。最初は名古屋市の港区の警察署が来たが、周辺を警らしていた部隊が先に来た。港警察署からも多数のバイクが駆けつけた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 再発防止のため、警察が20~30分残ることで事件を回避することができるか考えるべき。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 警備員は人を止めることができない。投げられた人は警備業法違反で訴えられる可能性があるため、名乗り出ている。他の被害者も怪我をしているが、名乗り出ることができない。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 試合会場の選定を厳しくする必要がある。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 港サッカー場を4回戦で使用することは、規定外である。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉FAC愛知県サッカー協会のどちらかしか会場がなく、今回は愛知で開催。代替会場がなかったため、今後改めて検討する必要がある。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉スタジアムで試合ができる可能性があったが、リスク回避のために埼玉県サッカー協会に主管してもらうことが適切だと考えられる。愛知県サッカー協会としては収入はありがたいが、リスク回避が優先。
⑦, 1-65 から	2なぜ<機会>	AI: 会場が大事。通常のJ1レベルのスタジアムであれば、問題は起きなかった。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: グランパスの試合会場がないため、港サッカー場で天皇杯を主管することになった。会場がふさわしくない場合は、愛知県にある権利でも埼玉に行く可能性がある。最終的に港サッカー場で決定した。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 試合成立が一番の目標。収益よりも勝ち上がりチームを決めることが重要。達成できなかったことが心苦しい。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 港サッカー場は2回戦以外使用しない。3回戦でJ2、J3が勝ち上がるため、J1と県代表は使用する。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 愛知県サッカー協会は手を下ろしたかったが、グランパスさんは愛知県で開催したいと要望。しかし、協力するから愛知でやってくれという話を受けたが、ホーム&アウェイではないと伝え、最後まで手を下ろしたかったが、日本協会からの要請で進めた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズはトップのチームで、相手チームとの事前話し合いがなかったことに驚いた。向こうから連絡をいただいた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズには挑発がなかった。応援は肉声のみ、打楽器や拡声器は持ち込み不可と伝えた。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: レッズの運営から「あおりの声がうるさいのでバックミュージックをかけてほしい」と依頼された。
⑦, 1 から	2なぜ<機会>	AI: スポーツプレゼンテーションができなかった施設は問題。光や音楽で落ち着いた環境を作ることが重要。
⑧, 1 から	2なぜ<機会>	AI: サポーターが真剣な話をしていたが、静かなスタジアムでギョーギョー言っていたら聞こえてしまった。
⑨, 1-23 から	2なぜ<機会>	AI: クラブと打ち合わせをしていたが、職員は1人しか行かなかった。
⑨, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 豊田スタジアムの問題があったため、名古屋との試合でクラブ間のコミュニケーションが円滑でなかった。リーグとしての仕事として、事前のコミュニケーションを含めて派遣した。
⑨, 1 から	2なぜ<機会>	AI: 不適切な行動をやめさせるためには、文化や雰囲気を作り上げる必要がある。群集心理によって止められなくなることを防ぐために、普段から心理的なアプローチを行う必要がある。
⑨, 1 から	2なぜ<機会>	AI: プロの興行を年間20試合近く運営するクラブのセキュリティを含め、1-2回しかない試合のレベルやスタジアムのスペックを考えると、運営のレベルに大きな差がある。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのバラブリーズ
⑨.1 から	2なぜ<機会>	AI: 試合運営にはレベル差があり、リスクはあるが、適切な運営方法があったかもしれない。
⑨.1 から	2なぜ<機会>	AI: 警察が帰った後、油断があった。セキュリティレベルは低い。
⑨.1-59 から	2なぜ<機会>	AI: 警備員不足を認める発言。
⑨.1-97 から	2なぜ<機会>	AI: アルコールは要因の一つになり得る。販売をやめるかはバランスが必要。
⑨.1 から	2なぜ<機会>	AI: アルコール依存症は社会問題。スタジアムでの販売制限も難しい。ヨーロッパ文化では外で飲んでから来るため、飲酒抑制は問題。
⑨.1 から	2なぜ<機会>	AI: アルコールチェックは難しいが、観戦者にストレスなく楽しんでもらいたいという思いで受け入れている。そういう人が増えることが望ましい。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 主催者は安全性を追求する立場であり、運営には管理する発想が必要。盛り上げることは理解できるが、同じ目線で会話ができないと成り立たない。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋側は、天皇杯名古屋戦での横断幕問題について、スタジアムの使用歴からあそこは張ってはいけないと認識している。
⑩.1-38 から	2なぜ<機会>	AI: 電光掲示板下の横断幕は外していないということ。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: サッカー場で横断幕掲出場所を確認したが、試合当日禁止場所に入り揉めた。横断幕は外さず。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズサポーターが名古屋側を煽り、負けた場合はクラブの社長と強化部長を呼び出すと脅迫していた。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズは、埼玉県サッカー協会に埼玉での開催意向を提出し、豊田スタジアムが使用できないため、CSアセット港サッカー場以外に選択肢がないことを認識している。名古屋側が優先であるため、先に名古屋側に会場を探してもらっていた。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 埼玉で開催が良かったが、埼玉県サッカー協会は受諾しなかった。両者はイブーン。セキュリティを考慮した結果。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズと名古屋グランパスの試合会場が埼玉スタジアムから変更されなかった。浦和側は開催を希望したが、名古屋側は動かさなかった。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムがJ1クラブ同士の試合に不適格だった理由はスベックの問題。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: ピッチにサポーターが降りるスタジアムは他にもあるため、スベックが原因とは限らない。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: サポーターの危険行為は予知できる部分を消し込むことが必要。会話の量やクラブの構造も影響する。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋と豊田スタジアムでの対戦で、客席問題があり、サポーターが緩衝帯の横まで来たことがあった。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 名古屋戦で限度を超えたことがあり、クラブの強化担当が話をしている中でワーワー言った。通常とは異なる。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムの構造と警備体制が事故の原因。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: CSアセット港サッカー場での事故。ピッチに緩衝帯なし。名古屋サポーター側に行って行ってしまった。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズの競技運営担当や埼玉シズスの警備スタッフも止めに入ったが、人数が多すぎてクラブだけでは止められなかった。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: ピッチに降りやすかった。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 10代後半~20台前半の若手サポーターがゴール裏に増加。"Japanese Only"の事案の記憶が無い。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 若いサポーターが横断幕や旗を振ることを知らず、年長者が責任を持つべきだが、明文化されていない。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズは違反が多いが、他クラブの同様の事案は大きな騒動にはならない。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: メディア側の人間は話題性のある記事を書きたい。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズは注目度が高く、アクセス数も伸びやすい。他チームのサポーターからも標的にされることがある。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 浦和レッズは強くない。リーグ優勝は回しにかけていない。サポーターは多いが、アウェイゲームでの応援は嫌われる。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: 夜の学生多いスタジアムでの試合。アクセスは良好ではない。夏休み中。
⑩.1 から	2なぜ<機会>	AI: スタジアムでの開催が事態を悪化させた。柵を乗り越えられるハード面の問題もある。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 人々は目標と現状を比較し、ギャップを問題とするか否かに分かれる。例えば、ペットボルの蓋が開いていることについても、飲みやすいとする人とは異なる人がいる。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブとスタジアムの協力でできたが、乗り越える人がいたことは予想外。煽られることも想定していなかった。
②.1-37 から	3なぜ<正当化>	AI: 2008年のガンバ大阪戦での水風筒投げられる事件。レッズサポーター同士がファミリーとして考え、仲間を守るために止めに行くという行動が起こった。原因が変わる。
②.1-79 から	3なぜ<正当化>	AI: 責任者はリーダーであり、筆者がその責任を負うと述べている。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 予見力不足が原因。予見できれば防止できた。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: コールリーダーの役割はコミュニケーションやマネジメント。出禁は誤解。自己推薦は適切ではないが、さんも認識していた。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 大分スタジアムでの太鼓叩き違反を懲罰事例として再発防止に取り組んでいるが、スタジアム外であったためルール違反ではない。ルールは認識している。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 過去の先人たちは違反行為を含め、同じグループでやっているのは仕方ないというメッセージ。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 2019年、売られた喧嘩で小競り合いが起きる。浦和に関する前代未聞のニュースインパクトがあるが、以前にも起きていた。
②.1 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブの社長交代は経営判断や任期によるものであるが、フィロソフィーの引き継ぎについては過去の事例がない。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: フットボールは足を使うスポーツだが、1点入るまでストレスが続く。引き分けや負けは1週間ストレスになる。つまり、ストレスのスポーツ。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: ストレスがたまり、1点が入る瞬間に爆発するフットボールの魅力。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 遊び半分ルールを破り相手と対峙した経験があるが、今は嫌われる存在になってしまった。
③.1-87 から	3なぜ<正当化>	AI: メンバーが金網を持って我慢していたが、写真で撮られ威嚇行為となった。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: ルールを破らないことが基本原則。攻めることはない。
③.1-101 から	3なぜ<正当化>	AI: 名古屋での問題は話し合いで解決したと思っていたが、レッズのサポーターは仕方ないと考えている。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: ゴール裏の体制は整っている。駄目なものは駄目という姿勢を貫くことが必要。さんの意見もあるが、それに固執するわけではない。
③.1 から	3なぜ<正当化>	AI: ゴール裏の内情。チームが乱立し、アウトローを抑える。肩を組んで分かっている人とそうでない子が来る。
③.1-169 から	3なぜ<正当化>	AI: BIは、何故起こらないか分からないが、自分たちは馬鹿ではないと述べた。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: レッズとガンバのサポーターのトラブルは、風船を投げたことが原因。試合にも負けたことで、サポーターは不満を募らせ、小競り合いもあったが、接触はなかった。しかし、このような事件は避けられない。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: ジェフ戦で勝てず、レッズが壊れたベンチシートの弁償があった。器物損壊はやめるように言ったが、壊されたのは確か。一番悪いのはそこ。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 富山が逆転負けした試合で、コールリーダーの太鼓が警備員とも合いになってグラウンドに入った。試合で負けたことが多い。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: レッズが攻めることは珍しい。相手からの挑発に負け敗北することもある。
④.1-63 から	3なぜ<正当化>	AI: グランパスとのトラブルは相手の挑発行為。レッズの人たちは自分たちから仕掛けることはしないと断言。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: コールリーダーが相手GKの侮辱に怒り、謝罪させた。駒場改修時に大宮で兼用した際のエピソード。グラウンドには降りていない。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 清水とレッズのサポーターが断幕をめぐるトラブルに。レッズ側は自分たちのエリアに横断幕があることはありえないと主張。
④.1 から	3なぜ<正当化>	AI: レッズのサポーターは相手を馬鹿にするコールがなくても負けて悔しいが、子どもじみた行為ではないと思う。
④.1-149 から	3なぜ<正当化>	AI: プライドのベースはレッズへの愛。
⑥.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 勝つためには雰囲気が必要。試合に集中する必要がある。
⑥.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 注意が軽かったため、だめなことはやめるべきと強く言う必要がある。空気が悪かったため、このような事態が起こった可能性がある。
⑧.1-2 から	3なぜ<正当化>	AI: サポーターはファンクラブとは違い、リーグを成功させる同志として募集。お客様扱いせず、特典もなし。責任は取れないが、差別化を図った。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 群衆心理での行動は危険。熱くなって暴力的になるのは理解できるが、投げたり飛び降りたりはいけない。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: レッズのトラブルは試合に負けたときで、勝って気持ちいいときに起きるはずがない。勝ってトラブルは一度しかなかった。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: スポットでは負けを受け入れることが勝たれり前。あの試合の敗因は何だったのか、ミスジャッジ以外の要因があったのか疑問。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブをサポートすることは熱量が高く、素晴らしいが、守らない機会も多い。
⑧.1-11 から	3なぜ<正当化>	AI: Jリーグでレッズサポーターの懲罰事例が11件起きており、突出している。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブの対処法が他と比べて厳しさに欠けていた。啓発も重要だが、破った場合の対処も重要。
⑧.1-71 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブは優しい。
⑧.1-83 から	3なぜ<正当化>	AI: レッズは徹底されていない。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: サポーター同士のルール遵守文化があり、異物はすぐに見つかるが、レッズの場合はまだそうではない。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: サポーターとクラブのバトルは合っている。クラブはサポーターの行動をある程度認識している可能性がある。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: サポーターがピッチに降りたのは、バックスタンドを通過して反対側のゴール裏に行くことができる構造であるため。モラルの問題かもしれない。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: サポーターの質と指導力が重要。浦和レッズだけでなく、団体や人間の統制力も影響する。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: Y氏とM氏はクラブチームに在籍していたため、サポーターの距離感を理解している。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 浦和レッズのサポーター文化は時代が作っている。サポーターが優先された時代の名残がある。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: バスケではMCが盛り上げ、サッカーではサポーターが重要。クラブとサポーターが協力して熱狂的な空間を作る文化がある。
⑧.1-54 から	3なぜ<正当化>	AI: クラブが親であり、選手は第三者。サポーターは「見守る」が、同志は罰則をもっと厳しくすべきという意見もある。
⑧.1 から	3なぜ<正当化>	AI: メディア報道は「80人が暴動」としたが、実際には多くのサポーターが暴動を止めようとしていた。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのバラブレース
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 横断幕に手を出すという注意喚起をしていたが、名古屋サポーターが煽ったため、O氏が指差したことで追い返された。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 若いサポーターは「累積」という言葉に疑問を持っている。自分たちが行ったことでもなく、事実を知らないまま、コロナ禍の時期も含めて言われ続けてきたことに不満を感じている。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 若いサポーターがフラストレーションを抱えて突入した。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 名古屋戦事案は14回目、2019年～2022年に多く発生。コロナ禍も影響が。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 浦和レッズサポーターは「ブレイクゾーン」について、選手を後押しするならやるといふ風潮がある。特にゴール裏の中心のサポーターには。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: 処分されないことに不公平感を感じているサポーターがいる。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: コロナ禍での対面コミュニケーション困難。新規サポーターは「無名性、匿名性、無責任性」集団心理。浦和レッズサポーターの大規模集団で責任回避層出現。
⑫.1 から	3なぜ<正当化>	AI: グループ内のメンバーはリーダーに相談できるが、外部の人間をコントロールするのは難しい。
⑪.1 から	3なぜ<正当化> 41再発防止	AI: クラブのためになる行動をするべき。
⑪.1 から	41再発防止	AI: 勝てば挑発されず、ブーイングや厳しい声は構わないが、ラインは超えないようにしよう。
⑩.1 から	41再発防止	AI: チームとサポーターの力がどの程度及ぼせるかが重要。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターに情報を提供し、統制力を持って下の人間をコントロールすることが重要。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターに言われても怯まずに行き。拒絶反応はあるが、それでも行動する必要がある。
⑩.1 から	41再発防止	AI: クラブは組織の方向性を共有すべき。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターの盛り上げはクラブや対戦相手に迷惑をかけることがあるため、運営側は注意が必要。共有した上で運営することが望ましい。
⑩.1-78 から	41再発防止	AI: 浦和レッズサポーターに「根本的に変えてください」と要望。長年変わらず、変革必要。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 浦和レッズの勝負は、サポーターとのコミュニケーション能力にかかっている。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターが刑法に抵触しても、クラブとの関係が変わらない限り、状況は変わらない。
⑩.1 から	41再発防止	AI: クラブは罰金を受けたが、改善されていない。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターがサポーターの変化を促す必要がある。サポーター自身は変化できるが、クラブが変えることができる唯一の存在である。
⑩.1 から	41再発防止	AI: JFAとクラブが言っても聞かないが、義務はある。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターはスタジアムで団結する。クラブのコントロールは難しく、サミットの効果は限定的。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 「入店お断り」が必要。クラブのルールは曖昧にならないように。厳罰化。
⑩.1 から	41再発防止	AI: ルールを破らずに勝つことが大切。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 人数が多い相手をコントロールするのは難しい。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 現場(選手達)は結果を出し続け、次回が無いようにする。
⑩.1 から	41再発防止	AI: クラブ、選手、サポーターはリスペクトし合い、切磋琢磨して高みを目指す。足を引っ張らず、欠けてはいけない存在として互いに支え合う。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 日本人だけの差別問題以降、大人たちはLINEグループで問題を共有し、サポーターがすぐに止めるシステムを作った。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 集団規範は必要。各グループのメンバーが配下に伝え、全体のリーダーがサポーターに方針を伝えることが重要。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 浦和レッズサポーターは集団規範を明文化することも大事だが、文化として浸透させたい。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポーターの自主管理・内部監視が重要。問題が発生した場合、小さく摘むことが目的。大人達が仲裁や制止を行ってきたが、自主的に問題を解決できるサポーターが増えることが現実的である。スタジアム作りも重要。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 「Japanese Only」事案以降、浦和レッズの存続を訴え、大きな事案を抑制した。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 声が届かない人にはグループに入れて問題行動を止める。
⑩.1 から	41再発防止	AI: コロナ禍で中心グループとの接点が希薄な環境。コミュニケーションを積極的に行い、問題行動を防ぐために枠を広げたい。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 若手サポーターも浦和レッズを応援している。サポーターはクラブのためになる話をするのが大切。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 浦和レッズが消滅するとS氏が困るので、サポーターは自主防衛を行なっている。
⑩.1 から	41再発防止	AI: グループ内サポーターは継承や教育を受けるが、外部サポーターの教育が課題。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 年間60試合応援に行くサポーターは、ゴール裏でも200～300人しかいない。グループに所属していないのは40～50人程度。でも、毎回顔を合わせるうちに挨拶をしてくれるようになる。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 浦和レッズのビジュアルサポーターで枠外の入場者にも協力し、パイプ役を務めることで問題を起こさない空気を醸成することがサポーターの役割。
⑩.1 から	41再発防止	AI: クラブとの連携が課題。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 「ウルトラS」はクラブ愛や行動力等で「ネジが飛んでいる人達」ばかりで、周辺の人々とは温度感が合わないため、大規模な集団化は困難。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 厳罰化だけでは抑止力にならず、疑問が残る。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 20カ国のスタジアムに行き、騎馬警察官やマシンガンを持った警察官も見たが、女性や子供は行きたくない。
⑩.1 から	41再発防止	AI: イングランドのスタジアムは身元が特定されたフリーガンは入場できない。富裕層しか入場できず、昔からのサポーターや低収入層はバブで試合を観戦している。
⑩.1 から	41再発防止	AI: サポート文化を消さず、競技運営に厳罰を課さずに運営できるように、クラブの運営担当や大人、新規参加者を含めて再考すべき。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 問題を発生させないのは難しい。問題が起きにくいスタジアムを作ることが大事。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 日本で安全なフットボール環境を提供するために、サポーターとクラブが協力する必要がある。
⑩.1 から	41再発防止	AI: 浦和レッズは新しいフットボール文化を創出し、抑止力となる方向でクラブと話し合いたいと考えている。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 感情は抑えられないが、行動は抑えられる。対策や新しい仕組みを構築している。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 2014年以降、サポーターは毎試合ミーティングを行い、今回の事件をきっかけにより具体的な話し合いが増えた。次の試合での問題に備えるために注意点を共有している。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 次の試合の注意点や守備の重要性について指導がある。守れない者は辞めるように言われている。
⑩.1 から	4再発防止	AI: コールリーダーに試合前に起こることを共有し、予見できないこともある。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 相手をリスペクトすることは美しいが、ルールは守らなければならない。
⑩.1 から	4再発防止	AI: クラブの危機感には全員に浸透。スタッフから高校生まで、リーダーが口酸っぱく言い続け、次の問題に備える。
⑩.1 から	4再発防止	AI: サポーターの暴動は管理できないが、リスクヘッジや対策はある。天皇杯の出場権剥奪で危機感を持つ。400～500人のメンバーが関与することが多い。
⑩.1-195 から	4再発防止	AI: 処分が抑止力になる。差別的横断幕の無観客試合での厳しい処分は問題にならなかったが、SNSで広がると裏側の話は出てこない。暴行はストレスから。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 各チームに入ることで管理できる。コールリーダーが指示を出し、問題を起こさないように毎週言っている。
⑩.1 から	4再発防止	AI: サポーターとの強い関係が最優先の対応策。
⑩.1-277 から	4再発防止	AI: 教育について話している。スタジアムでも話している。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 横断幕の申請制が差別的横断幕事件以降導入され、今でも機能している。出す前にチェックが入り、改善策を持っている。
⑩.1-286 から	4再発防止	AI: 風紀委員長が嫌われてもやるという真当でない人物がいる。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 自己申告した人が、風紀委員会やクラブスタッフに加わり、嫌われる覚悟で問題を解決する。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 毎週共有することで忘れないようにしている。以前は数年後に同じことが起きていたが、今は改善された。人間は時間が経つと忘れる生き物だと思う。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 意識変化を忘れず、周知し、クラブの人を裏切らないことが大切。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 社長や同僚に迷惑をかけたことを反省し、裏切れないと思う。感情が一番強い人間であるため、つなぐのを大切に。自分は昔からお世話になっている。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 再発防止のためには、1人やサポーターだけでは解決できず、事前に対策を話し合い、未然防止をする必要がある。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 2014年に差別行為があったが、以降は徹底した再発防止策で対応。サポーターとクラブが協力し、実績を残している。表面には出てこないが、同じことを繰り返さない取り組みをしている。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 負けた場合、スタジアム外や後日の試合で、速やかに帰らせることでおられることを防ぐ。これらを考慮していれば、批判を受けることはなかった。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 2021年、声出して2000万円の罰金を受けたが、外部要因によるもので、最初は状況が不明瞭だった。
⑩.1 から	4再発防止	AI: 公平性、納得性、公正性は必要だが、感情で動く人間は意味のないルールでも守る。ファミリーの姿勢を見て守る。
⑩.1 から	4再発防止	AI: クラブの意思決定は経営陣が行う。コミュニケーションを大切にしよう。
⑩.1-208 から	4再発防止	AI: レッズサポーターにはフィロソフィーが伝えられている。新人が入ってくるため、常に更新が必要。クラブスタッフが口酸っぱく言うが、新人が入ってきたらやらなければならない。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのサブトピック
②, 1-210 から	4再発防止	AI: 新規の子がゴール裏に来ている。教育ができていないため、問題が起きている。
②, 1-221 から	4再発防止	AI: 試合前に再発防止策を実施 。クラブとコミュニケーションを取り、注意事項や起こりそうなことをアジェンダにして防止している。自浄作用で結果を出している。
②, 1 から	4再発防止	AI: サポーターが言った「1回やけどしたやつが同じやけどをしますか?」。20人いたが、 累犯者は1人もいない 。
②, 1 から	4再発防止	AI: 物を投げることが問題視され、選手に対する裏切り行為として広がら、投げ込みはなくなった。再発防止は結構できている。
②, 1 から	4再発防止	AI: 再発防止ではなく 未然防止がコンセプト 。予見の範囲を広げることが重要。
②, 1 から	4再発防止	AI: クラブの頻度増加は内部でも喧嘩が起きるほど進行中。オフィシャル化して継続的に行う。
②, 1 から	4再発防止	AI: クラブの方々と運営の方々は、話があるときは対面で行うことを提案 している。オンラインはコロナの取束よりも早くやめている。温度感が伝わらないため。
②, 1 から	4再発防止	AI: クラブの管理は必要ない 。自発性が大切で、知らない人たちを管理する必要はない。
②, 1 から	4再発防止	AI: 信頼関係を築くためには、コミュニケーションの接点を増やすことが必要 。同じ目的に向かって話し合うためには、最初の接点を持たせる機会をたくさんつくるのが重要。
③, 1 から	4再発防止	AI: 公園での発煙筒使用禁止により、道路で使用したが、道路交通法違反になり、以降はやめた。規制強化で更にやらなくなった。
③, 1 から	4再発防止	AI: チームは全員止めに行くよう教育され、 出禁を出すことで厳しく対処 している。痛い目に遭った経験からの対策。
③, 1 から	4再発防止	AI: クラブからの出禁は連帯責任で、見分も巻き込まれることがある 。JAPANESE ONLYの時には全てのチームが解散した。
③, 1-115 から	4再発防止	AI: 監視カメラやSNSは抑止力になると思 っている。
③, 1 から	4再発防止	AI: JFAが介入したのは初めてだと思いますが、ヨーロッパでの警察官の不作為を撮影したビデオが問題になり、カメラが重要であることを知らしめた。今後同様の問題は起こらないと考えている。
③, 1 から	4再発防止	AI: 痛い目に遭った人は、やけどしたら触らない 。
③, 1 から	4再発防止	AI: 新しい組織体系の模索中。期待してほしい。
③, 1 から	4再発防止	AI: 選手が試合後にスタジアムを一周することは誤解されている。それゆえ、反対する。
③, 1 から	4再発防止	AI: レッズに問題があるが、徐々に変えていく。名古屋の問題は二度と起こらないと誓う。
④, 1 から	4再発防止	AI: クラブの警備員は、顔見知りの人たちとの関係作りが必要 。人間同士のつながりが、単純な警備員の役割を超えた変化をもたらす可能性がある。
④, 1-85 から	4再発防止	AI: 警備員との信頼関係はトラブルを避けるために重要 。
④, 1 から	4再発防止	AI: クラブの人たちとの人間関係作りが大切 。警備員ではなく、クラブスタッフとチームを作り、応援する姿勢が必要。
④, 1 から	4再発防止	AI: ラジビーのノーサイド精神を知るべき 。ノーサイドで熱くなくてもいい。
④, 1 から	4再発防止	AI: コールリーダーは勝敗に関わらず、次に向けての声を発することが大切。雰囲気づくりに貢献し、チームの継続につながる。
④, 1 から	4再発防止	AI: クラブスタッフ、選手、お客さんが同じ考えで勝つためには、三者が同等の立場で持ち場ごとに協力することが必要。
④, 1 から	4再発防止	AI: 相手をリスペクトし、勝敗にこだわらず選手と共に喜びを分かち合うことが大切 。負けたからといって否定的な言葉を言うことは避け、次に繋がる教育を行うべき。
④, 1-165 から	4再発防止	AI: 審判は人間で間違いもある。リスペクトを持って接するべき。現代サッカーは人間の能力を超える速さ。見えなかったと言うのは審判以外のこと。人間だから間違いはある。
④, 1 から	4再発防止	AI: 周りをリスペクトし、プラスの場所を見て自分の立場でできることを知ることが大切 。警備のハード面は任せるが、人間としての価値観や考え方を共有する必要がある。
④, 1-167 から	4再発防止	AI: スポーツは勝敗よりも健闘を称える文化である。指導者は次に向かうことが大切であり、喧嘩するためにやっているわけではない。 スポーツ文化を根付かせる必要がある 。駄目なものは駄目と言う考え方が必要。
⑤, 1 から	4再発防止	AI: 暴力、暴言、駄目な場所でのタバコはNG。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: 防ぎようはあった。大きくなる前に何とかができたとする。もう少しできることはあったと正直思う。
⑥, 1-106 から	4再発防止	AI: サポーターへの処分が抑止力になるかは不明だが、 厳しい処分が必要 と考える。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: サポーターが普段と違う動きをしている場合、早めに声をかけて状況を共有し、対策を取ることができる。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: 喫煙所で吸ってほしいと声をかけよう。マナーは細かいところから。 厳しくやっていくことで雰囲気づくり を。再発防止にはならないが、広く世間に知らしめよう。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: 埼玉スタジアムでの警備体制。来場者数により、埼玉シズミの警備スタッフの総勢は今日は555人。
⑥, 1-152 から	4再発防止	AI: 制服141人、係員414人 。
⑥, 1-156 から	4再発防止	AI: 再発防止のためには、 コアなサポーターだけでなく、来場者とのコミュニケーションが重要 。スタンドでの警備では表面的なことしか分からないため、意見を聞くことが必要。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: 警備スタッフにも注意喚起を行い、細かいことでも対応したい。 警備員の不注意が大きなトラブルにつながる 可能性があるため。
⑥, 1 から	4再発防止	AI: 火事を防ぐために、芽を摘むことが大事 。クラブスタッフと協力して対応することも必要。
⑦, 1 から	4再発防止	AI: 豊田スタジアムでの警備は広い施設で限界があるため、日本代表試合も含めた警備会社に協力を依頼した。
⑦, 1 から	4再発防止	AI: 港サッカー場の3回戦以降に立候補しない 。
⑦, 1 から	4再発防止	AI: 天皇杯の大会会場のあり方を見直す提言 。JFAも施設選定に含まれる。
⑧, 1 から	4再発防止	AI: クラブはサポーターと一緒に日本のサッカーを成功させる同志 。サポーターは代替わりしていくが、クラブは高校教師のよう。サポーターに意識を持たせ、成功に必要な存在であることを伝える。
⑧, 1 から	4再発防止	AI: セキュリティカメラの導入により、選手やサポーターが悪いことをしてもすぐにはバレる環境をつくるのが大事 。
⑨, 1-49 から	4再発防止	AI: セキュリティの標準化には課題がある。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: 「やるべきこととやらないべきことを教える必要がある」というメッセージ。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: JAPANESE ONLYやサッカー試合での差別事件は過去にも起きており、完全に防ぐことは難しい。しかし、 啓発が必要 である。
⑨, 1-73 から	4再発防止	AI: リーグのクラブがサポーターとの関係を勉強会 で話し合っていることがある。毎月ではないが行われている。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: レッズの理念に基づいて、選手とお客さんに求めることを再確認する必要がある。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: 現場を守り、 支え、トップが必要なら出ていく姿勢を持ち、ブレない方針を実行することが重要 。
⑨, 1-81 から	4再発防止	AI: 他クラブはルールに基づいてやっていると思う。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: クラブとサポーターの理解が大事 。徹底するためにはサポーターの協力が必要。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: レッズはサポーターの応援を大事にしてきたが、一部の人の行き過ぎた要求や行為により文化を再構築する必要があると考えている。
⑨, 1-103 から	4再発防止	AI: ラジビーや甲府のクラブはアウェイのサポーターをおもてなし、仲良くする 。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: セキュリティにお金をかける余裕がないクラブが普及し、代わりに安心・安全なスタジアムを考えた 。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: アウェイのサポーターにもおもてなしをすることで、変なことをする必要がないというメッセージを伝える。甲府への来訪者に対して、 クラブのものを配ったり、お出迎えしたりする 。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: セキュリティ対策として、ルールを守る気持ちを促し、おもてなしは未然に防止する策の一つ 。お客様を迎え入れるかどうかは重要なポイント。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: 鹿島サポーターは警備が厳重で、お互いに暴力を避ける空気感がある。サポーターにも協力を呼びかけている。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: クラブのフィロソフィーに基づいてスタジアムをつくるのが重要。リーグの意見は無視される。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: 安心・安全な環境を作り、新規客を取り込むことがビジネスの継続に必要 。
⑨, 1 から	4再発防止	AI: レッズが日本サッカーをリードする存在であり、彼らが成功すれば日本サッカーも成功すると期待されている。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 自分たちは挑発しない 。昔はしていたかもしれないが、スタンスではない。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 2014年の差別的横断幕事件以降、組織は挑発しない方針が変わった。人数が多く、弱いものに対しては行動しない。ただ、売られたことには関与している。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 横浜での問題について、自分たちは行かないが、男として煽られているのを黙って見つめることはできない。
⑩, 1-77 から	5レッズサポーター	AI: 名古屋のサポーターが2年連続で相手チームのエリアに乗り込むが、問題になっていない。レッズサポーターは黙っていなければならないと思う。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 豊田スタジアムで20人乗場。去年我慢したが、 リーダーと「早く帰せ」と話した 。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 浦和レッズに惚れ込んだ理由は男らしくかっこよさ 。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 浦和のゴール裏のかっこよさをつくってきた先人たちがいて、その文化に憧れ、かっこいいと思っている 。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 非日常体験できる、地元とは違う仲間と共に突っ走る男らしさがかっこいい。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 試合前、LINEでやり取り 。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: 60~70人のグループ。仲間意識とリーダーへの忠誠心が強く、裏切りはない。コールリーダーが各リーダーに指示し、リーダーがメンバーに伝える。リーダーは裏切らず、コールリーダーも裏切れない。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: コールリーダーが厳しくなった。クラブとの連携が強化された。
⑩, 1 から	5レッズサポーター	AI: コールリーダーとクラブスタッフのつながりを強化し、信頼関係を築き、しっかりとした仕組みを構築している 。
⑩, 1-175 から	5レッズサポーター	AI: クラブのリーダーは忠誠心が強く、一番上に逆らわないが、優し過ぎるとは感じない 。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのサブトピック
①, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズのサポーター組織はアンダーグラウンド感を大事にし、SNSでの活動はせず、フォロワー数を目的としていない。他のチームとは異なる姿勢を貫いている。
①, 1 から	5レズサポーター	AI: リーダーとしての責任を感じ、自分の責任だと言っている。かっこいいと思う。
①, 1 から	5レズサポーター	AI: コールリーダーの継承や上下関係は昭和っぽいけど、忠誠心ではなくもしっかりしている。
②, 1 から	5レズサポーター	AI: サポーターになってから、メインスタンドやバックスタンドからゴール裏に行くことは分岐点。
②, 1 から	5レズサポーター	AI: 応援に触発され、自分も主役になりたいと思い、試合に勝利した体験をしたいという当事者意識がある。
②, 1-27 から	5レズサポーター	AI: ゴール裏はレズファンにとって憧れの場所。多くの人がそう考える。答えた者も同意し、憧れと形容した。
②, 1-144 から	5レズサポーター	AI: 選手を呼び出さず、人格否定もしない。選手にも同意。
②, 1-324 から	5レズサポーター	AI: ゴール裏の人たちは一体か?違う。ひとつになることは難しい。
②, 1 から	5レズサポーター	AI: コミュニティに属したい、居場所がない、やることがないという理由で来ている人がいるが、それを口に出すことはない。
②, 1 から	5レズサポーター	AI: スポーツは勝敗よりも選手との共闘体験が重要。この経験を求める人が多く、他のクラブと比べて熱量が高い。体験を求める人が多い。
②, 1 から	5レズサポーター	AI: レズサポーターがプライドを持っているが、世間から攻撃されると生きがいを否定された感じになり、暗くなる。何千人も同じ思いをすると辛い。選手やクラブを傷つせず、一心で支える。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: マスコミによる誤解が多いので、我々の立場を伝えたい。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズは1993年から存在し、ゴール裏は小さな組織から始まった。自分は1998年または1999年から関わった。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズは弱かったが、ある人間が逆転を目指し始めた。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 「国立をいっばいにするクラブを作りたい」という思いで、人工的に5万人を集めていると考えられる。ゴール裏がその始まり。
③, 1-19 から	5レズサポーター	AI: 最初の規模は50人程度だったと言われている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: ヴェルディは男のスポーツとしてのサッカーにやんちゃな人間を集めたチーム。
③, 1 から	5レズサポーター	AI:アウトロー的な世界を作り、嫌われることで男の世界を演出し、強い人間たちが力を発揮することで、浦和レッズに向けたパワーを教育した。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 昔はアウェイでゴミ箱を飛越すことがあったが、今はやっていない。今やると出禁になるので、当然だが、そんなことをやりなからきた。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 「ウルトラS」は存在として、お客さんを呼ぶのが仕事だと考える。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: クラブ活動には情熱が必要。ヨーロッパ的な常識である「情熱に集まる」という考えを体現し、クラブを作り上げることを目指す。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: クラブは強いチームを作ることが仕事。お客さんを呼ぶのは僕らの役割。お金がないので、そこから始まる。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 呼び出しや文句は誤解。捉えられる姿が全てではない。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: やんちゃをすることがパワーにつながるという見せ方で、ブルーカラーの人々が集まり、今の形になった。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 2つのグループで、幕に書かれている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和にはフットボールの文化があり、高校サッカーが強かった。これがレッズの流れを作っている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズはJリーグ参入時に弱かったが、負けてもプライド高い街のチームは世界に行く準備を考えていた。特殊なクラブとして知られる。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: サッカーのまちの土壌があって、レッズが来て、レッズは弱い。でも、チームが弱くても、我々は負けないぞということがあって。そのために何をするか、人を集める。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: J2からJ1に上がる方法や世界をどう見るかを考える思想。世界標準を念頭に置く。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: フットボールは浦和の共通語。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 日本のサッカーは教育の上で成り立っており、クラブ活動や授業、同好会、大学、そしてプロになることが目的。師範学校の話もあるが、サッカーは日本独自の文化である。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズは、地元のクラブを世界で馬鹿にされないクラブにすることを目的とし、教育の中でのサッカーにはアンチであり、強くなることを重視している。ヨーロッパのクラブのあり方を考える取組役がいる。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: フットボールのカルチャーと共にやっている。応援団という言葉を使われるのは大嫌い。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: サッカー文化の中の学校の応援団。好きでやっている。ファンと言われる方がうれしい。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 「ウルトラS」という言葉が印象的。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 「人を集めるには中心を作り、太鼓をやり、広げるのが見栄えがいい」という理由で、イタリアのようにやっているだけ。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 人を集めるために強い人間を集める方法を模索し、全力で取り組んでいる。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 男性は鼻たれ小僧が成長するとかっちょよくなると思う。祭りでも同様。成長は重要。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 女性の成長が期待されるが、今のリーダーに追いつけない。いつかクロスする日が来る。
③, 1-52 から	5レズサポーター	AI: 女性参加者は増加傾向にあるが、正確な割合は不明。
③, 1-56 から	5レズサポーター	AI: コアサポーターに女性は数人で、1割以下。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 2000人が右向き、1万人のゴール裏に女性数人。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: クラブは強くなり、誤解されていると言われるが、話し合いと役割分担をしているため、なあなあではない。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: クラブはやんちゃな人間を集め、政治的な要素も含まれる。フットボールではくれ者たちを集めている。ヨーロッパでも同様。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 暴れない人間にレッズへの情熱を持たせ、パワーで人を惹きつけ、楽しくやっている。彼らは「ムラ」的存在。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 先人と自分の育成により、レッズを世界に広めるための根本的なアプローチが熱量を保っている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 中心のサポーターグループはしっかりやっている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズのサポーターは学校で不良扱いされ、PTAに許されない存在となっている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 他のチームのサポーターは、悪影響を与える人間はやめてほしいと思っている。どのチームも嫌われている存在。昔で言うと腐ったみかん。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和の存在を新たに見せつけながら、浦和らしきを守りながら海外に力を示すことが重要。無駄なことばやめる。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 応援団ではなく、クラブと共にお客さんを呼び、サポーターとして応援するだけでなく、スチュワードやサクラソウの植え付けなども行っている。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: ウルトラSと一般人の温度差についてよく言われる。
③, 1-146 から	5レズサポーター	AI: 「ハードコア」という言葉が好きで、自分たちはハードコアだということ認めるAの会話。
③, 1 から	5レズサポーター	AI: 選手を呼び出したことはない。阿部勇樹が来たことはあるが、やりたくない。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: コールリーダーが世代交代しながら集団を形成。個人や仲間同士もグループを作り、親しい仲間応援する。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和のゴール裏の歴史は、コールリーダーがチャントを作って練習し、広まっていくことで形成された。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: ゴール裏には熱狂的な人たちが集まり、ビジュアルサポートなども自分たちで考えている。クラブの許可も得て、いろいろなことをやっている。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: レッズに熱狂的な思いを持つ人が多く、生活の一部になっている。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: あの人の情熱はすごい。文化に対する無知な人には批判もあったが、応援したいという雰囲気がある。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: 初めて来た人は戸惑うが、顔見知りがいなくても応援に参加できる。みんな一緒にやりましょう。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: レッズのサポーターは何もしない。2008年の試合で、警察のバスやバイクが来た事象があったが、スチュワードとして南のゴール裏にいたため、何が起ったか知らなかった。報道によると、レッズのサポーターが取り囲んだとされた。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: 阿部勇樹さんがスタンドに向かって「俺たちも闘うから一緒にやってくれ」と呼びかけ、ゴール裏も変わった。応援は熱くなるが、暴力を振るうために集まることはない。レッズを愛するファンたちの姿勢。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: レッズを勝たせるために集まるコールリーダーと集団。暴力目的ではなく、協力している。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: チームを応援するために来ている人以外はいない。異空間ではないが、普段の生活にないことをしたいと思う人があそこに行く。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: 勝ち負け引き分けしかない。一喜一憂しても相手におつづけるのはスポーツマンシップに反する。応援はチーム・選手に向けよう。
④, 1 から	5レズサポーター	AI: サッカーについての知識と浦和チームへの誇りを持つが、暴力は駄目。「PRIDE OF URAWA」と「We are REDS!」は自然にできる人たち。
⑤, 1-17 から	5レズサポーター	AI: レッズの選手はかっこいい。勉強にもなる。
⑤, 1-21 から	5レズサポーター	AI: レッズの応援は素晴らしく、選手たちも気分が良くなる。応援を聞いていて良いと思う。
⑤, 1-31 から	5レズサポーター	AI: サポーターの熱狂的な応援に感動する。
⑤, 1-105 から	5レズサポーター	AI: サポーターは騒がず、選手に迷惑をかけないようにすることが大切。
⑤, 1 から	5レズサポーター	AI: 観戦は楽しく、勝利や高得点に喜びを感じる。
⑤, 1-127 から	5レズサポーター	AI: サポーターの理想像はレッズのようなが、問題を起こすのは避けたい。
⑥, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズが一番熱狂的なチーム。他のチームも見ているが、仕事柄大宮アルディージャなども含めて。
⑥, 1 から	5レズサポーター	AI: 人と話すとき、顔つきや表情から気合が入っていると感じる。熱のこもり具合が違う。
⑥, 1 から	5レズサポーター	AI: 浦和レッズのサポーターは多様であり、家族連れや老若男女が含まれるため、彼らも大切に扱いたいという思いがある。
⑥, 1 から	5レズサポーター	AI: レッズのサポーターは熱狂的で、試合を観るよりも選手に応援を届けることが強い。そういったところはすごいと思う。
⑥, 1 から	5レズサポーター	AI: 若者が浦和レッズのサポーターに憧れるが、誤った方向に行く子もいる。だめなことはやめさせる必要がある。
⑦, 1 から	5レズサポーター	AI: サッカー試合中の差別行為について、主催者側は謝罪し、楽しむために来たサポーターに申し訳ないと思っている。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのバラブレース
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: リーグ創設時、圧力団体ににならないようにチケット配布や特典は行わず、複数のサポーターグループを作り、一体となって応援する方法を採用した。30年前の話。
⑧, 1.4 から	5 レッズサポーター	AI: グループが分かれたのは意図的で、一つにすると危険だから。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: イタリアのサポーターズクラブは、ユベントスやACミランなどが特にその形を取っている。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 試合のときは一つにまとまるため、コールリーダーがいることもあるが、90年代にはサポーターズクラブからボランティアとして警備に当たることもあった。
⑧, 1.8 から	5 レッズサポーター	AI: スチュワード制度は他のクラブにもあるのかとの質問に対し、「ボランティア」と回答された。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和のサッカー熱量は驚くべき。レッズサポーターに感銘。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: サッカーに対するプライドが強い。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和はサッカーへの思い入れが強い。コンサートでの応援とは異なる。
⑧, 1 から	5 レッズサポーター	AI: サポーターが勝てないチームでも世界を目指せと歌い続け、サッカーに深い思いを持っている。
⑨, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和はサポーターを大切に、お客さんに応援してもらう文化をつくった。
⑨, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 過去の経緯があり、良い部分と悪い部分が出ている。守れなくなったらどうするかが問われている。
⑨, 1 から	5 レッズサポーター	AI: サッカー観戦は選手に声援を送るためであり、試合を見るのが目的ではない。選手ファーストの考え方が主流である。
⑩, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和レッズはアウェイゲームでもホームゲームの雰囲気を作り出すチーム。他にはない。
⑩, 1.27 から	5 レッズサポーター	AI: マルセイユは制御不能で、サポーターによる襲撃も多かった。
⑩, 1 から	5 レッズサポーター	AI: マルセイユのレベルは高いが、レアル・マドリッドやFCバルセロナはプレッシャーが凄い。精神的に追い込まれた時期もあるが、そういう中でプレーする選手達は凄い。
⑩, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和レッズがビッグクラブであることの証し。他クラブではあり得ない問題。良いことは尊重し、悪いことは悪い。
⑩, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和レッズを応援していたが、消滅や勝ち点剥奪の危機感があった。
⑩, 1 から	5 レッズサポーター	AI: 浦和レッズは「サッカーの街のクラブ」として、Jリーグ発足当初の弱い時期に先代達が応援して強くしようとした。
①, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブの役割は更生。失敗した人にアドバイスし、面倒を見る。処分して終わりではなく、定期的な話を聞く。人生をかけて海外に行く若者もいる。反省して戻れるなら戻れる。反省しないならごめんさい。
②, 1.138 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブの対応は完璧だということ。
②, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 生え抜きが多い人事部門には、役員や経営陣の意思決定が必要。生え抜きでフィロソフィーを理解している人材を排出する必要がある。これは組織論の話。
⑦, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 警備体制は通常の3倍、人数は3倍近い配置。警察が過去にない形に対応。
⑦, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: J1同士の試合に向け、消防や警察との打ち合わせで対策を練り、最善を尽くした。
⑨, 1.15 から	6 クラブマネジメント	AI: リーグ規約でクラブに責任を求めている。クラブには責任があると回答。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: リーグはクラブに主管を委ねており、コントロールは主管が行う。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: アウェイクラブも責任が問われることがあり、協力が必要。規約の51条は変遷し、ホームクラブだけでコントロールできない状況を踏まえ、アウェイクラブの責任も入ってきた。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 豊田スタジアムでのグランパス対レッズの試合前に、トラブルが起こる可能性があったため、職員を派遣した。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 一緒にやっていこうと言ったが、裏切られた。レッズとJリーグで改善しようと提案したが、レッズは自分たちでやると言い、任せることになった。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブが悪いことを見つけたとすぐに入場禁止にするスピード感が他のクラブとは違う。社長が変わり、現場の対応も変わってきた。厳しい処分をするスピード感もよくなってきた。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブがサポーターに研修会を行ったことはないが、方針を打ち出し、姿勢を示すことで変える必要がある。流れの蓄積があるため、大変だが、しっかりとやっていく姿勢を見せ続ける必要がある。
⑨, 1.111 から	6 クラブマネジメント	AI: トラブルが起きると新規客が入りづらく、リーグの価値が下がる。他のクラブにとって迷惑。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: スタジアムの方向性を共有し、実現するために協力する時期。お客さんと応援についても考慮するが、スタジアムの方向性を明確にすることが重要。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: レッズは93年に満員スタジアムで熱狂的な応援を生み出し、良い面が多い。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: スタジアムは選手とお客さんを後押しする場所だが、浦和レッズのサッカーを観たい人や家族も受け入れるスタジアムを作るべき。アウェイのお客様にも歓迎する姿勢を示すべき。
⑨, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: サッカースタジアムは普通の場所と同じで、普段やってはいけないことはやってはいけない。理解を求める。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: ホームスタジアムではない場所でも多数のクラブスタッフを動員しているが、問題が発生した。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: レッズは答める側だが、サポーターの言い分をサポートし、止めに入るべきであるにもかかわらず逆のことをしている印象がある。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: サポーターが「話を本題に戻してほしい」と要望すると、クラブ側も同意することがあった。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブが支援し、発煙筒を使ってバナナを引き上げた。リハーサルも行い、準備は完璧だと言われた。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブはサポーターのやることを実現させたいと考えている。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 国立競技場でのサポーターの侵入やバナナ掲示に対し、浦和レッズのクラブスタッフは制止できず。前回も手摺りのない踊り場での侵入があった。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 抑止力が無いか、他に何らかの力が働いているか分からない。制止できない。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 「甘い」という表現は適切か、疑問。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 浦和レッズのアプローチ能力についての疑問。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: サポーターの更生は大切だが、違反した者には指導が必要。クラブとして対応することが重要で、放置は許されない。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブの対応が甘いため、こうした厳格な指導が抑止力になるかは分からないが、逃げられる余地を作ってしまう可能性がある。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 浦和レッズのファンが、チームバスに発煙筒を振りかざす行為は常軌を逸しており、応援とはいえない。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 浦和レッズの方針によるが、「突っ込んでいい」と思う。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブと選手のために頑張っていたが、人数不足でコントロールが難しかった。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 選手はクラブが守り過ぎていると感じている。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 子供と親の関係のように見える。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブはサポーターに優しい。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 中心メンバーは密接な付き合いで「なあなあ」になっている。年間60試合全てに応援に行く者が多く、週に2~3回顔を合わせる。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: S氏は「ダメなことはダメ」と言い、名古屋戦での太鼓禁止は共有済み。太鼓なしでも応援できるコミュニケーションはとれている。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 浦和レッズのファンであり、仲間として対等にクラブを作り上げるために応援やボランティア活動を行い、年間70~80日クラブ関係者と会話し、クラブスタッフとも冗談を言い合える関係にある。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブスタッフは変わるが、サポーターは変わらない。それによって、良い面と悪い面がある。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブ運営は「親しき中にも礼儀あり」の精神で、お互いの立場を尊重して行う。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: S氏とN氏は、親子に近い関係性を築けている人と、今回の処分対象者を特定する中で、誰かを見つけた。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: 密なコミュニケーションで「親子の様な」関係性を構築。身元不明のサポーター多数でクラブとの関係性が上手くいかず。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブでの経験から、親子のような関係になったと思う。
⑩, 1 から	6 クラブマネジメント	AI: クラブがいつもお金を払う理由は、サポーターがそれを許容しているから。しかし、リスペクトを示すためにも、ケジメをつける必要がある。有耶無耶にせず、答えを見つけてべき。
①, 1 から	7 処分印象	AI: レッズに人生を捧げ、仕事も個人でやって生活の全てをレッズにシフトしていたが、土日はいつもスタジアムに行くことがルーティン。それが一気になくなり、虚無感がすごかった。
②, 1 から	7 処分印象	AI: レッズサポーターが暴徒化したことは認めるが、それはあくまでも個人の行為であり、クラブ全体が責められるべきではない。Jリーグも同様に、個人の責任として処理すべきだ。
②, 1 から	7 処分印象	AI: 評価は主観的。リクエスト通りに全てやってくれ、交渉にも応じた。意味のないルールは理解できない。
②, 1 から	7 処分印象	AI: JFA、天皇杯実行委員長、Jリーグの運営者は処罰についてコメントを避けた。クラブに管理責任を問うが、何をすべきだったのか解決策はない。
②, 1 から	7 処分印象	AI: 組織のトップが処罰ルマを出すルールが変わり、無期限処分になることもある。暴行を働いていない人も無期限処分になることがある。
②, 1.164 から	7 処分印象	AI: 天皇杯出場資格剥奪により、選手には謝罪したいと思っている。
②, 1 から	7 処分印象	AI: 人間は感情でロジックをつくり、結論ありきで話をする。論理性はない。
②, 1.174 から	7 処分印象	AI: 天皇杯参加資格剥奪に驚き。横浜F・マリノスのサポーターも同様のことをしていたが、リーダー格に8試合の出入り禁止処分、その他は厳重注意。罰金は100万円程度。
②, 1 から	7 処分印象	AI: JFAは正義に立っておらず、暴力行為を断絶する意志がない。声明を出しても実行しておらず、罰を与えていない。
②, 1.287 から	7 処分印象	AI: レッズサポーターの暴力行為について、TさんとSさんに厳しい処分が出たことを謝罪。選手にも申し訳ない土下座したいと述べた。
④, 1 から	7 処分印象	AI: サッカー選手は努力しているのに、何もしていない選手が活躍の場を奪うのは残念。

実施者	コード	ヒアリング・セグメントのサブタイトル
④	1 から	7処分印象 AI: 天皇杯に出られない決断をした日本サッカー協会は大変だったが、選手は何もしていない。Jリーグよりも長い歴史のある大会に対する支配を得るために。
⑤	1-41 から	7処分印象 AI: 天皇杯出場不可の知らせを母親から聞き、残念だと思った。
⑤	1-45 から	7処分印象 AI: 天皇杯出場不可になり、サポーターがいらいらしたと思われたが、実際はそうではなかった。
⑤	1-51 から	7処分印象 AI: サポーターは応援したいが、選手に迷惑をかける行為はやめてほしい。
⑤	1-107 から	7処分印象 AI: 父親は、レッズが来年の天皇杯に出られないことを知り、「そうなんだー」「へえー」としか言わなかった。
⑥	1-104 から	7処分印象 AI: 天皇杯の出場権剥奪とサポーターの出入り禁止についてのジャッジについて、仕方ないと思う。
⑥	1 から	7処分印象 AI: 当事者や現場にいた人は処分を受け、天皇杯に出場できない。サポーターには重みが伝わっていない。対処が必要。
⑥	1 から	7処分印象 AI: ダメージを感じない人は入場禁止になり、チームは天皇杯に出られなくなった。しかし、軽く思っている人もいる。
⑦	1-79 から	7処分印象 AI: レッズの天皇杯出場資格剥奪は選手には罪がないが、貴重な公式戦の場であるため、違う手段があったのではないと思う。
⑨	1 から	7処分印象 AI: 過去の処分が現在の現象に影響している可能性がある。
⑨	1 から	7処分印象 AI: Jリーグが罰金2000万円を課せられたが、サポーターにはあまりダメージはない。
⑨	1 から	7処分印象 AI: 罰金は抑止力にならない。受け止め方次第である。クラブやサポーターがどう受け止め、対処するかが重要。金額だけではない。
⑨	1-39 から	7処分印象 AI: 天皇杯出場権剥奪は選手にとってつらく、サポーターにも大きなダメージを与える。
⑨	1-43 から	7処分印象 AI: Jリーグの立場からコメントは難しいが、協会の処分にはリスペクトする。
⑨	1-47 から	7処分印象 AI: トラブルが繰り返された可能性を指摘。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 浦和レッズに科せる処分は天皇杯参加資格剥奪が譴責。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 浦和レッズを処分することしかできないJFAは、サポーターに効果的な罰則を科すことは考えていない。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 個人は処分済み。クラブには罰則(天皇杯参加資格剥奪)がある。
⑩	1 から	7処分印象 AI: クラブの運営管理責任があるという規則に基づき、複数回の事案が発生したことを考慮して、規律委員会が処分を下した。
⑩	1 から	7処分印象 AI: JFAが13件の事案を分析中。今回の事案も分析中。積み重なっていることは事実。
⑩	1 から	7処分印象 AI: JFA懲罰規程には挑発罰則なし。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 挑発的な発言は規程に抵触するが、罰則はない。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 選手は敗戦し、サポーターに不快な思いをさせたことは反省すべき。大会出場が減ったことは残念。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 天皇杯での優勝がACL優勝の鍵。大会は小さく、自分にとっても重要。一つの大会がなくなったことは残念。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 職業を奪われた感覚がある。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 同志にも責任があるが、ペナルティは親だけが受けるのは不公平。
⑩	1 から	7処分印象 AI: サポーターの責任の取り方が分からない。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 大会減少のペナルティが不適切かもしれない。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 個人にとって大きなペナルティでも、全体から見れば一人のペナルティに過ぎない。大きさの感覚が異なる。
⑩	1 から	7処分印象 AI: サッカーの試合で問題を起こした場合、罰金をサポーターが払うべきだという意見がある。
⑩	1 から	7処分印象 AI: サポーターと選手は対等であるなら、罰も対等に受けるべきだという意見。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 痛みを分けるのは難しい社会。伝え方も難しい。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 共通の目標を持つなら、同じ痛みを分かち合うべき。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 処分は相応しい。皆が正しい方向に進むなら、受け入れる。
⑩	1 から	7処分印象 AI: クラブは「罰金を払う」という申し出を受け取らず、それはできないと言った。
⑩	1 から	7処分印象 AI: 自分たちに問題があることを認め、何百万円何千万円と稼ぐことは大変で、サポーターの想いを無駄にしていることを申し訳なく思っている。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 名古屋サポーターに対する行為は異常で常軌を逸している。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 浦和レッズサポーターが暴力行為を行い、相手のゴール裏まで威嚇することは常軌を逸している。天皇杯での発煙筒事件と同様に。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: ピッチは聖域であり、降りることはない。サポーター同士の対立があっても、入ることはない。異常な光景。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 予想外の事態に遭遇したが、起きるつもりだった。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 名古屋サポーターの女性と子供が驚きや涙を見せる映像。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 浦和レッズのサポーターがゲームに押し寄せ、子供達がゴール裏で不快な思いをしていた。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 名古屋サポーターは、強い怒りや不安、恐怖を抱いている可能性がある。子供を連れて行くことは危険で、女性も危機感を覚える。運用を変える必要がある。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: スタジアムに行けない可能性がある案件はインパクトが大きい。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: 日本のサッカーの熱狂的なサポーターは貴重で、平和な日本での熱気はヨーロッパや南米のクラブに匹敵する。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: ダメなもの考えないで捨てるべき。
⑩	1-57 から	81トラブル印象 AI: 問題を起こした当事者に責任がある。ダメなのはダメ。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: スタジアムでの試合は難しいが、大人として対応しよう。未成年ではないので、許容レベルを超えたと思う。
⑩	1 から	81トラブル印象 AI: スタジアムは地域に根差したお祭りや違い、さまざまな人が集まるため秩序を保つことが困難。
⑩	1 から	82悪いのは誰 AI: 浦和レッズのサポーターがチームバスを取り囲んで発煙筒を振りかざしたり、相手バスを囲んだりする事件が起きている。また、ビジュアルを出さない予定だったが、出してしまい、主催者が激怒したこともあった。
⑩	1 から	82悪いのは誰 AI: サポーターの批判を受けたが、事情聴取は行われなかった。批判内容はサッカー界や試合会場・JFAの管理に対するもの。
①	1 から	8トラブル印象 AI: 天皇杯での自身の行動が選手に打撃を与えたことを反省し、選手のために活動していることを再確認。高校時代の仲の良かった選手を含め、全員に被害がおよぶことを強く感じた。家族にも影響がおよぶことを考え、自分の目的に反する行動をしたことを悔やんでいる。
①	1 から	8トラブル印象 AI: 選手やクラブだけでなく、家族も考慮すべき。処分は目的に反する行為であり、次の処分はクラブ存続に関わる。危機感が大きく、選手、クラブ、サポーターにとって得るものはない。
②	1 から	8トラブル印象 AI: 今回のことは予見できた。負けたときは考えないが、挑発されるシーンも予見できた。
③	1 から	8トラブル印象 AI: ルールを守ることが大原則。悪い人間でもルールを守る。
③	1 から	8トラブル印象 AI: クラブのルールに従いたくないが、処分や迷惑をかけたくない。
③	1 から	8トラブル印象 AI: 安直に行くと人生を台無しにすることがある。試合に来られないだけで人生は台無しになっていないが、注意が必要。
⑤	1-39 から	8トラブル印象 AI: チームのサポーターがトラブルを起こすことについて、答えは「駄目だとは思いますが」。
⑤	1 から	8トラブル印象 AI: 応援は嬉しいが、試合なくなるのは嫌。
⑦	1 から	8トラブル印象 AI: レッズサポーターがグランバスやグランバスサポーターにあおりをかけた。J1同士の対戦はこういうものなのかと驚いた。
⑦	1 から	8トラブル印象 AI: 愛知のサッカーを楽しく見たいサポーターに怖い思いをさせたこと、全国ニュースで映像が取り上げられたことが残念。主管の私たちは犠牲者ではない。
⑩	1 から	91選手対応 AI: 浦和レッズにはプレッシャーに負けないメンタリティを持つ選手が在籍する。それがクラブの強さの秘密。
⑩	1 から	91選手対応 AI: 選手は結果を出し続けることが唯一の仕事。事態を招かないように努める。
⑩	1 から	91選手対応 AI: サポーターは同志であり、リスペクトを持つ。クラブに対するサポートに感謝。
⑩	1 から	92個人情報 AI: 2014年3月8日、鳥栖戦での「日本人限定」問題でグループが解散。以降、個人で活動。
⑩	1 から	92個人情報 AI: 「Japanese Only」事案に関わったが、現在は中立的・第三者的な立場で話を進める。
⑩	1 から	92個人情報 AI: 自分は「プレーキを踏む」立場を担ってきた。
②	1 から	99回避 AI: スタジアムで起きることはない。
⑦	1-31 から	99回避 AI: 会場でのトラブルを避けるには、やらないことが一番。
⑦	1-43 から	99回避 AI: リスペクトがあれば、話はなかったと思う。
①	1 から	9悪いのは誰 AI: 自分がそう捉えられることをして、無期限の出入り禁止処分になった。
②	1 から	9悪いのは誰 AI: 名古屋でTシャツを破る暴力行為がある。被害者は殴られたと思う。Tシャツを引っ張ると破れることも、暴力行為として解釈される。
④	1 から	9悪いのは誰 AI: マスコミはウケる報道をしたがる。レッズも被害者の一面がある。
⑦	1 から	9悪いのは誰 AI: 下りた人に責任がある。

報道実績一覧

社名	報道日時	タイトル	URL
NHK	2024年2月17日(土)	浦和レッズ サポーターの暴力行為問題受け再発防止へ提言報告	https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240217/k10014361751000.html
共同通信	2024年2月16日(金)	クラブは毅然とした対応を 浦和サポーター暴徒化で第三者委	https://news.yahoo.co.jp/articles/49aed7e1d86783ffa2cef2fad49441b303bb365
日テレニュース	2024年2月17日(土)	元浦和レッズ阿部勇樹がサポーターに思いをぶつける「仲間がミスしたら再びミスが起きないようにサポートする。これがチームプレー」	https://news.yahoo.co.jp/articles/3aa5ce488b904633e340bf31b8ef92d0b0db740a
毎日新聞	2024年2月17日(土)	浦和サポーター暴徒化の原因は「リスペクト欠如の体質」 第三者委	https://mainichi.jp/articles/20240217/k00/00m/050/096000c
埼玉新聞	2024年2月16日(金)	クラブは毅然とした対応を 浦和サポーター暴徒化で第三者委	https://www.saitama-np.co.jp/articles/67534
日刊スポーツ	2024年2月16日(金)	【浦和】サポーター暴徒化「第三者委員会」公開シンポ 最大の動機「売られたけんかを買う」気質	https://www.nikkansports.com/soccer/news/202402160001449.html
サンスポ	2024年2月16日(金)	J1浦和「第三者委員会」公開シンポ開催 選手「自分の仕事を奪われた」	https://www.sanspo.com/article/20240216-6NHL4RL3KZCUJDDBNOL5S7IH XU/
デイリースポーツ	2024年2月16日(金)	浦和がサポ暴動でシンポジウム開催 今季天皇杯出場権剥奪に主力選手は「仕事を奪われた」OB阿部勇樹氏は「選手も、サポーターが受けたダメージも大きい」	https://www.daily.co.jp/soccer/2024/02/16/0017337432.shtml
デイリースポーツ	2024年2月17日(土)	サポーター暴徒化問題受けJ1浦和が公開シンポジウム 天皇杯出場権剥奪に主力選手「自分の仕事を奪われた」	https://www.daily.co.jp/soccer/2024/02/17/0017338096.shtml
スポニチ	2024年2月17日(土)	浦和 サポ暴徒化問題でシンポジウム開催 第三者委「“当たり前”が社会の規範からズレている」	https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2024/02/17/kiji/20240217s00002000009000c.html
スポニチ	2024年2月16日(金)	公開シンポジウムで第三者委員会が浦和に厳しい指摘「内部の当たり前が社会の規範からズレている」	https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2024/02/16/kiji/20240216s00002179655000c.html
スポニチ	2024年2月16日(金)	浦和が第三者委員会の公開シンポジウムを実施 ヒアリングに応じた選手「仕事を奪われた」	https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2024/02/16/kiji/20240216s00002179613000c.html
フットボールゾーン	2024年2月17日(土)	浦和サポ暴徒化問題、防止行動は「確実に実行」 OB阿部勇樹氏も懇願「2度とないように」	https://www.football-zone.net/archives/511122
サカノワ	2024年2月16日(金)	【浦和】阿部勇樹さんスピーチ[全文]「仲間がミスしたら、二度とそのミスが起きないようにサポートする。それがチームプレー」。サポーター問題を受けた公開シンポジウムで	https://sakanowa.jp/topics/81974
スポーツ報知	2024年2月16日(金)	「浦和内部の『当たり前』が社会の規範からズレている」 サポ暴徒化、第三者委員会が強く指摘	https://hochi.news/articles/20240216-OHT1T51259.html
スポーツ報知	2024年2月16日(金)	浦和サポ暴動「売られたケンカは買う」「ナメられたら終わらない」 独特気質が後押し…第三者委が分析	https://hochi.news/articles/20240216-OHT1T51258.html
スポーツ報知	2024年2月16日(金)	浦和OB阿部勇樹氏、サポ暴動問題に「ダメなものダメ…」 シンポジウムで約14分間の悲痛な訴え	https://hochi.news/articles/20240216-OHT1T51254.html
スポーツ報知	2024年2月16日(金)	浦和サポ暴動で天皇杯参加資格はく奪…主力選手「仕事を奪われた」 第三者委公開シンポジウムで報告	https://hochi.news/articles/20240216-OHT1T51193.html

東京スポーツ	2024年2月17日(土)	J1浦和サポーター暴徒化問題「バス囲み、も撲滅へ「冷静な状況で話し合うのが良い方法」	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292509
東京スポーツ	2024年2月16日(金)	J1浦和「暴徒化問題」で…サポーターから意見「設備さえJ1クラスなら起きなかった問題」	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292482
東京スポーツ	2024年2月16日(金)	浦和OB・阿部勇樹氏が「サポ暴徒化、問題で悲痛訴え「積み上げてきたもの失ってしまう」	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292476
東京スポーツ	2024年2月16日(金)	J1浦和の第三者委がサポーターの「越権行為」を問題視「思いが強いあまり、一部の過激な応援に」	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292469
東京スポーツ	2024年2月16日(金)	J1浦和サポーターの独特気質「売られたケンカは買う」 暴徒化問題で第三者委員会が指摘	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292464
東京スポーツ	2024年2月16日(金)	J1浦和が天皇杯「暴動、問題で謝罪 公開シンポジウムで	https://www.tokyo-sports.co.jp/articles/-/292458

浦和レッドダイヤモンド株式会社 広報によるリサーチ(2024年2月17日時点)

あとがき

第三者委員会は、事案の調査分析だけでなく、その背景にある浦和レッズのサポーター文化と、地域に支えられたクラブの成長、応援の熱意の裏にある意識の特徴など、短期間で許される限りの理解を深めるよう心がけてきた。サポーターやファンの方々、クラブ、サッカー統括組織など、多くの関係者のヒアリングもさせていただき、真摯で率直な回答を得られたことに、この場を借りて深く御礼を申し上げたい。多くの関係者の言葉の底には、浦和レッズやサッカーに対する熱意や思いが流れており、そのために「何かを変えなければ」との意識もあった。何をおいてもそのことが、印象に残ったということを申し添えたい。

この報告書にしたための調査分析と提言は、客観的な視点から見た要因と対策案を示し、クラブ、サポーターをはじめとする関係者の方々に、より広い視野から考え、更なる行動変容を起こしていただくための手がかりであると考えている。逆にいえば、浦和レッズの未来を担う方々が、第三者の視点を受け止め、考え、行動や認識を変えていく方向性を見いだして下さらなければ意味はない。

なぜ変わらなければならないのか。一つは、浦和レッズ内部、クラブとサポーターがともに考えて来た「あたりまえ」が、日本社会の考える規範とずれてきているからだ。ガバナンスという言葉があるが、実はガバナンスの規範は、その時その時の社会の考え方が決めるという。スポーツがより影響力を持つようになった今の日本社会は、その負の部分にも厳しい目を向け、行きすぎた行為を容認しない。2023年8月の事件とそれに対する厳しいペナルティは、その象徴だとも言える。社会の「見方」に思うところがあったとしても、それに反発するだけでは、自己を見つめ直し、変わるきっかけを失ってしまう。

もう一つは、このままでは一部の行為が、浦和レッズが培ってきたサッカー文化の良さを変質させてしまうからだ。「自由」とは、享受する側にも責任を生じさせるものなのに、無責任な自由と勘違いしている者がいる、そんな自省も聞いた。無責任な自由は、最も大切であるはずの選手たちやクラブに負担をかけ、浦和レッズの未来を蝕んでしまう。芽はいずれ大きくなり、浦和レッズそしてサッカーのイメージを変えてしまう。それは本当にもったいないからだ。

浦和レッズは、素晴らしい熱量を持っている。それはサポーターから選手を目指す若者まで、人々の生き方にまで及んでいく求心力で、皆を結びつける力となり、誇りとなり、かけがえのない居場所ともなる。一番大切なものを守り続け、未来に生かしていくにはどうしたらいいのか。それを皆で考え、自発的に行動していただきたい。「目指している浦和レッズの姿というのは、皆同じだと思っている」。公開シンポジウムでの阿部勇樹氏の発言には、会場から大きな拍手が湧いた。浦和レッズを支えてきた人々の力、その強さを知る彼の思いが共鳴を呼んだからだ。

浦和のサッカー文化が、皆を結びつける居場所であり続け、将来の世代の誇りと希望であり続けること。人々が抱く夢を掴むことなく、生かし続けること。それが、浦和レッズを守り続けることになる。

本当の「格好良さ」を目指し、流れを変えていっていただきたい。

第三者委員会の活動およびシンポジウム開催に当たっては、事務局を担った浦和レッズの方々、報告書の制作を担当した佐川印刷(株)北関東支店をはじめ、多くの助力をいただいたことを謝意とともに記しておきたい。ここにまとめた知見が、浦和レッズとスポーツの、今後の発展に寄与する一つの指標になればと願う。

第三者委員会副委員長

結城 和香子



**URAWA
REDS**